

と思つて、こわくながら近寄つて、臺所と六疊の茶の間とを隔てる障子の穴からそつと窺いて見た。見るとギョツとした。姉さんが袂を顔に押しあて、臺所の板の間に突臥してゐる。銀杏返の根が横にまがつて、衣紋をぬいた白い首筋に黒い毛が亂れかかつてゐる。恰好のよい撫肩がびくりと震盪するやうに震へてゐる。突伏した頭のそばに赤い櫛や青い玉の簪が落ちてゐる。姉さんの傍に小母さんが寒いのに腰巻一つの素裸かになつて、根の脱け落ちた髪を振り亂して、冷い板の間に身を横倒しに投げ出してのたうち廻つてゐる。着物や帯などが彼方此方に散亂してゐる。

『さあ、殺せ！ 殺してくれ！ えゝつ、殺してくれ！』

小母さんは足や手をバタ／＼やりながら、押しつぶされたやうな聲で絶え入るやうに叫びつゞける。さうかと思ふと、

『殺さねえか！ 淫婦め！ 毒婦め！ 手前は毒婦だ、淫婦だ！』

さう云ふ怖ろしい呪ひのやうな悪罵が小母さんの口から投げ出される。すると、

『へッ、淫婦だつて、何が、淫婦だ！ な、なにが、毒婦だ！』

顔に押しあてた袂の中から、怒りや口惜しさや悲しさなどに壓倒された杜切れ／＼の姉さんの

叫び聲が、絶え入るやうな歎歎と共に押し出される。

『淫婦だ！ 手前は、淫婦だ！ 毒婦だ！ さあ、殺せ！ 毒婦に殺されりや本望だ。手前も親を殺しや本望だらう。さあ早く殺せ！ 殺して呉れ！ えゝつ、殺せ、殺してくれえゝゝゝ！』

咽喉から血を絞り出すやうな聲で小母さんがなほも叫びつゞける。

私は全く驚天して了つた。どうしたらいいだらうと云ふ心配で小さい胸が一杯に塞がつて、たゞおろ／＼する許りであつた。而も、臺所と障子一枚を隔てた此の六疊の茶の間には、曾祖母が長火鉢の傍で針仕車をしてゐたのである。臺所の物音や叫びの聞えぬ筈はないのに、曾祖母は何處を風が吹くと云ふ無關心さで、大きな丸い眼鏡をかけて平然として針を運んでゐる。私は曾祖母の態度が齒痒くもあり憎らしくもあつた。とう／＼堪へ切れなくなつて、曾祖母の傍へ駆け寄つて、其の骨だらけの肩をゆすつた。

『おばあさん、姉さんと小母さんが——』

老婆の耳のそばで私はそれだけ云つた。それだけしか云へなかつたのだ。すると曾祖母は始めて手を止めて、眼鏡越しに私の顔を見た。さうして、皺に疊まれた眼尻に更に皺をよせて口元に

笑を持たせた。

いよよ、心配しないで。今におばあさんが停めてやるからの。それよか、亭坊はの、いつものお菓子屋へ行つて、餅菓子を買つて來な、の？ ほれ、これを持つて行つて——」

曾祖母はさう云つて、針箱の抽出から銀貨を一枚出して私の手に持たせた。それで私は仕方なしに、あとが氣になりながらも菓子を買ひに家を出た。尤も一方には此の怖ろしい嫌な場合から一時でも免れ得ると云ふ子供相應の利己的な嬉しさはあつた。

買つて歸つて來て見ると、曾祖母は依然として針を持つ手を止めてゐなかつた。少し靜かにはなつてゐたが臺所の歎歎や叫びは依然として聞えてゐた。

「はいッ、おばあさん！」

私が少しぢれつたさうな反抗的な聲でさう云つて餅菓子の包みを曾祖母の眼の前に突き出すと、曾祖母は例の如く靜かに顔をあけて大きな丸い眼鏡越しに私を見た。

「買つて來たかの？ やれ／＼御苦勞だつたの。——どうれ、お茶でも入れようかい。」

老婆は針を置いて眼鏡をひよいと額の上に摺りあけると、長火鉢の上の土瓶に鐵瓶の湯をさして、菓子の包みを開いた。

『さあ、殺せ、殺してくれ、この淫亂女め！』

臺所からは小母さんの荒々しい聲がまた聞えた。それにからんで姉さんの涙聲が洩れて來た。

茶の間の曾祖母は其の騒ぎを耳にすると、可笑しくてだか、面白がつてだか、例の芒の尖きで裂いたやうな一文字の口の兩端に笑を含ませて、皺くちやの眼をバチ／＼としばたゝいた。それから嘎れた聲で臺所の方へ呼ばはつた、

『お繁、お繁、もう止しなよ。もう判つたからの、いよかけんに止めて、こゝへ來てお茶でも呑みなよ。お冬もな、そんなに餓鬼みたいに泣かんで、こゝへおいで。仲直りに餅菓子を奢つてやつたからの。——やアれやれ骨の折れるこつちや。』

老婆はそれだけ云ふと、サツサと自分だけ茶をついで、大福を半分ちぎつて齒の無い口に頬張つた。さうして其の口を一文字に結んだ儘もぐ／＼と頻りに上下させた。——私は今考へると、此の曾祖母は全く大膽不敵な、男でさへ足許にも及ばぬ女であつたと思ふ。

死物狂ひの——少くとも子供の私にはさう見えた——此の喧嘩騒ぎも、曾祖母の人を喰つたやうな仲裁で兎も角表面だけは治まつた。併し其後も勿論小さな争ひは仕切り無しに二人の間に繰り返されたのである。氣が弱くて、苦勞性で、夫や姑から無理な叱言を云はれたり手荒な事をさ

れたりしてもいつも平訛りに訛つてゐたあの柔順な小母さんが、どうして斯う邪慳に氣荒になつたのであらうか。——大人なら無論不思議に思つて問題にするのであるが、幼き私はたゞその小母さんの著しい變化を事實として受け入れただけで、何故かと云ふ疑問は起さなかつた。

其内にまた新しい事實が私の眼に映つて來た。それは姉さんの身體の恰好が變つて來た事であつた。妙に眼がくほんで、頬の肉が落ちて、肩の骨が尖つて、その反對に胸から下の方が脹らんで來たのであつた。けれども私はこれもまた別段不思議には思はなかつた。ほかの女にもよく見受ける事であるから、女と云ふものは誰れでも時々かう云ふ體の恰好になるものだらうに解釋してゐた。無論、家の人の誰れもこの新しい事實に就て私に説明しなかつた。従つて私は、かうした身體の變化からどう云ふ結果が生れるかと云ふ事さへも知らずにゐた。其内にこの變化はだん／＼極度に進んで、眼に立つやうになつて行つた。

或日私が平日の通り學校から午頃家に歸ると、家の内が妙に取りこんで、只事でない氣配がしてゐた。併し子供の事であるから氣にも留めないで、

『たゞいま——』

と振れ込んでおいて、學校鞆と草履の袋とを玄關に投げ出すと其儘座敷へ駆け上らうとした。

すると曾祖母が慌ただしく奥から出て來て、私を捉へて小聲で憚るやうに囁いた。『亨や、亨や、姉さんに赤ン坊が生れたんだよ。だから、奥へ行つちやいけないよ、いゝかえ、赤ちやんのそばへなんか決して寄つてはいけないんだよ。』

さう云はれて私は、襖の一枚あいてゐる奥座敷に、ひよいと眼をやつた。手拭の鉢巻を額で結んだ、蠟のやうに蒼白く透き徹つて見える姉さんの顔が、括枕の上に仰向きに載つてゐるのがチラと見えた。傍には二枚折の屏風の片袖だけが見えてゐた。あの屏風の蔭に赤ン坊がゐるに違ひないと私は直ぐ考へた。併し、決して見てはいけないと云ふのだから、直ぐ行つて見るわけには行かなかつた。なぜ見てはいけないのだから解らなかつたけれど、理由などを尋ねれば、例の曾祖母の事だから、『なんだ子供のくせに。——いけないと云つたら、いけないんだ』と睨みつけるに決まつてゐるから、尋ねる氣にもなれなかつたのである。けれども、見てはいけないと云はれれば尙更見たくなる。無論赤ン坊と云ふものは今迄にも世間で度々見てゐるし、別段珍しい者ではないが、特に自分の家に生れた赤ン坊と云ふ所で私は興味と好奇心とをそゝられないではゐられなかつた。それで到々私は戒めを破つた。どう云ふ隙をねらつて見たか、今はよく覺えてはゐないが、ともかく見た。見ると私は全く意外な感に打たれた。どうしても人間の子とは見えない、猿

としか思はれない。私がそれまで生れたての赤ン坊を見なかつた爲でもあらうが、必ずしもさう許りではない。赤ン坊は黄色い鬱金木綿の着物で包まれてゐたが、其の鬱金木綿の外に出てゐる顔が、小さくて、赤くて、穢くて、頭ばかり不相應に大きくて、——それだけならいゝのだけれど、不思議な事には、鼻の下の涙溝が裂けてゐる。上唇が眞中から二つに割れてゐるのである。それで、どう考へても猿のやうにしか見えなかつたのである。私は其時、赤ン坊と云ふものは生れたては皆斯う云ふ口をしてゐるものかと思つて見たが、今迄見た何んな小さな赤ン坊でもこんな口をしてゐた者はないので、もし赤ン坊が生れたては皆斯う云ふ口をしてゐるものとすれば、それが何時の間に普通の口に變るのだが、甚だ不思議に思へた。ともかく餘り奇妙に堪へないので、私は早速曾祖母の所へ行つて、内密のやうに聲を小さくして訊いた、

『宅の赤ン坊は口が變だね、ねえ、おばあさん。』

私はさう云つて了つてから、ハツと勝を冷した。赤ン坊を見てはいけなかつたのだ。案の上曾祖母の眼は唳しく光つて、聲が尖つた。

『見てはいけないと云ふのに、なぜ見た!? 云ふ事を聴かない餓鬼だ。あれ程云つておいたに、わからないか!』

曾祖母は私を睨みつけた。けれども暫くすると急に眼を柔けて、賺すやうに優しい聲で云ひ添へた、

『見たら仕方がないからの、赤ン坊が三ツ口だなどと姉さんに云つてはいけないぞ。もしさう云ふと、姉さんは病氣が悪くなつて死んで了ふからの。いゝかえ、享坊はお惻口だの、忘れても云つてはならんぞえ。もしこんど云ふ事を聴かないで云つたりなんかすると、それこそおばあさんは承知せんぞ。いゝかえ、判つたらうの。』

無論こんどは戒め通りを守つた。赤ン坊の顔に就ては不思議でならなかつたけれど、そんな事を訊いてまたどんな叱言を云はれるか判らぬと思つて、以後は決してそれに觸れなかつた。所が更に不思議な事には、それから二三日経つと其の奇妙な赤ン坊が何時の間にか宅からなくなつて了つた。死んだのではない。死んだのなら、なんほ赤ン坊でも葬式ぐらゐる出す筈であらうが、そんな氣配は全く無かつた所を見ると、死んだものとは思はれない。どこかへ、内密でやられたに違ひない。併し何處へ何時遣られたのだから、私はまるで知らなかつた。うっかり訊いて叱られてもするとつまらないと思つたので、到々訊かずに知らぬなりに済ました。其内に幼い私の頭の中から其の赤ン坊の影が薄らいで終に消えてしまつたので、現在今日に至るまで私は不思議な赤

ン坊の行方を知らないのである。

その赤ン坊を産んだ姉さんは、自分の赤ン坊の顔を見る機会を得たかどうか、また生後数日にして母の傍から奪ひ去られた不幸な赤ン坊の其後の運命を知つてゐたかどうか、私には全く判らないが、ともかく暫くの間を牀上に送つてから姉さんは再び健かな身になつて起き出るやうになつた。所が、その未だ産褥を離れぬ時であつた。或夜のこと、奥の八疊の姉さんの寢牀の裾の方に火燵をして私と曾祖母と二人であたつてゐると、大伯父が小母さん相手に晩酌を傾けてゐる次の茶の間の方から、何か云ひ合ひのやうな尖つた聲が聞えて來た。私はまた何事か始まるのではないかと思つて、不安になりながら身を少し唐紙の方へ摺り寄せて隙間からそつと覗いて見た。大伯父が赤くほてつた顔を八分心のランプにテラ／＼光らせながら、ギロリとした眼をして、右の手に盃を持つて跌をかいてゐる。小さな茶卓を隔てゝ其前に、例の眉を青く剃つてお齒黒をつけた小母さんが、爛徳利を持つた手を膝において座つてゐる。

『よくもこんどは俺になすりつけやがつたな。』

大伯父は口の傍に持つて行つた盃の中を視詰めながら忌々しさうに左う云つた。

『何も今更そんな事を云はないだつていゝぢやありませんか、何もかも私が知つてゐますよ。』

さう應じた小母さんの聲も針を含んでゐた。

『何んだと！』大伯父の眼が小母さんの顔へ向つて光つた。『おつに絡んだ事を云ふな。ようしツ、手前達は左うやつてみん、なして俺の面に泥を塗りやがるんだな！』

そうつと見てゐた私がギクリとした程聲が高くなつた。

『まあ、お父つあん、今夜はお止しなさいな。あゝやつてお冬もまだ日立たないで寝てゐるんだし、そんなに云はなかつたツて判つてゐる事なんだから。』

『喧しいやい！』

聲と共に忽ち大伯父の手から盃が飛んだ。同時に、跌を組んでゐた足が上がつて、ガラ／＼と茶卓が前にのめつた。汁や茶を入れた椀やら鉢やら皿やらが目茶苦茶に疊の上に散つた。

大伯父の斯うした場合に決して小母さんは逃げ出さなかつた。無論手抗ひをするのではなく、たゞ平詫りに詫つて其の爲すがまゝに任すのであつた。私などが子供心にハラ／＼して、逃げなければ何んな怪我をするか知れないと氣を揉んでも、小母さんは其場を離れないで大伯父の亂行をなだめようとするのが常であつた。従つて大抵騒ぎは一時の内輪だけの騒ぎで終つて、後にも外にも禍を及ぼさなかつた。此夜も矢張りさうであつた。

併し私はこんな事件が産褥にある姉さんにどんなに酷く障りはしないかと思つて心配したが、心配した程もなく、姉さんは其後暫くすると床を離れるやうになつた。床を離れた姉さんは、もう前のやうに不恰好な姿ではなかつた。まだ血色はよくなかつたが、其爲にまた顔が透き徹るやうな白さを持つて、うしろで無雑作に先を丸めて束ねた病後の黒髪のほつれを面靨れした頬になびかせて、ほつそりした胸にきりりと帯を締めた姿は、數箇月前の美しさとは全く違つた美しさのやうに子供ながら思へた。斯く容姿が濃より淡に變つた如く、彼女の小母さん其他に對する態度にも之と同じ傾向の變化が現れた。姉さんはモウ前のやうに滅多に昂奮したり泣いたり鬱いだりふてくさつたりしなくなつた。大伯父や曾祖母から叱言を云はれたり小母さんから妙にひねくくて出られても、につこり笑つて『どうも濟みませんでした』と頭をさけて手際よく受け流すと云つたやうな具合になつた。彼女の態度は自由な奔放さを以て何んの滯りもなくスラ／＼流れるやうであつた。其の替り純な眞情や温さは失はれて不純な技巧と冷さが之に代つたやうに見えた。悪く云へば擦枯らしになつたとも云へよう。或はその容姿の如く感情までも濃より淡に變つたとも云へよう。ともかく姉さんの斯うした態度の變化は子供の私にも臙氣ながら意識せられた。これまで美しいそして温い姉さんに唯一の住むべき世界を見出してゐた私は、何んとなく

物足りない不平と遣る瀬ない淋しさとを感じないわけには行かなくなつた。

其内に間もなく私にとつて大きな事件が來た。生れて未だ顔を知らない私の父が、所謂遠い西の國から此の家に遙々訪れて來た事であつた。これは私にとつて大事件である筈に相違なかつた。併し實際は其頃の私は之を少しも大事件とは思はなかつた。父によつて生を此世に受けたと云ふだけで、受けてからの生活は父無くして満たされ支持されて來た私は、父に對して特殊な興味も期待も持つてゐなかつたからであらう。我が子の住む此家を訪れた父は、子たる私にとつて、忽然として來り飄然として去つた一介の旅人に過ぎなかつた。而も、私の前をたゞ掠め去つた此の旅人が、掠め去つた後の私の生活にどんな怖ろしい影響を残すに至つたか、誰れか之を豫知する事が出來たであらう。

父が何處にゐて何をしてゐて、何處から何んの爲に此家に來たかと云ふ事を私は知らなかつた。後になつて得た知識によれば、父は何んでも鐵道方面の官吏をしてゐて其頃京阪地方及び九州北部を轉任して歩いてゐたと云ふ事であるから、此時も其の方面から何か官邊の用務を帯びて東上した序でに此家に立ち寄つたものと思はれる。庭前に石榴の花の咲き初めた五月の終り頃であつた。大きなトランクと革の手提鞆とを蹴込みに載せて俵で乗りつけた父の、頭髪を綺麗に分

けて八字髭を生やした、眉の割合に薄くて眼の長く切れた、薄茶色の帽子に鼠色の脊廣を着た其姿の第一印象が、私の頭に今もハッキリ残つてゐる。何しろ下町に育つて来た私は、洋服を着た者と云へば学校の先生以外に近付きが無かつたので、父の洋服姿に對しては多大の評価をしたものらしい、其姿を見ると私は直ぐ、父は何んでも豪い官員さんに違ひないと思ひ込んだ。それだけまた父を初対面から近付き難い者のやうに感じたのである。

父を此家へ迎へて心から喜んだのは、久しぶりに孫の顔を見た曾祖母である。

『おゝお、晋や、よく来たの、大層立派になつたのう。』

老婆は老いの眼をしばたゝいて、まるで十か九つの孫にでも對するやうな云ひ振りである。

『うむ、晋三郎か、まだ生きてゐたか。』

始めから皮肉のやうな冗談を云つて應揚に迎へたのは大伯父である。

『まあ、晋さん、ほんとに何年振りでしたかね、晋さんも久しく見ぬ間に大層立派におなりだが、そら、これがお前さんの息子さんの享坊ですよ。——享や、お前のお父さん、さあ御辭儀をおし。』

さう云つて私を傍へ引きよせて私の頭を抑へてお辭儀をさせたのは小母さんである。

『始めまして——』

と例の如く、つこりお愛相笑ひをしてそれでも慎ましかに挨拶をしたのが姉さんである。

私は小母さんにお辭儀をさせられたきりで、横座りに座つたまゝ、きまり悪さうに黙つてモヂくしてゐた事を憶えてゐる。

『どうも皆さん、ほんとに長い間御無沙汰致しまして、何んとも申譯のない次第で、なに、決して心に思はぬ事は無いのですけれど、何分にも遠い所で勤めをして居ますと、つひ心に任せぬものですから、いやどうも。——享助もお蔭様でこんなに大きくして戴いて、親でありながら親らしい事もしないなんて誠に面目ない次第なんです、これからはこれからとして今迄の所は何分御勘辨下さるやうに。實はお君も、こんど私が勤向きの用でこちらへ参るに就ては是非一緒に行つて早く享助の顔が見たいと云つて聽かなかつたのですが、生憎身重になつてゐるので、からだに障つてはいけぬと無理に押し留めて送して来たやうなわけで……』

父はキチンとした洋袴の膝を窮屈さうに折つて畏つて、大體そんな口調で左う云ふ意味の口上を述べた事を、私は微かに記憶してゐる。

滯在中父の身の廻りの世話は姉さんが一切引き受けてする事になつた。父は大抵毎日午前か午

後の孰れかの半日は俥に乗つて何處かへ出て行つたが、出るにつけ歸るにつけ姉さんは甲斐々々しく働いて、洋服までも自分の手で着せてやるやうな態であつた。そして、始めて會つた人とは思へぬやうに、『兄さん、兄さん』と呼んで馴々しく振舞つた。

私は、父が來てから家の中が急に活氣づいて來たやうに感じた。會祖母はホク／＼喜んでゐるし、姉さんは嬉しさうな顔をしてゐるし、小母さんも晴々してゐるし、子供の私はその渦中に捲き込まれて自然氣が浮き立つのを覺えた。家の内の斯うした氣分だけは、父が其時私に齎した唯一の恩惠であつたと云へる。併しなぜだか大伯父は、始めは皆と一緒に機嫌よく振舞つてゐるが、二三日經つと平生のやうに苦り切つて來て此の和樂の園外に獨り立つてゐるやうに見えた。併し大伯父の苦澁の顔は既に長年見馴れて來たのだから、私は別段不思議には思はなかつた。

あとから考へて見ると、父がこんど來た目的は無論勤務上の用向きが主であつたのには違ひないが、その序でに私を自分の手許に連れて歸るつもりであつた事は疑ひない。そしてその問題が來てから間もなく家人に父の口から切り出されたものらしい。と云ふのは、父が來て四五日經つと小母さんが私を内密で人のゐない部屋に呼んで斯う云つたのである。

『亨や、お前のお父つあんはね、こんどお前と一緒に連れて歸ると云ふんだけど、お前どうだ

い、歸りたいかい？ お父つあんが何んと云つても、お前が歸りたくさへなければ歸らなくつてもいゝんだから。——どうだい、歸りたくはないだらう？ もつと何時までも小母さんや父ちゃんに傍にゐたいのだらう？ ね、さうだらう？』

かう訊かれれば、子供の事だから例令歸りたくとも『歸りたい』とキツパリ云ひ切れる筈のものではない。無論其時の私は此家を去つて父の許へ行きたくはなかつた。前にたとひ少しでも親の愛と云ふものを眞に味はつた事があるのなら必ず私は此時心を動かされたであらう。而もさう云ふ經驗の未だ會て無かつた上に、たとひ此家の空氣が不安で暗くて常に風波の断えぬものであつたにせよ兎も角私は家人の總べてから愛せられて小さな殿様の如く育てられて來たのである。善かれ悪しかれ此家は私の小さな生活を形造つて來た唯一の世界であり、此家が私の經驗の總べてであつたのである。それを、此家を去つて、全く私の經驗の彼方にある父の家へ行くと云ふ事は、年端の行かぬ其時の私にとつて決して氣の進む事でなかつたのは、強ち無理ではないのである。其上まだ一つ、——私は姉さんの傍を離れるのが何よりも悲しかつたのだ。

私は小母さんから、『……ね、さうだらう？』と態よく念を押された時、私は黙つてかぶりをして縦に振つたのである。さうして私の運命はそれで簡單に決定されて了つたのである。今考へれ



ば私は親不孝な子であつた。

曾祖母は勿論、自分に子の無かつた大伯父夫婦は私をいつまでも手許に置いておきたかつたのであらう。私一人がゐる爲に活計に影響を受けると云ふやうなら兎も角、相當豊かに暮らしてゐた上に、今迄實子のやうに手懸けて來た私を急に手離すのは惜しくもあり淋しくもあり、かうやつて育てよおけば自分達の老後に何んかの爲になると云ふ多少の下心もあつて、大伯父夫婦は父の呈言に對して寧ろ反對の態度をとつたものだと思ふ。父の方ではまた、今迄私を放任して預けておいた關係上、大伯父の意志に反して無理にとも云ひ兼ねる義理があるから、強ひて自意を主張しなかつたものであらう。それに父の許には既に私の弟が居り、また三番目の子は今や母の腹に育つてゐたのである。それやこれで父は、今迄通り私を此家に預かつておいて貰ふ替りに今後には私の分だけの經費を任地から送ると云ふ事に話を決めて、此の問題のけりをつけて歸つたと云ふ事は、私が後から考へて當然推察出来るのである。

父の滞在日数は約十日程であつたと憶えてゐる。其間父は、前にも云つた通り、半日は俾で外出したが、あとの半日は家にゐて皆と談話して興じたり、時には姉さんが産後で少し色は衰へてはゐるが仇つほい美しい咽喉を聞かせて父をもてなしたり、それでなければ姉さんが案内役となり、私がお相伴しやうはんをさせられて父と三人で、時としては之に小母さんの加はつた四人連れで、淺草の觀音詣りをしたり芝居見物に行つたりした。さて父が愈々明日は立つと云ふ其の前日であつた、今日が最後だと云ふので例の三人に小母さんを加へた四人連れで午後から淺草公園へ遊びに行つた。私達は浪華踊りを見たり、花屋敷の中を歩き廻つたりしてから、此頃始めて外國から到來したと云ふ活動寫眞と云ふものに這入つて見た。これが私が活動寫眞を見た最初である。何しろ當時は、寫眞の中の人間がひとりでに動く動くと云ふので大評判を取つたものであつた。成程這入つて見ると、正面に普通の人間の二倍もある大きな異人さんが映つてゐて、それがチラ／＼と仕切り無しに動く黒や白の無數の縦線の中でゲラ／＼笑つて見せたり、互ひに脊中こしを擦りつこして見せたりしてゐた。小母さんも姉さんも、不思議だ／＼と云つて感心してゐた。父は好い土産みやげになると云つて喜んでゐた。

活動寫眞小屋を出ると既に夕刻だつたので、傳法院の裏の方の何んとか云ふ大きな天麩羅屋へ上つて夕飯を食つた。それから仲見世通りをブラ／＼歩いて、雷門前の電車の停留場へ出た。其頃は恰度東京に電車の敷かれた時の時であつたと憶えてゐる。

父は其處で立ち留つて、これから電車で日本橋へ廻つていろ／＼土産物などを買い整へて歸る

から三人は一足先へ歸つて呉れるやうにと云つた。

『亭の風を見てやつて下さい、すっかり参つたと見えて、さもなく疲れたと云ふ恰好ぢやありませんか。』

さう云つて父は笑ひながら、

『では一つ、この厄介者を連れて皆さん俵で一足お先きへ歸つて下さい。私も買物が済めば直ぐ歸りますから——』と云ひ添へた。

すると姉さんが分別らしい顔をして父の言葉の尾について云つた、

『では斯うしませう、兄さんは買物をなさると仰しやるんだから、歸りには屹度一人では持ち切れぬ程澤山お荷物がおあんなさるに違ひないから、——ねえ、さうなんでせう?』姉さんは父の顔を見て揶揄ふやうに薄笑ひをした、『ですから私だけお供をさせよう。お母さんは亭ちゃんを連れて先きへ歸つてね。何しろ不案内の土地で兄さん一人だけ放して迷兒にでもしたら奥さんに申譯がないわ。』

そこで私と小母さんとは別れて、其場から直ぐ俵に乗つて歸つた。歸ると小母さんは大伯父から、なぜお冬だけ残して來たかと云つて大變叱りつけられたやうであつた。其夜私は遊び疲れて

早く寝て了つたので、父と姉さんとが何時歸つて來たか知らなかつた。

翌日は五月雨の柔かに降る日であつたと憶えてゐる。大伯父は朝から機嫌が悪かつた。六疊の茶の間で、吸殻を灰吹にはたき落す煙管の音を激しくさせてゐた。私は此の音の鳴り具合で大伯父の機嫌の好い悪いを子供心に推量し得たほど、長い間悲しい経験を嘗めさせられて來たのである。父は、滯留中自分の部屋にあてがはれた奥の八疊で黙々として荷物の整理をした。其の傍で姉さんが頻りに手傳つてゐた。

父は午後の汽車で新橋から立つた。送りには私と姉さんと小母さんが行つた。停車場のプラットホームで別れる時、汽車の窓から首を出してゐる父の眼が濡んでゐるのを私は認めた。それに姉さんの眼がまた濡んでゐた。小母さんだけが平凡な顔をしてゐた。私は胸が塞がつてゐた。父と別れるのが悲しいからではなかつた。父が去つた後の家の空氣が再び陰鬱な殺伐なものに歸るのを豫想してそれが悲しかつたのだ。それに、朝から大伯父の機嫌が悪いので、歸つてから例の晩酌の時にまた何か始まりはしないかと、それが心配でならなかつたのだ。

果して私の案じた如くであつた。父を送つてから三人が俵で家に歸り着いたのは夕方であつたが、大伯父は一人で茶の間に膳を据ゑて、苦い顔をして手酌でグビリグビリやつてゐた。私達が歸

つて、只今と挨拶すると、たゞジロリと眼を光らせて睨んだだけであつた。

皆の晩飯がすんでからの事であつた。弟子の若者達は、雨が止んだから遊びに行つて來ると云つて何處かへ出て行つてしまつた。實はまだ降つてゐただけけれど、親方の機嫌の悪い時は係り合ひになるのを避けて大抵口實を設けて何處かへ外してしまふのが常であつた。曾祖母は次の室へ行つて針仕事か何かしてゐた。たゞ大伯父が依然として盃をおかないので、小母さんと姉さんとお相手に傍についてゐた。私も其傍にゐた。大伯父の眼はいつものやうにドロンとして氣味悪く据わつて、口がへの字型に曲つてゐた。酔の大分廻つて來てゐるのを思はせた。併し始めから黙りこくツたなりで殆んど口を利かなかつた。

所が其内に突然姉さんの顔へ兇しい眼を遣ると、腫物の噴切れたやうにぶつりと口を切つた、  
『お冬、昨夜はどこへ行つてゐたんだ？』

姉さんは一寸顔色を動かしたが、手をあけて軽く自分の胸をつくつと例の如くにつこりした。

『どこへも行きはしませんわ、たゞ日本橋から銀座へ廻つて買物のお手傳ひをして來ただけなんです。』

それがどうして？ と云ふ顔をしてゐる。

『嘘をつけ、買物ばかりで十二時一時頃までかゝるか。』

『そりやア細い物をあつちの店やこつちの店から集めたんですもの、少しは手間がかゝるわ。それに荷物があるから電車に乗らずに俵で歸つて來たんですもの。』

『しらばつくれるな！』と大伯父の聲が高くなつた、『虫も殺さねえ面アしやがつて、圖太い阿女だ。さあ、どこへ行つてゐたか云へ！』

すると小母さんが手を振つて大伯父を抑へるやうに傍から口を出した、

『まあお父つアん、そんなに大きな聲をしなかつて判る事なんだから——』

『喧しい。手前が出る幕ぢや無え。今夜はな、どうしても斯うでも此の阿女ア仕置をしてくれるんだ。——さあ、何處へ行つてゐたか云はねえか！』

姉さんは黙つて了つた。さうして何處を風が吹くかと云ふ濟ました顔で、こゝろもち首を大伯父から背けて銀杏返の髪のはつれをさも煩ささうに掻きあげた。大伯父は眼に憎惡の感情を露骨に現して、姉さんの綺麗な横顔を忌々しさうに視据ゑた。

『お冬、』と大伯父は嚇しつけるやうに底太い聲を出した、『手前はな、誰れかに入智慧されたと見えて、この俺を舐め切つてゐるな。お冬、假りにも俺は手前の親だぞ。』

姉さんはつんと横を向いた。向くと同時に小さな聲で、

『……』と云つた。

これが大伯父に聞えはしないかと思つて、そばにゐた私はヒヤリとした。私は姉さんが早く詫つてしまへばいゝにとハラ／＼してゐると、また小母さんが取りなしに這入つた。

『お冬、お前もよくないんだよ。たとへ晋さんとだつて、あんなに遅くなつて歸つて来るなんて法はないんだからね。さあ早くお父つアんに詫つたらどうだえ。——お父つアん、お冬も決して親を馬鹿にするなんて量見ぢやないんですから、私がまた明日でもよく云つて聽かせますから、今夜の所はマア私に免じて勘辨してやつて下さい。私が此の通り代つて詫りますから——』  
『喧しいつてば——黙つてすツ込んで。——さあ、お冬、云へ！ 晋と二人で何處へ行つてゐるか云へ！』

姉さんは依然としてつんと横を向いてゐる。

『云はねえか！ 云はなきや云ふやうにして云はせるぞ。』

小母さんが氣を揉んで、手を伸ばして姉さんの袂をぐいと引つ張つて、顔をしかめながら氣忙しさに嘯いた、

『お冬、早く詫つてしまふんだよ。濟みませんと云つてしまへば濟むんだから。——さあ、早く、早くさ！』

けれども姉さんは蒼白い顔を横へ向けたまゝ下唇を噛み締めてゐる。

『この阿女アふてくされやがつて。どうするか見ろ。さあ、云ふか云はねえか！』

大伯父はいきり立つて右膝を立てると同時にばらりと片肌を脱いだ。朱で散らした腕一面の例の櫻の花が酒氣に冴えて鮮かに跳つて見えた。

すると姉さんは今迄横へ背けてゐた顔をクルリと大伯父の方へ向けた。と思ふと、薄紅をさした美しい口からいきなり私を吃驚させた言葉がふいと出た。

『どこへ行つてたつて大きなお世話です！』

言葉と同時に姉さんの黒い眼から涙がハラ／＼と迸り出たかと思ふと、姉さんは身を投げ出すやうにぐりと前に突伏した。この結果は知れてゐる。

『な、なんだと！』

大伯父は嚇と眼を怒らせると、肌を脱いだ右の手に膝元の煙管を握り締めて、左手を伸ばして、突伏してゐる姉さんの髪をぐいと引摺んだ。

『あれえッ、おばあさん！ 誰れか早く！』

小母さんが消魂しく叫んで、髪を掴んだ大伯父の腕にしがみついた。私も聲一杯に、  
『おばあさん！ 来て！』と叫んだ。

曾祖母は『慶吉！ 慶吉！』と呼びながら次の室から駆けつけて来て、

『これッ、慶吉！ 馬鹿をするな！』と嗔れ聲で一喝して大伯父の右の腕に嚙りついた。

『えゝッ、放せ、放せ！ この阿女ア叩き殺して呉れるんだ！』

四人の人間が前にめつたり背ろによろめいたりして、どたりばたりと云ふ鈍い音をさせ乍ら揉み合つた。揉み合ふ中から『ひいッ〜』と云ふ苦しい息遣ひが響いた。子供の私は失神したやうに突立つた。所が其内に突然誰れかが来て私に突きあたつたので、ハツと気がつくくと、眞蒼な顔に根の脱けた髪を振り亂して、肩の現れるまで白い胸をはだけた姉さんが、

『亨ちゃん！』

と一聲叫びを残して私のそばを次の室へと駆け抜けた。

『阿女を逃すな！』と大伯父の聲がした。

小母さんと曾祖母とが横に倒れたかと思ふと、大伯父の姿が仕事場に跳り込んだ。

『姉さん！』

私はさう叫んで姉さんのあとを追つた。姉さんは次の室から縁側に出て裸足のまゝ暗い庭に跳び降りた。そして裏木戸の方へ走つて行つた。同時に、

『阿女を逃すな！』と云ふ大伯父の二度目の叫び聲がすると共に、白鞘の長い刀を提げた大伯父の姿が縁側に現れた。それを見た私は全く夢中で、

『父ちゃん、勘忍して！』

と泣き叫びながら遮二無二大伯父の腰にかぶりついた。同時に曾祖母と小母さんが駆けよつて来て、刀持つ手に必死と取りついた。

『お隣りの方、誰れか来て！ 誰れか来て！』と小母さんが叫び立てた。

『えゝッ、こいつら、邪魔をするな！』

大伯父は振り放さうとして力一杯暴れた。其の力に到々突き飛ばされて三人は縁側に倒れた。が、曾祖母は倒れた時既に大伯父の刀を抜き取つて自分の胸に抱き締めてゐた。大伯父は倒れた三人に眼を呉れないで其儘庭に跳び降りると、開け放された裏木戸から姉さんの跡を追つた。起き返つた小母さんが續いて跳び降りて、

『誰れか来て！ 誰れか来て！』

と叫びつゞけながらまた大伯父のあとを追つた。私もまた夢中で庭に跳び降りようとした時、刀を抱いて倒れてゐた曾祖母の手が伸びて私の帯を確りと掴んだ。

『亨坊！ お前は行くんぢやない！ おばあさんのそばに居るんだよ！』

引き寄せて私を抱き締めた曾祖母の眼には涙が一杯溜つてゐた。

其時玄關の格子戸の亂暴に開く音がしたかと思ふと、

『どうした！ どうした！』と云ひながら隣りの出羽屋と云ふ周旋屋の親爺が手に木刀を持って駆け込んで来た。そして縁側に私達の姿を認めると息を弾ませ乍ら、

『火事か、泥棒か？』と怒鳴つた。

『倅がお冬を殺すと云つて追ひかけて行きましたから早く留めて下さい。』と曾祖母が答へると、親爺さんは、

『なに、殺す？ 大將がお冬ちゃんを？——そいつは危ねえ。だが、火事でなくつて安心した。』と云つてから、

『さうして、どつちへ行つた？』と訊いた。

曾祖母は庭の裏木戸の方を指さした。

『ようし！ 心配しなさんな。出羽屋の千吉が来たからには滅多な真似はさせねえ。』

親爺は木刀を腰へ落すと、右の足をひよいと前へ上げる拍子に着物の背ろの裾を掴んで、尻を七分三分に端折つた。それから暫くは縁側をうろくして縁下の闇のうちに何か探してゐるやうであつたが、やつと沓脱石の上に庭下駄を見つけるとそれを穿いて、これもまた裏木戸からヒョコ／＼駆け出して行つた。正直に云ふと子供の私は此時ほんたうに出羽屋の千吉が豪い素晴らしい親爺に思へた。

それから暫くして此の親爺と小母さんとに圍まれて大伯父が氣の抜けたやうな顔をして裏木戸から歸つて来たのであつた。大伯父は出羽屋に向つて『騒がして濟まない』と頻りに詫びたり禮を云つたりする傍ら、

『畜生め、扉を乗り越えて失せやがつた』とぶつ／＼呷いてゐた。さうして『手前が餘計な事をするからこんな騒ぎになるんだ』と矢鱈に小母さんに叱言を云つた。酔は既に大分醒めてゐたやうであつた。

出羽屋は大伯父を庭の縁側まで連れて來ると、『これからお冬ちゃんを探して來る』と云つてま

た裏木戸から出て行つた。小母さんは大伯父を庭の隅の方の井戸端に連れて行つて足を洗はせ、自分も足を洗つて、二人は座敷へ上つたが、それから間もなく、巡査が靴音と佩劍の音とをさせながら、開け放されたまよの表の格子を潜つて玄關の土間に姿を現したのであつた。

『楠本と云ふ家はこゝだね、主人はゐるか？』

其頃の巡査は威張つたものであつた。併し巡査がさう云つて玄關の上り端へ顔を突き出したのを見た時、私は甦つたやうな気がした。此時ほど巡査が有難い者に思へた事は無かつた。この巡査が大伯父を縛つて連れて行つてくれよばいよ、さもなければ、もう再びこんな亂暴をしないやうに厳しく叱りつけてくれよばいよと、其の瞬間私は願つたのであつた。

上り口の座敷に殊勝らしく畏つた大伯父に、巡査は斯う告げた。——巡廻中××子爵邸の塀際に倒れて呻つてゐる女があるから、近寄つて見ると、足を挫いて動けぬらしいので、事情を聞くと、此の家の娘で、主人に暴行を加へられようとしたので家を脱け出して、子爵邸の長家内に逃げ込んだ所、あとから追ひかけられて逃げ場が無くなつたので、塀を乗り越えて往來へ跳び降りたのだと云ふ。それで兎も角交 所へ連れて行つて今保護を加へてあるが、いつたい何うしたわけなのだ、次第によつては此儘で済ます事は出来んが——

『へい』と大伯父はお追従笑ひをしてから、『なに餘り剛情を張るもんですから、つひ腹が立つて、見せしめのために斯う髪を掴んで脅したもんで、吃驚して跳び出したと云ふわけでございます。別段たいした事ではございません。旦那にお手数をかけて誠に面目ないわけで、へえ、今後は氣をつけますから、何分ひとつ御内済に——』

大伯父は疊に手をつかへてお辭儀をした。

『お前の娘だらうな』と巡査は念を押した。

『へえ、娘に相違ございません』と大伯父は答へた。

それで巡査は今後必ずこんな手荒な事はせんやうにと固く云ひおいて一旦引き取つたが、暫くして着物も脚も泥だらけの姉さんを俥に乗せて連れてまたやつて來た。そこへ例の出羽屋の親爺も歸つて來た。暫くするとまた弟子の若者達が何も知らぬ太平な顔をして歸つて來た。——斯うして怖ろしかつた此夜の事件も兎も角一時は無事に済んだのであつた。

姉さんの足の怪我は軽くはなかつた。姉さんは其の翌日から毎日俥で名倉の揉療治へ通ひ出した。挫いた方の足には、半紙半切へ黒いドロ／＼したものを塗つて貼りつけて、上から大きな繻帯を捲いてゐた。始めは家の中でさへ立つて歩けなかつた。併し經過は順當であつたらしく、其

内に跛をひき／＼どうやら歩けるやうになり、半月も経つと跛もひかずに済むやうになつた。それにつれて名倉通ひも毎日が一日隔きとなり、一日隔きが二日隔きとなつて、さて、もう今日限り以後は行かずともいゝと云ふ名倉通ひの最終の日であつた、今日は歸りがけに買物をして來るから少し遅くなると小母さんに云ひ残して、姉さんはいつもの通り俵で出掛けた。出際に私を人のゐない室へ呼んで、小さな聲で、

『亭ちゃん、お小費ひをあけるわ』と云つて五圓札を一枚出した。

私は今迄五圓なんと云ふ小費ひを誰れからも貰つた事はないので、手を出していゝか悪いか判らないので躊躇してゐると、姉さんはそれを私の懷ろに押し込んで、

『だけど、誰れにも黙つてゐるのよ。決して云つてはいけなくつてよ。よくつて、きつとよ。』と、力の籠つた低い聲で頻りに念を押した。

姉さんは其日は特に綺麗に髪を結つて、美しくお化粧をして、他處行きの着物を着てゐた。寄り道をするのだからとことわつてゐた。私も無論さう思つてゐた。所が其日出掛けたきり、夜になつても翌日になつても翌々日になつても、姉さんはつひに歸つて來ないのであつた。

家の中が急にざ／＼し出した。大伯父や曾祖母や小母さんが毎日交る／＼何處かへ出て行つ

たり、訪問客が繁く出這入つたりした。私には何が何んだか少しも解らなかつた。家人は何事も私に云つて聞かせなかつた。四五日経つてやつと小母さんが、

『姉さんは何處かへ行つて了つて、もう歸つて來ないんだよ。』と私に宣告した。

それから私は氣拔けしたやうにほんやりして了つた。學校へ行つても先生の云ふ事が耳に這入らなくなつた。家にゐても鬱々とふさぎこんで許りゐた。たゞ戸外を通る足音許りが私の注意的となつた。足音のする度に、歸つて來たのではないかと胸を躍らせた。俵の轍の音でもすると、私は玄關へ飛んで出るのであつた。さうして夜、寢床に這入ると、姉さんから貰つた五圓札をソツと出して、眺めたり香を嗅いだりして、込みあけて來る悲しさを呑み込みながら、

『ひどい姉さん、ひどい姉さん』と鼻をつまらせて繰り返した。

斯うしてゐる間に暗い空虚な月日は表面は何んの波瀾もなく靜かに流れて行つた。此間の私の生活を少し誇張して云へば、私は五圓札と俵の音とに生きてゐたと云へよう。所が姉さんの家出から二箇月ほど経た或日であつた、俵の音が遠くからだん／＼近づいて來たかと思ふと家の前でピタリと停つた。今迄の俵の音が大概思はせぶりで行き過ぎてしまふのに引替へて家の前で停つたのであるから、私は實際こんどこそはと思つて玄關へ飛んで出た。其の拍子に、



『御免下さい。』と云ふ女の聲がした。私は危く、

『姉さん!』と口まで出掛かった。

併し格子を滑つて這入つて来た人の姿が眼に入るや私は急に落膽して其儘ほんやり立ち盡した。すると其人が、

『あれ、亨ちやんぢやないの?』と云つた。

私はこんどは吃驚した。直ぐには口も利けなかつた。其人は女には違ひないが、姉さんの美しい姿とは似てもつかないで、血の氣の失せた蒼白い顔に、脱け落ちたやうな眉毛が薄く、眼が落ち凹んで、頬がこけて、櫛捲きにした髪の毛が容赦なく頬に亂れかゝつて、此の世の人とは思へぬ淋しい痛々しい姿であつた。而も、曾て會つた事も見た事も無い人の姿であつた。私は其人の問ひには答へないで其儘奥へ引返して、何か恐ろしい事でも告げるやうに小母さんに耳打した。

『誰れか變な人が來てゐるよ。』

『どんな人?』

小母さんは私に代つて出て行つた。私は怖るゝ小母さんの背ろについて行つた。

『どなたでございますか?』

小母さんは怪訝さうに客を見詰めて、突立つたまゝ訊いた。

『あ、おばさん、暫く。——私でございます、あの、君でございます。』

すると小母さんが急に眼を見張つて頓狂な聲を出した、

『あれつ、お君さん?——まあア。』

さう云つたとき暫くは呆氣にとられて立ち盡したが、やがて客を其儘にしておいて駆け込むやうに奥へ這入つた。私が一人取り残されて手持無沙汰に立つてゐると、客は私へ向つて手招きをして、眼に淋しい笑を持たせながら念を押すやうに訊いた、

『亨ちやんでせう?』

私は始めて黙つたまゝうなづいた。所が私の頭を縦に振つたのを見ると客は急に眼に一杯涙を溜めて、おろ／＼聲になつた。

『私はね、私はね、亨ちやんの、お母さんのの。』

云ふと同時に、耐りかねたやうに、手に持つてゐた大きな信玄袋を上り端の畳の上へ投げ出して其上に崩れるやうに顔を臥せた。そこへ大伯父と會祖母と小母さんとが揃つて出て來た。

意外な闖入者は意外な事件を脊負つて來たのであつた。家を脱け出した姉さんは、遠い西の空

へ走つて私の父の家に身を寄せた。當時私の母は産期の迫つた重い身を更に病に襲はれた牀褥に親しんでゐたが、姉さんに同情していろいろ好意を示した。……それで母はどうにもゐた、まれになつて、家を出て、苦しい身を一日の汽車に揺らせて遠地にある唯一の親戚の家に泣きついて行つた。其家に着くと母はどつと牀に着いてしまつた。私の第二の弟は其病床で生れた。併し生れた時は既に冷い骸であつた。母の悲嘆は産後の日立ちと病ひの恢復とを長引かせたが、而も其家の主婦が吝嗇で嫉妬深い所から、心安く留まつて療養する事も出来ないで、不幸な母は三七日の日數の半ばにも達せぬ内に、而も病中の身を再び長い汽車旅に任せなければならなかつた。かくして母は、東京の懐しい吾が子の住む此家に、義理の伯父をたよつて、衰へ果てた姿を現したのであつた。

母を一先づ奥の間へ連れて行つて母から以上の顛末を一通り聞き取つた大伯父と曾祖母とは、さだめし熱い同情の涙を以て不幸な母を慰めると思ひのほか、事實は全く反對であつたので、傍に聞いてゐた私は驚いた。殊に大伯父の如きは癩癩を面眉に現して邪慳に云ひ放つた。

『ぜんたいお前が意氣地が無えからだ。自分の亭主を寝取られやがつて、どの面さけて東京くん

だりまで出て來たんだ。勝手に嫁入先を脱けて來たやうな奴は、宅へなんか一刻もおく事は出來ねえからさつさと出て行つて貰はう。』

大伯父は例の如く口をへの字に曲けて、鉈豆煙管で灰吹きを激しく叩いた。

『なぜ交番へでも何處へでも驅け込まなかつたんだよ。なに、旦那が可哀さうだつて？ ふん、

其のくらの御目出度けりや亭主を横取りされたつて不思議は無いよ。』

と曾祖母も傍から毒々しい口をきいた。

かう云ふ場合取りなし役になるのは矢張り小母さんであつた。

『そんな事を云つたつて、大體はお冬や晋さんが悪いのだから、お君さんを吐言を云ふのは可哀さうですよ。それに、お父つあん、お君さんも斯うして未だ日立ちもしてゐない上に病氣なんだから、せめて舊のからだになるまで宅において、ゆつくり養生させてあげたら……』

『いや、いけねえ。』と大伯父は用捨なく言ひ放つた。『不心得な出戻り女なんか一日もおく事は出來ねえ。サア、出て行つて貰はう。』

噫、どこまでも不幸な母よ、私は此時の事を思ひ出すと餘り殘酷で涙さへ出ない。今も私は其時の大伯父が呪ひたくなる。——母は再び大きな信玄袋を提けて、病み衰へて見る影もない痛々

しい姿を消然と此家から消したのである。

『亨ちゃん、また、會ひに来るよ、きつと、きつと来るよ。』

さう云つて涙を頬にポロ／＼流しながら骨ばかりの蒼い手で私の肩をおさへた別れ際の母の姿が、刃で刻みつけられたやうに私の記憶に残つてゐる。

併し其の翌日母はまた、大伯父にとつては従兄にあたる人に連れられて此家に来た。多分母は此人の許へ泣きついて行つて頼んだものであらう。大伯父も此の従兄には一目おいてゐた所から、ともかく此人のとりなしによつて母は其身が健康に復するまで此家に留まつて養生する事が出来るやうになつた。

所がそれで安心して氣が弛んだためか、母は其夜私の傍に牀をとつて寝たきり翌朝は既に頭があがらなかつた。それから重い枕に就いたきりで二箇月足らずを病んで、秋も老ひかゝつた十月の末到々死んでしまつたのである。

此家に於ける母の病牀生活は、病苦以外に多くの苦痛を忍ばねばならなかつた。酒癖の悪い大伯父と、氣むづかしい曾祖母と、愚痴ッほい小母さんとに取りまかれて、而も三人とも母の滯留に好意を持つてゐないのであつたから、病人の苦勞は想像に難くない。それでも小母さんだけは

子供の私と一緒になつて看護の任にあたつた。母は寝つてから暫くすると身體にむくみが出て来て、今迄殆んど骨と皮とばかりに瘦せてゐた顔や手足が青脹れに脹れあがつて、腹は妊婦のやうに大きくなつた。しまひには足の裏まで脹れあがつた。さうして彼女は身のおき處の無いやうに牀の上でのたうちまわつて呻るのであつた。私は子供ながら殆んど付ききりで看病した。母はまた私を傍から離さなかつた。幼き私がたつた一人の頼りでもあるやうに見えた。私は子供心に母がいぢらしくてならなかつた。母もまた私が斯うして遊び盛りを遊びもしないで病床に付き添つてゐるのをいぢらしいと思つたのであらう、いつも眼に涙を溜めながら『有難う、有難う』と云つて私の看護を受けてゐた。さうして苦痛の稍々引いてゐるやうな時には必ず、

『亨ちゃん、お母さんが癒つたらね、こんどはお母さんひとりで本當に可愛がつてあけるよ、大事な亨ちゃんをモウ誰れにも渡しておきはしないの。』と謔言のやうに繰り返すのであつた。

死ぬ三日前の事であつた、私がいつもの通り學校を早退して（其の當時は大抵毎日さうしてゐた）歸つて来ると、小母さんが玄關まで迎ひに出て、こと／＼しさうに私に耳打ちした、

『お母さんが呼んでゐるよ。』

私は其儘學校の道具を抛り出しておいて直ぐ母の寢室に行つた。母は、襖をあけて這入つた私

の顔を、ぢつと視詰めてゐた。私が枕元に座つても、何んにも云はずにたゞ顔を視詰めてゐた。気がつくつと、母の額からは脂汗がダラ／＼と滲み出てゐる。暫くして母の口から重苦しい言葉が微かに出た。

『亨ちゃん、お母さんはね、もう死ぬの——』

さう云ひ乍ら母は、ぶく／＼した手を伸ばして私の小さな手を取つた。さうして衰へた有りたけの力で私の手を握り締めた。同時に母の凹んだ眼（顔は脹れてゐるのに眼だけは氣味悪く凹んでゐた）から涙が止め度なく頬を傳ひ出した。

私は無論何も云ふ事が出来なかつた。涙も出なかつた。黙つて母の爲すにまかせ、語るにまかせた。たゞ私の小さな胸一杯を開いて、其の爲す事、語る事を、釘を打ち込まれるやうに心臓の底に受け取つた。

『お母さんが死んでも、決してお父さんの家へ、歸るのぢやないよ。お冬姉さんは、恐い人、恐い人だからね。亨ちゃん一人ほつちでも、お母さんが、きつと蔭で、護つてゐて、あけるからね、ね。赤ン坊、亨ちゃんの、モ一人の弟は、死んで生れたの。そして、今、お母さんも。——亨ちゃん解るでせう？ 誰れのために、こんなになつたか、ね？ お父さんが、悪いのぢや、ないの』

……』

母は時々ぐくりと唾を呑み込みながら、蚊の鳴くやうな聲に精一杯の力を籠めて、杜切れ／＼にやつとこれだけの事を云つたのである。云ひ終ると、がっかりしたやうに私の手を放して観念の眼を閉ぢた。

母が正氣で物を云つたのはこれが最後であつた。それから死ぬまで二日の間は、取り止めのない謔言ばかりであつた。その謔言の中で時々私の名を呼ぶので、私が行つて見ると、母は私の顔を見ながら、

『赤ン坊は、死んで生れたの。赤ン坊は、死んで生れたの。』

さう繰り返して口を歪めて笑ふのであつた。

死ぬ日は、さうした謔言ももう出なかつた。朝から眼をギラ／＼光らせて奥歯を頻りに噛み合はせるだけであつた。以前は、苦しい時には身體をどたばた動かして暴れたのであつたが、その力も既に衰へたか、全身はたゞぐたりと仰向けに横はつただけで、眼と齒だけが力一杯の最後の活動を續けてゐるのであつた。夜に入つてからは齒軋りの音が殊に激しくなつて、時々啖がからんで咽喉がゴロ／＼鳴つた。

秋を鳴く虫の音も衰へた十月末の寒い夜であつた。風がさら／＼と落葉を雨戸へ吹きつけてゐた。曾祖母が頻りにせがむので早くも二三日から始めてゐた火燵を其夜もしてゐた。誰れも氣味を悪がつて病人のそばに寄らうとしないので大伯父だけが枕元に付き添つて、私と小母さんと曾祖母とは、あけ放した次の間に火燵を仲にして、五分心のランプの下に淋しさうな顔を集めた。迎へをやつたので醫者が十一時頃來た。醫者は『もう二三時間後でせう』と注意して歸つた。歸つた後ひとしきりは激しい齒軋りと呻き聲とが夜陰に凄く響いてゐたが、暫くするとそれがだん／＼靜かになつて行つた。家の内が見えぬ力に壓迫されるやうに森となつた。同時に、更けて行く暁秋の夜の寒さが、火燵にあたつてゐる私の脊にゾク／＼と滲みて來た。

『落着いて眠つたのかねえ。』

小母さんが誰れに云ふともなしに濕やかに云つた。

『いゝや——』

曾祖母が例の一筋の線を引いたやうな口を殆んど開かぬやうに動かして靜かに打ち消した。さうして暗いランプの灯の下で皺のなかの眼をぢいツと閉ぢた。同時にしみ／＼と詠嘆するやうな獨語が老婆の口から押し出された——

『まるで油が盡きて、灯が消えて行くやうだのう。』

それから間もなく大伯父が次の間の病室を立つて、蒼い顔をして私達の間に割り込んで來て、『もう引き取つたよ。』と咳きながら火燵の蒲團の上に顔を臥せたのである。

#### 四 「暗い過去」その二

それから暫くの間は父からも姉さんからも何んの音信も無かつたらしかつた。大伯父は始めは「俺が行つてお冬を連れ戻して來てやる」と云ふやうな事を云つてゐたが、其内に父から滿洲の大連に移つたと云ふ報が來て、それ以來はそんな事も口に出さなくなつた。この報は、事件後父がよこした最初の音信であつたに違ひない。無論私は小學校の四年頃の事だから、父がどんな手紙を送つて來たかは知らない。たゞ小母さんから「お前のお父さんとお冬姉さんとは滿洲と云ふ支那人の住む遠い國へ行つてしまつたんだよ」と云ひ聞かされたばかりである。併しこゝに注意すべきは、その手紙をきつけかけにして以後は月に一度ぐらゐつゞ必ず父から手紙が來るやうになつた事である。それに對して此方からも返信を出してゐたかどうかと云ふ事は判らないが、今考へ

て見ると、父からの毎月の手紙の中には私の養育料としての幾千かの爲替が含まれてゐたと思へるのである。

母の死後二年も経たぬ内に曾祖母と大伯父とが引き續いて死んでしまつて、一時私は小母さんとの二人きりになつた。この大伯父の死と前後して、満洲からも訃報が來た。私のたゞ一人の弟の亨二の死であつた。併し曾て一眼も見た事もない弟の死が私の心に何んの打撃をも齎す筈がなかつた。たゞその訃報を受け取つた時小母さんが、『支那人の國へなんか行くからだ、それにあのお冬の奴がいぢめ殺したのかも知れないよ。お前もお父さんの處へ歸るとお冬に毒でも吞まされて殺されて了ふよ。』と私に言つたその言葉が私の胸を妙に打つただけである。今から考へれば、こんな言葉は小母さんが私可愛さの情と多少は利己的の動機とから私を長く自分の手許に置いておきたい爲の中傷であるとは直ぐ肯かれるが、まだ子供の私はそんな事は解らなくとも、この言葉をそのまま受け入れはしなかつた。けれども、慈姑頭の支那人の間に交る父と姉さんとの家庭がそれだけでなく私の心に暗く映つてゐたのに、この小母さんの言葉で一層暗さの度を深められたと云ふ事だけは否定出來ない。それだけならば末だよかつた。小母さんは更に此の言葉に附け加へて。

『あんまりお冬のそばに長く置く可哀さうだと思つて、死んだお母さんが連れて行つて了つたんだよ。』と妙にしんみりと云つた。

この言葉は前の言葉と異つて何んだか争ふ事の出來ぬ眞理のやうに思へて、子供の私の心の底深くつひに消える事の無い濃い黒い影を落して了つたのである。

それはさうとして、大伯父の死と共に、家にゐた弟子達には残らず暇を出して、比較的廣かつた家を疊んで、小母さんは私を連れて近所に手頃な二階建の家を借りて引き移つた。大酒呑の大伯父の事とて遺産などは大して残して行かなかつたものらしく、其家に移ると直ぐ小母さんは生計の足しとする爲に昔習ひ憶えた常盤津を近所の娘に教へ始めた。それから暫くして田舎の實家から其時二十三になる一人の姪を呼び寄せて養女にし、人に教へる傍らこの姪にも三味線を仕込み始めた。私はこの姪を姉さんと呼ばなければならぬやうになつたが、愛嬌はあつたものの色が黒くて顔が不恰好で其上心持に少し没分曉な剛情な所があつた此の異性に對しては、殆んど終ひまで何んの愛も親しみも感じなかつた。併し僅かの間に曾祖母と大伯父との二人を失つた家の内が此の姪の爲に幾分か賑かになつたと云ふ事だけは私にとつて嬉しかつたに違ひない。

其内に私は小學八年の過程を卒へて、半分は小母さんの力で半分は満洲からの仕送りで中學に

進む事になつた。母の死後から中學に進むまでの私自身の生活は表面は何んの波瀾も無く流れて行つた。他人から見た其當時の私は、たゞ陰鬱な柔順しい、そして繪と讀書との好きな兒であつたに違ひない。實際私は學校以外に殆んど外へ出て遊ぶと云ふやうな事はなく、學校でも仲間はずれで、他の子供と一緒になつて騒ぐ事も殆んど稀で、宅へ歸れば録々口も利かずに繪を描いたり小説本に讀み耽つたりしてゐた。そしてその繪や小説は特に暗い陰惨なものを好んだ。繪は大抵幽靈の顔や姿ばかりを描いてゐた。なぜそんなに幽靈の繪を好み始めたかと云ふと、之には理由がある。あの母の傷ましい死に遭つてから一週間ばかり経つた或夜の事である。夢の中で私は突然、

『亨ちゃん』と呼ぶ聲を聞いた。

私はハツとして眼が醒めた。たしかに誰れかと呼び起したのであつた。併し眼が醒めて見ると、隣りに小母さんがスヤ／＼寝入つてゐるほか誰れもゐなかつた。私は妙な不安に襲はれた。爾來此頃に至るまで斯う云ふ夢とも現ともわからぬ呼び聲を聞いて眼を醒ますことは時々あるやうになつたが、其時少年の私にとつては始めての經驗なので、不思議な感と共に云ひ知れぬ恐怖を覺えたのであつた。私は怯えた眼で餘り廣からぬ室内を怖る怖る見廻したが、眼が右手の壁の

所へ來ると、突然吸ひつけられたやうに視線がその壁に固着した。壁の上には、んやりした黒い人影を認めたのであつた。すると私の胸が急にわく／＼と躍り出して、同時に頭の力がスーと脱けて行くやうに感じ出した。遠い過去の記憶の中にある其時の感じを今こゝに細く現す事は出来な  
いが、ともかく何んだか不可抗的な力で自分の眼を否應なしに奪はれて了つたやうに、暫くはどうしても黒い影から眼をそらす事が出来ないでゐると、其内に朧ろであつた影がだん／＼濃くなつて、濃くなりながら壁を脱け出て自分の方へ近づいて來るやうに見えた。近づくとつれて影がだん／＼影でなくなつて、有りのまゝの人の姿をとつて來たので、私は到々たまらなくなつて、痺れて動けなくなつてゐたやうな全身の力を死物狂ひに奮ひ起して、隣りに寝てゐた小母さんを力一杯ゆすぶつた。

『誰れか來て立つてゐる、誰れか來て立つてゐる。』

小母さんは蒲團から身を半分擡けたが、

『誰れが？ 何處に？ —— 何もゐやしないぢやないか。』と眼をキョロ／＼させた。

『ゐるよ、あそこに、そら！』

私は壁の方を指差しながら其の方向に再び眼を据ゑた。その眼に、亂れた髪と、窪んだ眼と、

脱け落ちた眉と、青く脹れた頬と、胸に抱いた小さな赤ン坊とを、ありありと見て取つた時、

『あ、お母さんだ、死んだ赤ン坊を抱いてゐる！』

と叫んでいきなり夜着の襟に顔を埋めた。

『なんだよ、此の兒は、ねほけてさ、薄氣味の悪い。——早く寝ておしまひ！』

小母さんの叱りつけるやうにさう云ふ聲をよそに聞きながら私は夜着の中で、

『きつと、髻を取ります、きつと髻を取ります。』と夢中で哀訴するやうに繰り返してゐた。

此夜の経験ばかりは今だにどう考へても不思議である。まさか實際に幽霊を見たとも思へないし、幻想にしては餘りはつきりし過ぎてゐるし、無論他から見れば私自身の病的原因に歸せられるのではあらうが、私としては今も解き得ぬ謎として心に残つてゐる。それは兎も角、其夜以來私は毎夜奇妙にも大抵同じ時刻に必ず眼を醒ますやうになつたが、眼が醒めても決して四邊を見ようとしなかつた。眼をあくと、またあの夜の姿が見えはせぬかと、それが怖ろしかつたのだ。私は醒めた眼をいつも其儘閉ぢて、顔を蒲團に埋めて、

『きつと髻を取ります、きつと髻を取ります。』と云ひ續けた。さう云ひ續けながら再び眠に落ちて行くのが常であつた。

私にとつて夜は怖ろしいものとなつた。けれどもその怖ろしい所以を家の誰れにも告げる事は出来なかつた。もう小學校で幽霊など云ふ者は人間の神経の作るものだと教はつてゐた時代で、一面に於ては自分の馬鹿らしさと臆病さを自覺してゐたから、そんな事を人に云ふのは恥しかつたのである。それに、も一つは妙な事ではあるが、之を人に云ふのは何んだか自分と亡母との間の大切な秘密をあばいてしまふやうな氣がして變に心が咎めたのである。かうした二つの氣持は互ひに矛盾してゐるやうに見えるが、當時少年の私の心に此の二つが二つながら働いてゐたと云ふ事を、私は今顧みて否定する事が出来ないのである。それで兎も角誰れにも告げないで私は自分獨りで夜の恐怖と闘ひつゞけた。その闘ひの唯一の武器は『きつと髻を取ります』と云ふ言葉であつた。この言葉を口の中で力強く繰り返すと私の怯えた昂奮した胸は不思議に静まつて行つて、やがて安らかな眠りに就くのであつた。所が、さうして毎夜この言葉を繰り返してゐる内に、「どうしても髻を取らなければならぬと云つたやうな氣持がだん／＼深くなつて行つて、復髻と云ふ事が私の生活を導く唯一の原動力のやうな形になつて了つた。さうかと云つて、誰れに對して、何んの爲に、どんな方法で、と云ふやうな事を反問されたら無論其時私は何んら具體的な返答を持ち合はせなかつたに違ひない。



所がこゝにまた不思議な事には、夜を斯うも恐ろしくする原因の者が、晝になると少しも恐ろしくない許りでなく、却つて進んで出會つて見たいと云ふ好奇心のやうなまた執着のやうなものを感ずるのである。それで、今夜こそは眼が醒めたら眼を閉ぢないで開けたまゝでゐようと晝はいつも思ふのだが、夜になると必ず晝の決心を忘れて蒲團に顔を埋めて『きつと髒きたを取ります』と繰り返さねばならなかつた。其内に晝は幾らさう思つても夜になれば實行出来ぬものと観念した時、私は最初の夜の怖ろしい印象を辿つてそれを一生懸命繪に描き始めたのである。——私が幽霊の繪ばかり描くやうになつたのは斯うした事情からである。

だから私の幽霊はいつも赤ン坊を抱いてゐた。尤も顔だけ描く事も度々あつたが、其時は思ひ切つて怖ろしげな顔を紙一杯に大きく描いた。既に繪具を使ふ事を覚えてゐた私は、幽霊を描くにも日本畫風に線で現さないで、水彩で出来るだけ寫實に描く事を好んだ。無論最初は幼稚な寧ろ滑稽じみたものであつたが、熱心に描きつゞけてゐる内にだん／＼趣味が出て来て、ほんものの幽霊らしくなつて來た。私は出来上がった幽霊の繪を家の者や近所の子供などに見せつけて嫌がらせる事に、一種の快感を覚えてゐた。なぜだか「これが復讐なんだ」と云ふやうな感が私の心の何處かに潜んでゐた。性格の弱い内氣な子供だつた私は、知らず識らずこんな手段を借りて

自分の感情を他人に發表してゐたものと見える。

所が餘り幽霊の繪ばかり描いてゐるので、而もそれが亡母の顔に似てゐるので、到々大伯父から叱られて、以後こんなものを描いてはいけぬと云ひ渡された事がある。けれども仲々私の癖は止むどころでなく、家人の眼を忍んでは内密に描いて、到々小學時代を通じて幽霊の繪に親しんだのである。

次に私が一方には小説本を読み耽つたと云ふのは、曾祖母の云ひつけて老人のつれ／＼を慰める爲に読んで聞かせてゐたのが始まりで、曾祖母が死んでからは自分で好きなものをあさつて、特に江戸時代を背景とした瀾れた陰惨なものを好んで讀んだ。その爲私の世界は或る方面に向つて著しく開けて行つて、外觀はともかく、内側では私は年齢に似ぬ早熟な兒になつたと云ふ事は、特に注意しなければならぬ。

も一つ私の小學時代を彩る特色は、私が他の一面に於て一種涙ぐましいやうな宗教的な憧憬を持つてゐたと云ふ事である。私はよく街を歩いて、額縁屋の前などに立つと、かの茨の冠を戴いた額から血を流して眼を天に向けて祈つてゐる基督の悲痛な顔に、言ひ知れぬ魅惑を感ずるのであつた。また路傍説教などに、解らぬながら何時までも聴き入るのが常であつた。それから特に

静寂な場所に憧れて、夕暮れの上野の山などを一人で歩きながら「死」と云つたやうな全く不可解な神秘的な事に思ひ耽るのを此上なく好んだ。これらは別段讀書からの影響でもなく、人の教導の結果でもなく、たゞ自然に私の心内に生じた傾向であつたと云ふ事は、今後の私の生活を考察する上に於て特に記憶しなければならぬ事だと思ふ。

さて兎も角こんな風にして私の小學時代は大した波瀾もなく過ぎて、十五歳の春、中學校に入る事になつたのだが、其年の秋、小母さんの養女にした例の姪に婿が迎へられる事になつた。婿と云ふのは日本橋あたりの袋物屋の番頭であつたが、入夫と同時に暖簾を分けて貰つて私の家で袋物の細工と卸賣とをする事になつた。角張つた顔の示してゐたやうにぎこちない性格の人で、其上いつも他人を下眼したかに見る癖のあつた男なので、私は姪に對すると同様最後まで此の婿とも親しむ事が出来なかつた。のみならず婿が來てからは私はまるで一家の邪魔物扱ひにされるやうになつて、それでもなくとも親しみの無かつた家庭を益々親しみの無い冷いものとして疎んじ始めた。それで私はだん／＼以前とはまるで違つて來て、繪も本も棄てて了つて、小母さんには何んとか嘘については學校の歸りに遅くまで途中で遊んで來るやうになつた。歸つても夕飯を食ふとまた直ぐ遊びに出掛けると云ふ風であつた。

其頃私の遊び場所にしてゐた所は、既に自分の母校となつた小學校の前通りにある白梅堂と云ふ菓子屋兼文房具屋の店であつた。母と娘と二人きりで店をやつてゐて、娘は私とは學校朋輩であつたばかりでなく、私の小母さんが常盤津の師匠を始めると間もなく弟子入りしたので、私は前からもよく知つてゐた。と云つて別段親しい狎々しい間柄ではなく、兩方とも内氣な所爲か五ひに録々口も利かぬほど遠慮勝ちであつた。名はお静と云つて、近所でよく今小町と云はれてゐたほどの器量で、白い瓜實型の顔と、小さい口唇と、恰好のよい鼻と、ばつちり冴えた黒い眼とを持つてゐた。併し難を云へば、たゞ輪廓が理想的に整つてゐると云ふだけで、特に惹きつけるやうな個性の現れてゐないのが、或る物足りなさや淋しさを與へるのであつた。母親の方は銀杏いんげん返しに横櫛で煙草の煙を輪に吹くと云つたやうな運ツ葉な性質であつたが、娘の方は顔の現すやうに内氣で温順で母親とは反對に上品な性質であつた。顔容こそどこか似通つてゐるやうには見えたが、性格から云ふとどうしても親子とは思へぬほどであつた。

私の十三の春頃だと憶えてゐるが、このお静が小母さんの許へ弟子入りしてから未だ間もない事、他に五六人稽古に來始めた娘の中で特にこの娘だけは子供の私の心にも際立つて映つてゐたが、或時ふと思ひ立つて、この娘をおどかしてやらうと云ふ惡戯いたづら氣を起した。それで畫用紙の大判

を二枚つないで疊一枚ぐらゐの大きさにし、青と黒とを使つて例の赤ン坊を抱いた幽霊の繪を紙一杯に大きく描いた。顔は出来るだけ怖ろしくし、周囲は塗りつぶして顔と上半身だけくつきりと浮き立たせ、足の方は薄墨でほかした。此頃はもう幽霊の繪だけは長い間の修練で子供ながら堂に入つてゐたし、描くのも早くなつてゐたが、特にこんどの繪には五六日を費して極めて丹念に、而も誰れにも内密で描き上げた。さうして或る機會を狙つてゐた。所が或日お静は來やうが遅かつた爲に稽古を一番後に廻されて、もう日が暮れかゝつて他の娘は皆歸つてしまつたのに薄暗がり一人で小母さんに稽古をつけて貰つてゐた。私は此時だと思つて、早速例の繪を取り出して玄關の間の一方の壁にピンで留めて貼りつけた。薄暗い壁に赤ン坊を抱いて白くほんやりと浮んだ幽霊の姿は私の小さな残忍な心を満足させた。私は梯子段の蔭に隠れて、そつと様子を窺つてゐた。やがて奥では三味線の音が止んで、

『では、少し暗くなつたから氣をつけてお歸んなさい。』と云ふ小母さんの聲がした。

いよく出て來るぞと思つて私は身を固くした。が、同時に突然思ひがけない不安に襲はれ出した。こんな悪戯をして驚かすと云ふ事があの娘に取つて大變濟まないうやうな、怖ろしく悪い事のやうな氣がして來たのであつた。あの娘が唐紙をあけて出て來ない内に急いで取りはづして了

ひたいやうな強い衝動を感じた。が、もう遅かつた。奥では立ち上がる氣配がして小さな足音が近づいた。あゝ取り返しのつかぬ事をして了つたと云ふ悲しい絶望が私の胸を襲つた瞬間、唐紙が開いて可愛らしいお静の姿が現れた。所がその姿を見るや否や私は自分の氣持ちは全く反對に、

『いゝ氣味だ、これが敵討ちだ。』と、なぜだか心の中にさう叫んだ。

お静は壁を見るとギョツとして一時立ち竦んだが、其儘聲も立てずに奥へ駆け込んだ。

『どうしたの、しいちやん！』と云ふ小母さんの頓狂な聲が奥から聞えた。

『何かが、お師匠さん』と震へた小さな聲が答へた。

併し其の二人の聲を聞いた時は私が壁の繪を引きはがしてゐた時であつた。私はお静が奥へ駆け込むと同時に梯子段の蔭から跳び出して——發作的に跳び出した——慌てゝ繪を取りはづしかゝつたのであつた。だから小母さんがお静の訴へによつて玄關の間へ出て來た時は、私が疊の上におろした繪を引き摺つて二階へ逃げ上がらうと梯子段の一段へ足をかけた時である。その様を見た小母さんは直ぐに事件の内容を知つてしまつて、

『ひどいよ！ 亨ちやん』といきなり私を怒鳴りつけた。

その聲にピクッとして私は梯子段に足をかけたまゝ立ち竦んだ。小母さんの傍にはお静が蒼い顔をして立つてゐた。一瞬の間三人は生人形のやうに固くなつた。併し次の瞬間には急に私は物悲しさが胸に込みあけて来てボロ／＼と大きな涙をこぼし始めた。所がそれと同時に小母さんは反對に笑ひ出した。

『しいちゃん、勘忍しておくれよ、また亨ちゃんがいつもの悪戯をしたんだから。もう決してこんな事はさせないからね。——ほんとに嫌やな亨ちゃんだよ、しいちゃんに御免とお云ひよ。』所が、詫る方の私が泣いてゐて、詫られる方のお静は蒼白い頬にモウ微かな笑みを浮べてゐた。そして畳の上に引き摺つた幽霊の繪をこんどは怖れもせず眼を圓く睜つて物珍しげに視詰めた。

『まあ怖いわ。』

お静はさう呟いたが、それから不意に私の顔を見て、

『亨ちゃん、この繪が欲しいの、私に呉れない？』と云つた。

私は吃驚して黙つてお静の顔を見返した。

『何んだよ、しいちゃん、こんな薄氣味の悪いものを。——繪が欲しけりや、今日しいちゃんを

脅かした罰に何か他の繪を亨ちゃんに畫かしてあけるからね。第一こんなものを持つて歸るとお母さんに叱られるよ。』

『でも、お師匠さん、わたしお化の繪が好きなの。』

『いやだよ、しいちゃんまで。ぢや、なぜ今あんなに吃驚したの。』

『ね、いゝでしょ、亨ちゃん、呉れても？』

私は黙つてうなづいた。お静は到々その大きな幽霊の繪を丁寧に捲いて家へ持つて歸つた。あとで聞いて見ると、小母さんの云つた通りお静は母親に叱られたけれど、決して家の内へ飾つたり何んかしないと云ふ條件で、たゞお師匠さんの許で貰つたんだから大切に藏つておくんだと云つて許して貰つたさうである。其後時々思ひ出して私が『あの繪は？』と訊いて見ると、『箆笥の中に藏つてあるの。お母さんの居ない時に時々あけて見るのよ。何んだか見たいんだもの。』とお静は答へてゐた。今から考へて見ると實際お静はそんな陰氣な繪を好くやうな性質らしかつた。身體も弱々しい方で、時には別人のやうに馬鹿に喚ぐ事はあつたが平生は極く沈み勝ちな、口數も少い可憐な少女だつたのである。

この小さな併し想ひ出の深い事件のあつた後、私はもう幽霊の繪を見せつけて人を嫌がらせる

事を全然廢めてしまつた。同時に私の心には可憐なお靜に對して恰度春の嫩草のやうな柔い生々しい或る感情が芽ぐみ始めた。いつも小説本を読んで私自身を小説中の一人物に擬する時には必ずお靜がその相手の人物になつて現れるやうになつた。美しい空想の世界で私とお靜とは様々な戀の場面を演出して、私はその場面をひとりで眺めながらひそかに甘い幸福と切ない憧憬とに耽るやうな時が屢々あつた。そのくせ、前にも述べたやうに二人は出會ふと録々口もきかぬ程不思議に遠慮勝ちであつた。

ともかく斯う云ふやうな事情で、白梅堂の娘のお靜とは、私とその店へ入り込むやうにならぬ前からの幼馴染であつた。私が此の店を殆んど毎日の遊び場所とするやうになつたのは、中學二年の冬休み、私の十七の歳の正月からだと思えてゐるが、小學校で同級だつたお靜は、多分私と同年の矢張り其頃十七ぐらゐであつたらう。なほ私の出入する以前から男女合せて七八人の遊び仲間が此處を寄り場所にしてゐたが、大抵は同年配の十七から十八九の少年少女であつた。女の方は大概お靜の學校朋輩であつたが、其中三人組と云つて、赤白黒の綽名で通つてゐた少女がゐた。三人とも淺草公園の奥の方に家があつて、三人一緒に神田邊の裁縫女學校か何んかに通つてゐて、學校の歸りには必ず白梅堂へ寄つて道草を食つて行くのを例にしてゐたのである。赤と云

ふのは、面長ではあつたがほつてりした顔容で、いつも色が屠蘇に酔つたやうに仄紅いのと、眼が細いのと、心持ち胸を張つて大股に歩くのが特長であつた。白と云ふのは背の低い小肥りの方で、特に色が白いのと、下顎がくびれて段々になつてゐるのと、よく大きな聲で笑ふのを特長にしてゐた。最後に、黒と云はれた娘が此の三人の中では一番はつきりした顔容で、黒い大きな眼と、恰好のいゝ鼻と、薄い口唇から覗く碁石のやうな齒竝と、其上細い頸筋と、すらりとした脊とを持つてゐた。たゞ少し頬骨が高いのと色の黒いのが瑕であつた。赤だの黒だのと云つてもさう特別に人竝以上赤くも黒くもあるわけではないのだが、仲のいゝこの三人を竝べて見ると恰度好い具合に三色の色別が出来てゐるので、自然赤白黒とからかはれたのが原因でそれが通稱になつてしまつたのである。

それから更に一人特に眼立つた娘がゐた。白梅堂の看板娘たるお靜とは容姿から云つても性格から云つても好一對で、お靜が月ならば之は太陽と云つてもよい。私の家から三四丁離れた電車通りの櫻野と云ふ大きな皮革問屋の二番娘で、本名はあかと云ふのだが五夜子と自稱してゐた。私と顔を合はせるやうになつてから間もなく、彼女が金箔で縁をつぶして櫻野五夜子と行書體で細く書いた可愛らしい女型の名刺を呉れた事を私は今も憶えてゐる。正確に吟味したら、輪廓が

整つてゐると云ふ點からは或はお靜に劣つてゐたかも知れないが、人を魅惑する力から云へば五夜子の方が遙かに勝れてゐた。肉付きのいゝ澤々した白い丸型の顔で、濃くて長い眉と、黒い大きな眼と、さう高くはないが筋の通つた鼻と、薄手の紅い口唇と、それから房々した黒い豊かな髪とを持つてゐた。特に長い眉と大きな眼と、左の眼の下の薔薇色の頬に點ぜられた黒子とが際立つて人を惹きつけた。それに發育のいゝ大柄な恰服で、いつも贅澤な服装をしてゐたので、通りすがの男を大抵振り返らさずにはおかなかつた。かう云ふやうに容姿がお靜と正反對であつたばかりでなく、性格から云つても、お靜の慎ましやかな沈み勝ちな考へ深さうなのに反して、五夜子の方は無邪氣で快活で、孰れかと云へば奔放な、人に臆せぬ性質であつた。併し人を下手に見ると云ふやうな高漫めいた素振りは少しも無く、人懐こい、邪氣の無い無遠慮さであつた。だから私は、前からの幼馴染で而も甘い戀心を懐いてゐながらお靜とは何時までも親しめないでゐたのに、五夜子とは白梅堂で落ち合ふやうになつてから間も無く、私の方でおづ／＼して黙り込んでゐても向ふで無邪氣に話しかけたり冗談を云つたりするので、何時の間にか直ぐ馴れ染んでしまつた。

これらの娘のほかにも多くの男が出入して一緒に遊んでゐたが、大抵は男と女とは一對になつて

ゐて、誰れには誰れと相手がきまつてゐた。赤には、鐵道學校の生徒か何んかで、色の白い、眼のあたりの苦味走つた、小作りな、いつも烏打帽に紺色の羽二重の襟巻をしてゐる川瀬と云ふのが相手であつた。白の相手は、藥學校の生徒で、顔の圓い、短い眉の八の字に開いてゐる、鼻の恰好の不作法な、ちんちくりんな脊に紫色の學生帽を横に被つて、「なにツちやんでえ、間拔奴」と云ふ言葉を口癖のやうに使ふ、極く剽近な同時に仲々剽悍な、通稱金時で通つてゐる男であつた。この金時と白とが手を引き合つて歩いてゐるのを、よく黒が「蚤の夫婦」と云つて背ろから嘶し立てたものである。所でその黒の相手は、其頃淺草で有名な扇屋と云ふ顔役の息子で、通稱小太ヤンと云ふ工手學校の生徒であつた。薄菊面と金齒とが特長で、いつもニコ／＼愛嬌のある顔をしてゐるが、喧嘩となると仲々頑強で勇敢であつた。これらの男は大抵十七八から精々十九位までの少年であつたから、女との間も無邪氣な子供らしいもので、白梅堂で落合つてはよく男女二人づれで活動寫眞へ行つたり公園をぶらついたりしたものであるが、たゞそれだけの事で、尤も赤と川瀬とは互ひに名前の頭字を腕に入墨し合つてゐる程の仲であつたが、それとても恐らく接吻以上の事を知らなかつたであらう。所が五夜子の相手は皆と少し違つてゐた。小柄ではあつたが風采も態度もすつと大人びてゐて、歳も實際二十を餘程越えてゐるらしく、色の淺黒

い引き締まつた顔ではあるが眼に何んとなく陰険な光を宿し、いつも金モールの徽章のついた  
シア型の紺の學生帽をかぶつて、茶がかつた紺の紡績紬の對<sup>たい</sup>を着流してゐた。狭山と云ふ名で、皆  
とは反對の方角の瓦町邊から來るのであつたが、素性は誰れもよく知らなかつた。神田あたりの  
私立の音樂學校に通つてゐるのだとは云つてゐたが、そして實際制服らしいものを着て來る時  
もあつたが、それも何んだか怪しいものであつた。それに、白梅堂へ遊びに來ると云つても、たゞ  
五夜子と落合ふために來るだけの事で、連中とは口數さへ録々利かない程で、五夜子が來さへす  
れば直ぐ連れ立つて何處へか一緒に出て行つてしまふのであつた。従つて連中は此の男を仲間外  
れにしてゐるたばかりでなく、一つは嫉妬らしい氣持ちからでもあらうがいつも好い感じを持つて  
ゐなかつた。

ともかく私は斯う云ふ仲間に入つて遊ぶやうになつてからだん／＼自墮落になつて、早くも  
煙草や酒を呑む事や、無駄に金を費ふ事や、女と遊ぶ事や、淺草公園などの盛り場<sup>まじり</sup>を歩き廻る事  
を覺えるやうになつた。自然お靜ともだん／＼遠慮の垣が取れて行つた。お靜は前にも言つた通  
り評判の器量よしで、男が多く店へ出入するのも一つはお靜を當てにして來るのであつたが、例  
の内氣の所爲か、或は母親の眼の前なので遠慮してゐる爲か、他の娘のやうに特に一人の男だけ

を選んで遊び相手にするやうな事はなかつたが、私が店へ出入するやうになつてからは、お靜が  
私の小母さんの弟子である關係から何時の間にか皆は私とお靜とを結びつけて調戲ふやうにな  
つた。其癖二人は調戲はれる程決して親密な仲ではなかつた。兩方とももつと接近したいと云ふ  
氣持ちはあつたに違ひないが、互ひに内氣な遠慮勝ちな性質な爲か、たゞ今迄より狎々しく口を  
利き合ふやうになつたと云ふだけの事で、他の者のやうに一緒に手を引き合つて歩いたり二人き  
りで活動寫眞を見に行つたりするやうな事は全く無いのであつた。よく同勢六七人連れで夜淺草  
公園へ遊びに行つて、お靜と五夜子と私とは宅が同じ方角なので歸途はいつも此の三人だけ一緒  
になつて歸るのであるが、その時は大抵五夜子を仲に私とお靜とが左右に別れて並んで私と五夜  
子との間にのみ子供らしい他愛の無い話が弾んで、お靜は始終俯き加減に黙つて歩いてゐるのが  
常であつた。

併し其内に到々二人の間に或る機會が與へられてしまつた。私は其時の事を、まるで今見た夢  
を眼が醒めて直ぐ思ひ返すやうにまぎ／＼と憶えてゐる。十七の夏も過ぎた九月の末、麗かに晴  
れわたつた日であつた。恰度土曜日で、學校から歸つて來て午飯を食ひ終つてからまた例の白梅

堂へでも遊びに行かうと思つてゐると、小母さんは大伯父の墓参に行くと言ひ、姪夫婦は買物に行くと言ひ出して、到々一人で留守番を云ひつかつた私は、所在が無いので二階へ上つて窓の敷居越しにほんやりと向ふの家の屋根を見てゐた。その屋根に三匹の猫がゐた。一匹は大きな三毛の親猫で、二匹は生れてからまだ二箇月ぐらゐしか経たないらしい子猫——一つは赤、一つは黒——であつた。初秋の午後の陽射しの、きら／＼、踊るやうな光を一杯に浴びて、親子仲よく遊んでゐる。子猫が親猫に甘えかゝつて、乳の下に首を突込んだり、尻尾にじやれついたり、頸にかぢりついたりすると、親猫はさも／＼それが可愛い／＼やうに、子猫を舐めて見たり轉がして見たり抱へて見たりしてゐる。私はだん／＼興をひかれて来て、留守番の無理強ひでいら／＼してゐた胸も治まりかけた時、ふと二箇月ばかり前の事を想ひ出した、——私が或日珍しく宅にゐる二階で何かの本に餘念なく讀み耽つてゐると、急に私の耳を破つてバリ／＼と音を立てたものがある。餘り不意だつたのでハツと膽を冷して顔を上げると、そのはずみに、窓の敷居の上にチラと赤毛の大きな尻尾を見た。無論、見たかと思ふと忽ち消えたので、私は直ぐ机から伸び上がつて窓の外を見ると、屋根の上を大きな三毛猫がのそり／＼と向ふへ歩いて行く。まさしく今迄自分と同じ此の部屋にゐたものが今窓を駆け上がつて外へ出て行つたのである。こんな大きな猫がどうし

て私の氣にもつかれずに同じ部屋に潜んでゐたのかと思ふと、何んだか薄氣味の悪い氣がしたが、所がその猫が夕方になるとまた屋根から窓の所へ歸つて來たのである。もう薄暗くなつたので机の上の本を閉ぢて胸をそらして大きな伸びを一つした拍子に私は、戸袋の蔭から首だけ出して、そ／＼と部屋の内を窺つてゐる大きな猫の顔を見た。『おや』と思つてその顔を視詰めると、猫の方でも私の顔をぢつと視てゐる。猫め、どうするかと思つて、私は其儘二三分間猫と睨みつきしてゐた。大抵の猫なら、人間と暫く睨みつきをしてゐると其内に口を少し歪めて、お愛想を云ふやうな、妥協を申し込むやうな甘つたるい啼き聲を立てるものであるが、この猫はむつとした無愛相な顔をして何時までも私を見詰めてゐる。が、其内に二度ばかりバチ／＼と瞬きをしたかと思ふと、身を敷居の上に乗出し、首を下に伸ばして、前足を敷居の下の壁にかけて、トンと疊の上に飛び降りた。私が『おや／＼？』と思つてゐると、猫は平氣な顔をして、そ／＼と私の傍を通り過ぎて、奥の方のいろ／＼な荷物の亂雑に積み重ねてある蔭へと這入つて了つた。その態度が餘り圖々しいので私は呆氣に取られて猫の後姿を見送つてゐたが、ふと氣がついて、音のせぬやうに立ち上がつて、猫の隠れた邊の荷物を、そ／＼と片付けて、その下積になつてゐた大きな空樽の中を覗いて見た。この空樽は襪襦や紙屑などを入れておいたものであるが、覗いて見ると、



豫期した通り底の方の暗い所で、恰度遠くの闇に自動車のヘッドライトを見るやうに丸い眼が二つギラ／＼と光つてゐる。それでやつと大抵の事情を悟つた私は、翌日この三毛猫の出で行つた留守に樽の中を探つて見ると、果して子猫が三匹、生れたての未だ眼もあかない、掌てのひらに這入つてしまふ程の小さな生命を、一緒に寄せ合はせてむく／＼と蠢いてゐた。一つは赤、一つは黒、一つは白であつた。可愛くは思つたが二階は婿が来て以來夫婦の寢所になつてゐるので、育つまで子猫を其儘置いておくわけにも行かないから、三匹を新聞に乗せて、庭の片隅の草叢の中へ棄ててしまつた。これが二月ふたつきばかり前の出来事である。

今向ふの屋根に見る親猫はあの時の三毛猫に相違なく、従つて子猫はあの時棄てた三匹の中の二匹に違ひない。親猫はどうして子猫を草叢から見つけ出して、あの小さな醜い肉の塊をどうしてこんなに可愛い子猫に育てあげたものであらう。それにしても三匹の中の白が一匹見えないのは、育たぬ内に死んで了つたのであらうか。——私は自然界に行はれる小さな動物の不思議な運命の推移を人間の事に托していろ／＼空想を廻らし始めた。其時、階下で玄關の格子の開く音がしたので、ふと空想を破られて、梯子段の手摺の間から首を出して見ると、桃割に結つて紫色の撥の袷紗を胸に抱へたお静の姿が入口の土間に立つてゐる。

『お師匠さんらつして？』

『今出かけたの。』

『直ちき歸つてゐらつしやる？』

『うん。』

實は慕參だから夕方までは歸宅すまいと思つてはゐたが、明らさまにさう云ふとお静が其儘歸つて了ふと思つたので、此際遊び相手欲しさの待屈な私は、つひ方便な返事をして了つたのである。

『そいぢや、上つて待つてゐわ。』

下駄を脱いで座敷へ上るのを見ると私は早速聲をかけた、

『しいちゃん、ちよつと二階へ来て御覧、いゝものを見せてあげる。』

『なアに？』

お静は梯子段の下から見あげて軽く笑つただけで躊躇してゐたが、私が再び促したので、到々上つて来た、顔を仄赤く染めながら『なアに？』とまた同じ事を云つてから私のゐる窓の方へ寄つて来た。

『ほら——』と私は向ふの屋根を指差した。

「なアに？ 猫？ あら、ほんとに可愛いよのね。」

お静は私と竝んで窓の敷居に凭れて、猫の親子の睦み合ふのを面白さうに眺め出したので、早速私は二月前に起つたあの猫と私との因縁を話し始めた。猫は相變らず金色の陽の光の中で幸福さうに遊んでゐる。黒が親猫の腹の下で仰向けにひっくり返つて足で親猫の乳のあたりをいたづらしてゐると、赤が駆け寄つて来て黒の尻尾にチョイと食ひつく。黒は飛び起きて赤の脊にヒヨイと乗つかつたかと思ふと、直ぐ下りて逃げるやうにチヨコ／＼と驅けて行く。赤は一寸小首をかしくて考へてから、前足をあけて傍の親猫の太い尻尾をちよつて叩いて見る。すると親猫は振り返つて、赤をころがして其上に跨がつて赤の口を舐める。逃げて行つた黒は屋根と軒の庇との間（そこが親子のホームなのであらう）に隠れて顔だけ出して、小さないたづらさうな眼を光らせて赤の方を見てゐる。その眼を見つけると赤がまた其處へ飛んで行く。――

お静は私の話を聞きながら恍りと猫の戯れに視入つてゐた。私は其の話を終へて了ふとモウ直ぐ話の種が無くなつたので、私もまたほんやりと猫の戯れるのに眼をやつた。所が、暫くするとお静が急に何か想ひ出して溜息でも吐くやうにしみ／＼と、

『あんなに仲がよかつたらいゝわね。』と云つた。

私は其のしみ／＼した調子と『仲がよかつたら』と云ふ言葉に或る意味を感じて軽く胸を躍らせながらそうつとお静の顔を見ると、どうした事かお静の眼に涙が一杯溜つてゐる。

『何か悲しくなつたの？』

所が、私は何気なくさう尋ねるや否やお静は溜めてゐた涙を急にハラ／＼と頬に落して、其儘堪らなくなつたやうに窓の敷居に突臥してし／＼と聲を立てゝ泣き出したのである。私はすっかり吃驚して了つた。

『どうしたの？ え、しいちゃん！ 何か思ひ出したの？ それとも何か氣に障つたの？』

え？ さあ何が悲しいの？』

私はお静が顔を埋めた其の肘をつかんでゆすぶりながら一所懸命訊くと、

『なんでもないので、なんでもないので。』

彼女は口の中であさう答へながら、而も依然として發作のやうに肩を慄はせながら激しく咽び泣くのである。私はどうにもしやうがないので、片手でお静の肘をつかんで、片手を彼女の肩にかけたまゝ、わく／＼頬へる白い襟足を茫然と視詰めてゐた。何んだか自分までが誘はれて胸



私は呆然として暫くはこの奇妙な笑ひの發作を傍觀するばかりであるが、その發作の間に「笑つちや嫌やよ」と云ふ言葉の繰り返されてゐるのに氣がついた時、私は背後から彼女の頸を抱くやうにして、耳元に口をつけた。

『きつと行かう、きつと行かう、二人でね。——晩の六時頃からね。』

三四分間経つとお靜は漸く笑ひ止んで、けろりとしたやうな顔を上げて向ふの屋根を見た。

『先刻の猫、どこかへ行つて了つたわね。わたし、猫のお蔭であんなに泣いて了つたのよ。』

『今日はしいちやん、どうかしてゐるよ。』

『屹度さうよ。——だけど、お師匠さんどうしたんでしょ?』

『ほんとは今日お寺参りに行つたんだから、夕方でないか歸りさうもないんだよ。』

『嫌やな人、先刻は直ぐ歸るなんて。——ぢや私し今日お稽古止めておくわ。』

『うん。だけど、もう少し遊んで行かない?』

『ええ。——でも、歸るわ。早く歸つて、晩……』

『あゝさうだね。ぢや六時頃きつと呼びに行くからね。』

『ええ……』

それでお靜は歸つたのである。あとに残つた私は妙に嬉しさが込みあけて來て胸が他愛なく躍つてゐた。併し躍る中で私は或る解き難い謎を考へてゐた、——なぜお靜は平生内氣で沈み勝ちで、口も録々利かぬ程おとなしいのに、尤も今迄も時々別人のやうに噪ぎ出す事はあつたけれど、それにしても今日に限つてどうしてあんなに狂氣のやうに泣いたり笑つたり、またどうしてあんなに大膽な申出でまされたのだらう?

私は姪夫婦や小母さんが歸つて來てからそこ／＼に夕飯を済ますと、直ぐ白梅堂へ行つた。幸ひ今日は常連が誰れも來てゐなくて、お靜が一人で店番をしてゐたが、遠くから私の姿を見つけると、慌てゝ店の下駄をつツかけて外へ出て來て、今直ぐに支度をして出るから少し戸外で待つてゐて呉れと耳打ちした。それで私は店から見えないやうに學校裏の路次に這入つてお靜の出て來るのを待つてゐると、ふと路次の向ふに見馴れた人影を認めて、『これはばつが悪いな』と思つた。五夜子がセルの單衣に水色の夏シヨールをかけて向ふから見えたのであつた。彼女は私の姿を認めるとニコリ笑つて急ぎ足で近づいて來て、

『誰れを待つてゐるの? しいちやん?』と調戲ふやうな眼をした。

私が正直にどぎまぎして顔を赤くしたまゝ黙つてゐると、彼女は急に眞面目な顔をして、

『あたし、困つたわ、學校を止めさせられちゃつたの。』

『どうして?』と私は驚いて尋ねた。

『あの人が學校へ手紙なんかよこすんですもの。それも運悪く此の前の土曜日の、私の歸つたあとへなのよ。だから學校から宅へ廻してよこしたもんだから、宅の者に見られちゃつて。——その手紙もいゝけれど……』

五夜子はそこまで云ひかけて何故か急に暗い顔をして言葉を杜切らした。

『何が書いてあつたの?』

私は先刻の返報のつもりで薄笑ひして訊くと、彼女はそれには答へないで、口を歪めて不自然な笑みを浮べた。

『それで到々直ぐ學校を止めさせられた上に、以後閉門を仰せつかつたの。——わたし、此の五六日見えなかつたでしょ?』

成程五夜子は此頃暫く姿を見せなかつたのである。

『でも到々我慢がしきれなくつて、今日そうつと脱け出して來たのよ。』

『何んだつてそんな事をするの? 少し辛棒して温順しくしてゐれば、宅でまた考へ直して學校

へやつて呉れるんぢやないの?』

『駄目よ。』

五夜子はそれをきつぱりと、そして嚙んで吐き出すやうに云つた。それから少し下眼になつて溜息をつくやうに云ひ添へた。

『あたし、もう何うなつたつていゝの。』

これは何か餘程の事情があるに違ひないと私は直ぐ感づいたけれど、表面から尋ねても云ふまいと思つたので、別の方面からそれとなく探りを入れにかゝつた。

『それで今日は狭山と會ふつもりで出て來たの?』

『いええ。——もう狭山なんかと會はないわ。』

『なぜ?』

『あんな男と今後一度でも交際したらそれ限り決して宅にはおかないつて言ひ渡されたんですもの。』

『だから自分でも絶交すると云ふの? それなら尙更脱け出してなんか來ないで、いつまでも温順しくしてゐて、學校へまたやつて貰ふやうにしたらいゝぢやないの?』

『駄目よ。』

『どうしてさ？』

『亨ちゃんは理屈ばかり云つて、察しが悪いのね。』

『あゝ判つた。』と私は思はず頓狂な聲を出した。『お嫁に行けつて云ふの？』

『あら嫌やな人』と云つて五夜子は急に笑ひ出したが、其時彼女の顔がきまり悪さうに赤くなつたのを私は見逃しはしなかつた。

『お嫁に行くなら尙更——』

『嫌よ。お嫁になんか、いくら行けつて云つたつて行きやしないわ。』

五夜子は少し側を向いて苦いものでも吐き出すやうにさう云つたが、それから急に語氣を落して力無ささうに、

『あたし、もう何うなつたつていゝの。』とまた同じ事を云つた。

『追ひ出されたつていゝと云ふの？』

『さう云ふわけでも無いけれど。——亨ちゃん、どう思つて、あの人の事を？』

『狭山の事？』

『あの人、此頃お金のことばかり云ふのよ。あたし、何んだか……』

『お金でも貸セツて云ふの？』

『あゝ、もういゝの、もういゝの』と急に彼女は私から眼をそらして獨言のやうに早口でさう云つてから『考へたつてつまらない。それよか亨ちゃん、遊びませう。これから一緒に浅草へ行かない？』

私は返事に詰まつてしまつた。五夜子は少し首を傾けて媚びるやうに、

『嫌や？』

『……………』

『あゝ、判つた、』と彼女は仰山に手を拍つて笑ひ出した。『しいちゃんに行くのね？お楽しみ！では私は御遠慮致します。』

『嘘だよ、嘘だよ』と私は慌てゝ打ち消した。『しいちゃんなんかと——』

私がさう云ひかけた時、突然うしろに聞き馴れたお靜の聲を聞いて、ハツとして振り返つた。

『五夜ちゃん、暫く見えなかつたのね。』

お靜はさう云ひながら私のうしろから近づいて來たのであつた。その瞬間私は思ひなしか其の

眼に唸しい光を見た。

『ねえ、しいちやん』と五夜子は例の調戯ふやうな眼をお静に向けた、『亨ちやんと二人で遊びに行くんだわね。行つてらつしやい。あたし、飛んだ所へお邪魔したわね。早速歸るわ。では、さようなら。お睦じう。』

お静は顔を真赤にして黙つたまゝ妙におどくした眼で五夜子を見てゐたが、五夜子がさう云つて笑ひながら左の手でショールの端をつまんで右の手を膝にあてがつて態とらしいお辭儀をつした時、彼女は急にぶつりと口を切つた、

『五夜ちやん、随分だわ!』

さうして俯いて下唇を嚙んだ。同時に其眼に涙が光つたので、私は『おや』と思つた。

『あらかお氣に障つて? まあア御免遊ばせ。』

殊更に「まあ」を長く伸ばしてさう云つた五夜子の顔にも白けた色が見えた。

『そんな事を云はないで、五夜ちやん、三人で一緒に行かうよ。ねえ、しいちやんも。——しいちやん今日は少しどうかしてゐるんぢやないか?』

併し私はその最後の言葉を云つた時、直ぐ「まづい事を口走つた」と思つた。案の上お静は、

『どうせ、どうせ』と口籠つて言ひかけたかと思ふと不意に袂を顔にあてた、『どうせ、あたしは、氣狂ひなの、氣狂ひなの。亨ちやんは五夜ちやんと行つてらつしやい。あたし、あたしなんか——』

五夜子は呆れたと云ふやうに黒い眼を大きく睜つて私の顔を見たが、こんどは本當に心配さうな顔をしてお静に近寄つて行つて肩に手をかけた。

『しいちやん、あたしが悪かつたら勘忍してね。あたし、つひ、口が悪いもんだから、しいちやんを怒らしちやつて。——ねえ、しいちやん、ほんとに勘忍して頂戴ね。』

幸ひ裏道で人通りがなかつたからいゝやうなものの、私は全く當惑してしまつた。愈々今日はお静はどうかしてゐるのだと思ひながら、仕方なしに黙つて見てゐると、其内に漸くお静は顔から袂を離して、きまり悪さうな笑みを眼に浮べながら『御免なさい』と却つて五夜子に詫つて、『あたし馬鹿ね、ほんとにどうかしてゐるのよ』と言譯した。それから『五夜ちやん、三人で一緒に行きませうよ』とお静の方から機嫌よく云ひ出したので、一先づ事件は解決して、三人は夕闇の中をなるたけ人眼に立たぬやうに裏通りを歩いて、日の全く暮れた頃電燈の眩い公園に着いた。所が、活動寫眞に這入ると、土曜日の晩とて既に大分込んでゐて腰を掛ける座席が無く、止むを得ず後ろの方に立つて見てゐたが、其内に益々込んで来て、あとから押されて、それが爲め自然

前の方には出られたが、到々いつの間にかお静とはぐれて了つて、私の傍にはたゞ五夜子だけが残つてゐた。氣にかゝるので私は寫眞の切れ目には振り返つて周囲を見廻して見たが、人垣に隔てられてお静の姿を發見する事が出来なかつた。其内に私達の直ぐ前の座席が二三人分空いたので、自然五夜子と私とはそこへ並んで腰掛けた。私は寫眞の方に眼を遣りながら、直ぐ傍に闇に浮く仄白い頬と、黒燿石のやうに潤みを帯びて光る大きな眼と、着物を隔てゝ肩や腕から傳はる柔い肌と熱い血潮と、膝のわきに置いた自分の手の甲に觸れるしなやかな指とを感じなければならなかつた。彼女は前列の人の頭の影を避ける爲に幾度か其顔を私の頬に觸れ合ふまでに近づけた。其度に私は髮油や白粉の咽るやうな香と、紅い口唇を洩れる温い呼吸とに、惱ましいばかりの魅惑を覺えた。

『あ、あの男につかまるのよ。……あれ、可哀さうに……どうしよう……あゝ逃げた、逃げた。早く……』

五夜子は私の頬近く顔を寄せて夢中で囁きながら、自分の小指の觸れてゐた私の手を甲の上から握り締めた。

『まあ、よかつた、助かつて。……あら、あの人がスキートハートなのね。……おやく、御馳

走様だわね?』

さう云ひながら態と私の顔を覗き込むやうにして、い、と笑つた。……

……併し寫眞の切れ目に

場内が明るくなる度に私達は身を離して不安さうに周囲を見廻したが、矢張りお静の姿は見えなかつた。

『しいちちゃんどうしたんでしょね?』

『さア。……歸りには遭ふよ。』

プログラムの最後から二番目が終つた時五夜子が出ようと云ひ出して、私達は立ち上がった。立ち上がつて、席を離れて、人込を押し分けて出口の方へ二三歩行くと、直ぐ前に、矢張り同じやうに出口の方へ出ようとしてゐるお静の後姿を認めて、ハッと思つた。

五夜子は直ぐに『しいちちゃん』と呼びかけたが、聞えたのか聞えないのかお静は振り向かなかつた。五夜子は急ぎ足で追ひついて後ろから脊を叩いた。



『しいちゃん、どこにゐたの？ 随分探したのよ。』

それで漸くお静は振り向いて、『さう？』と答へて微かに笑顔を見せたが、氣の所爲かその顔が私には怖ろしく眞蒼に見えた。私も近づいて、

『どこにゐたの？ でもよかつた、見つかつて——』と云つたが、その言葉は屹度態とらしい響きを持つてゐるのに違ひない。

三人は兎も角連れ立つて木戸を出た。所が、出ると直ぐ五夜子は不意に立ち留つて、

『あ、悪い所で會つちやツた。』と云つて顔を下に向けて紅い舌をチロリと出した。

見ると狭山が向側の活動小屋の前を見知らぬ男と二人連れでぶら／＼歩いてゐるのであつた。

私も何故だか『困つた！』と思つた。狭山は直ぐ私達の方に眼をつけたが、連れの男に何か囁いたかと思ふと、其の男だけ急に足を早めてどん／＼先へ歩き出して、狭山一人が私達の方へ近づいて來た。

『よう、どうしたい？』と彼れは聲をかけた、『ひよつこり會つたね。』

併し直ぐ彼れは五夜子の傍へ行つて少し笑ひ乍ら耳元に何か囁いた。五夜子は心持ち眉をひそめて聽いてゐるが、

『だつて、もう直ぐ歸らないと叱られるわ。あたし未だ閉門中よ。』

『だから、ちよつとさ。』

彼れは私の方を向いて軽く眼で挨拶したかと思ふと、五夜子の手を執つて引張るやうに直ぐ傍の横丁を左へ曲つてしまつた。私は腹立たしい苛々した氣分で見送つたが、『あたしモウ歸るわ』と云ふ聲を聞いて不圖お静に氣がついた。お静はさう云ひ棄て、一人で公園の出口の方角へ歩き出したのであつた。

『しいちゃん、お待ちよ！』

私は急に嚇つとして荒々しくさう叫ぶとお静の手を執つた。彼女は一度其手を振り拂つて足早やに行かうとしたが、二度目に其手を掴んだ時には、強ひて拒まうとしなで黙つて私のなすに任せた。私は彼女を連れて反對に公園の奥山の方へと歩き出した。

池の端を通つて水族館の横を曲ると、闇の中に樹立の竝ぶ奥山はモウ十時過ぎとて人の影は殆んど見えなかつた。池向ふの華かな電燈の光も全く届かぬ所へ來た時、私は漸く立ち停つて、

『何か憤つたの？』と優しく訊いて見た。

『知らない！』

お静は突き放すやうに云つて、くるりと私に脊を向けた。

『ふん、勝手におしよ。』

私はさう云ひ棄てると殊更に足音を立てよと来た方へと引き返した。併し無論十歩と行かなかつた。また直ぐ立ち留つて、闇をすかしてお静の方を見ると、黒い影がしよんほりと舊の場所に佇んでゐる。どうするかと思つて暫く窺つてゐると、やがて影は静かに動き出して、樹立らしい黒い影に寄つて停まつた。其儘動かないでゐる影を私も動かすにほんやり視詰めてゐる内に、ふと、遠くに聞える楽隊の響やテレックテレックと云ふ馬鹿囃の音が耳に附いた。音のする方に眼を遣ると、樹立の隙を洩れて火事の空のやうに赤い色が見える。あゝ彼處には歡樂の世界がある、さうして自分と彼女だけは此の闇の森にたゞ二人だけ取り残されてゐるのだ——私の若い心に、偶然そんな詩人めいた考へが閃くと、不意に涙つほい、同時にそわ／＼と浮き立つた感情が胸に込み上げて来た。私は急に歩を移して足早やにお静の影の方に近づいて行つた。お静は樹の幹に脊をもたせて何か深い思ひに沈むやうに顎を襟に埋めて、白い顔だけが闇に仄かに浮いて見える。

『しいちゃん——』

押へつけたやうな聲でさう叫んでいきなりお静の手を執つた私は、彼女の前に跪きでもしたいやうな氣持ちであつた。併しお静は私の聲も手の力も感ぜぬものの如く、死んだやうに眼を閉ぢたまゝ動かない。私は黙つて、闇に浮く彼女の頂垂れた白い顔を凝然と視詰めた。視詰めてゐる内にだん／＼胸に迫る感情に堪へられなくなつて、手を肩にかけて彼女の頭を胸に抱き締めて、一生懸命で耳元に囁いた、

『しいちゃん、もう憤らないで勘忍して。僕が悪かつたんだから、詫るから、ね、勘忍して。もう屹度五夜ちゃんとは遊ばないから、ね。さあ、しいちゃん——』

かう云つた其の瞬間の心持から云へば私は實際眞剣で本氣だったのである。五夜子とはモウ決して遊ばない、お静だけを異性中のたゞ一人の友達にする——さう衷心に誓ひながら云つたのである。この事は私が私自身の性格を知る上に於て注意すべき事だと思つてゐる。

私はさう囁きながら彼女の頭をゆすぶつた。もし知つてゐたら私は彼女の軽く結んだ蒼褪めた口唇に自分の燃ゆるやうな口唇を押しあてたに違ひない。併し私はまだ接吻も知らなかつたのである。——所が彼女は急に身悶えして、頭を振り動かして、眼を閉ぢたまゝ低い聲で呟き始めた、

『知らないわ、知らないわ、誰れが支那人なんか——』

『支那人？ 支那人で誰れ？』と私は聞き咎めた。

『支那人なんか、嫌やなこと。何に？ 帯だつて？ 縞珍の丸帯だつて？ ほゝゝゝ』  
お静は突然眼を開いて笑ひ出したのである。

『しいちゃん！ どうしたの！』と私は思はず彼女の頸から手を離して眼を睜つた。

『丸帯がどうして？、その帯で縛るつもり？ ほゝゝゝ さあ縛れるなら縛つて頂戴。お母さんは縛られるか知れないけど、お氣の毒さま、あたしにはね、幽霊がついてゐますからね。——なんだ支那人なんか、嫌やなこと、嫌やなこと、ほゝゝゝ』

お静はさう云ひながら樹の幹を離れて泳ぐやうにフラ／＼と二三歩前へ歩き出した。

『よくも、よくも、五夜ちゃん、憶えておいで。お前なんかに負けるもんか。私にはね、私にはね、憚りさま、幽霊がついてゐるんだから。——何んだい、お腹の大きい癖に。』

忽ち異常な困亂が私の全心を支配した。その困亂に壓倒されて一瞬の間私は自失して棒立ちになつた。併し次の瞬間にはその困亂に追ひ立てられて夢中で背後からお静を抱き留めた。

『しいちゃん！』

『嫌だ、嫌だ。いくら叱つたつて、いくら打つたつて、えゝ、殺されたつて、殺されたつて、支

那人なんか、嫌だ、嫌だ、えゝツ、嫌だつてば！』

叫びながら彼女は激しく身悶えして私の腕を振り離さうとした。今から考へるとどうしてあんな繊弱い少女からあんな怖ろしい力が出たかと思はれる程その勢ひは烈しかった。私は脆くも彼女の力に刎ね飛ばされて二三歩背ろへよろめいた。

『ほゝゝゝ 幽霊がついてゐる内はね、あたしの中から指一本だつて、指一本だつて、ほゝゝ、お氣の毒さま、ならば手柄に、搦めて見ろやい、ほゝ、うまいわ、亨ちゃん、六代目そつくりよ。亨ちゃんは六代目に似てゐるわ、幽霊がさう云ひました。さうしてね、それからね、ほゝ、何んだか、羞しいわ、でも幽霊が云つたのよ、あたしは亨ちゃんの色女だつて、ほゝゝゝ』  
『しいちゃん、僕だよ、わからないの、氣を落ちつけて、——僕がわからないの！』

私は再び彼女に取りすがつて、こんどは前に廻つて抱きついて、自分の顔を彼女の眼の前に突きつけるやうに持つてゐた。私はモウ全くおろ／＼して泣き出しさうであつた。

『嫌だ！ 嫌だ！』と彼女は身を反らして頭を振り立てた。『誰れが、そんな帯に、縛られるもんか！ 縞珍の丸帯だつて、博多の三尺だつて、誰れが！ 誰れが！——』  
『しいちゃん、僕なんだよ、僕なんだよ！』

「何に、支那人なんか！——お前こそ五夜ちゃんのあとでも附け廻すがいよ！ 私にはね、幽霊が、幽霊がついてるんだから、幽霊が！」

激しく腕き狂ふ力でやもすれば振り放されようとするのを私は一生懸命抑へつけて、正氣づかせる爲に頻りに彼女の名を呼び立てた。さうする事が此の場合良いか悪いかと云ふやうな分別は全く私の念頭になかった。私自身半狂亂であつたかも知れない。暫くは狂ひ立てる力と取り鎮めんとする力とが相譲らず争つた。併し彼女は決して聲を立てなかつた。さうする事を寧ろ自ら憚るものやうに、たゞ低い押しつぶされたやうな聲で叫ぶだけであつた。が、其内に疲れて来たものかだん／＼彼女の力が弱つて、ギラ／＼する眼でたゞ凝然と私の顔を視詰めるだけになつた。

「しいちゃん、まだ僕がわからない？」と私は彼女を抱き締めたまゝ優しく云ひかけた。

「支那人だろ、お前は？」

「僕だよ。支那人なんか何處にもるはしないよ。」

「支那人なら五夜ちゃんの所へおいで。だけど五夜ちゃんはお腹が大きいんだよ、ほ／＼」  
お静は力無く笑つたが、それから急に全身の力が脱けたかのやうにぐたりと私の胸に首を落し

て、全身の重味を私のからだにもたせかけた。私の胸の上で微かな鼻息が聞え始めた。私が身をひけば無論彼女は其儘地に倒れ臥すに違ひない。咄嗟の場合施す術を考へつかぬ私は、たゞ一生懸命彼女の體を支へてゐるより仕方がなかつた。私は全身に彼女の肉體の温味を感じながら、不思議な戦慄が頭の先から爪先まで走るのを覺え始めた。恐怖、不安、悲哀、そんな色々な感情が彼女の鎖まつた隙に乗じて一度に私の胸に湧き立つて激しく私を昂奮させたのである。——巡査などに見咎められはしないか、また氣が立つて狂ひ出しはしないか、もし此儘正氣に返らなかつたらどうしよう、どうして宅へ連れ歸つて何んと云つてあの母親に引き渡さう、それにしてもモウ楽隊の音も囃の聲も聞えなくなつた、赤く燃えてゐた空も暗くなつた、何時だらう、夜半近くかしら、あ、星が飛んだ、あゝ秋の夜だな、天の川が見える、淋しい、淋しい、事によつたらしい、ちやんは此儘いつまでも眼が醒めずに死んで了ふのぢやないか、しいちゃん、聞えないんだ、しいちゃん、眠つてゐるの、僕の力できつとしいちゃんの病氣を癒してあげる、モウ決して五夜ちゃんなどと遊ばない、しいちゃんだけと遊んでそしていつも又いつまでもしいちゃんだけを思つてゐる、だから安心して屹度早く癒つてね、他に心配な事があるなら僕が屹度助けてやる、お母さんが慮めるなら僕が加勢してやる、だが、もししいちゃんが此儘癒らなかつたら、死んででもし

まつたら、どうしよう、しいちゃん、しいちゃん――

急に不吉な豫感が更に私の全身を戦慄させたかと思ふと、私は思はず彼女を固く抱き締めた。すると彼女はピクツと一つ身を慄はせたが、それから静かに顔をあげた。闇に透き徹るやうな白い顔が髪の毛を兩頬に亂して直ぐ私の眼の前にあつた。私が黙つて其の顔を視詰めると、彼女もキ・トンとした眼を睜つて私の顔を視詰めたが、聽て何か新しい物でも発見したかのやうに怪訝さうな顔をして、

『亨ちゃん？』と訊いた。

『しいちゃん、僕が判つたの？』

さう訊き返した私は既に歡喜の情に堰き上げられて眼に一杯涙を溜めてゐた。お静はそれから周圍をキョロ／＼見廻した。

『どこなの、こゝは？ さうしてマア、どうしたの、私達は？ 可笑しいわ。』

彼女は二人がしつかりと抱き合つてゐるのに氣がついたのが、急に兩頬に血をのほせて甘えるやうに再び私の胸に顔を伏せたのである。

『癒つたんだ、癒つたんだ。』

私は心の中にさう叫びながらたゞ黙つてお静を力一杯抱き締めた。それに報いるやうに彼女も私に固く抱きついた。涙が止め度なく私の頬を傳ひ出した。もう辯解も謝罪も慰藉も要らなかつた。『何もかもこれで解決したんだ』私は心にさう幾度も繰り返しながらたゞ抱擁の力を籠めるばかりであつた。

『僕を赦して呉れるね。もう屹度いつまでも變らずに二人だけで仲よくしようね、屹度、屹度ね。』私が耳元に熱い言葉を囁くと彼女はたゞ黙つて幾度も幾度も背きながら、それを眞心で示すやうに更に私を固く抱き締めた。二人の孰れかと若し知つてゐたなら二人の口唇は一つに結びついていつまでも離れなかつたらうに、互ひに未だ無垢な童貞であつた私達はたゞ頬と頬とを息詰まる程強く押しつけるのみであつた。

無論暫く經つと私達は奥山を出て、電燈を消して戸を閉ざした活動寫眞小屋の並ぶ人疎らな淋しい街路を脱けて、しら／＼と銀河のみ冴える暗い肌寒い秋の夜更けを互ひに固く身を寄り添へて、手と手を確り握り合つて家路へ急いだ。路々私達は餘り口を利かなかつた。殊にお静が發作の中に口走つた事に就ては、強い好奇心をそゝられてゐたが、うっかりそんな事を訊いて再び發作でも惹き起させては大變だと思つて、特にそれには觸れぬやうに用心した。

私はお静を白梅堂の直ぐ前まで送つて行つて、別れて家に歸つたが、彼女が歸りが遅いとて母親に叱られるはしないか、叱られてまた發作でも起しはしないかとそんな事が氣にかゝつて、それに今夜の出来事が様々に思ひ出されて来て録々眠りもしなかつた。で、朝起きて食事を済ますと——勿論小母さんから昨夜歸りの遅い事を咎められたが巧く言ひ繕つておいた——直ぐ學校へ行く風をして家を出て白梅堂へ寄つて見ると、店番をしてゐたお静は寢不足の赤い眼をしてゐただけで、格別變つた事はなかつた。彼女は私を見るとときまり悪さうに顔を染めたが、『叱られた？』と私が小さな聲で訊くと、『ええ』と背いてから『でも巧く言譯しといたわ』と云ひ添へて忍び笑ひをした。昨夜の今朝なので餘り長く話してゐて母親に怪まれてはいけないと思つたので私はそれだけ聞くと學校の荷物を預けて店を出て遊びに行つて了つた。

其後暫くはお静に別段異常は無かつた。私とお静は殆んど毎夜内密で一緒に遊びに出かけてゐたが、私は其間にだん／＼お静から事情を聞き出して、あの夜發作の中に口走つた言葉の意味を知つた。何んでもこの八月の末頃お静が母親と一緒に羽田の海水浴に行つた時、私立大學生らしい青年と偶然口を利くやうになつたが、その青年が直ぐ翌々日訪ねて来て、お静への贈物として繻珍の丸帯を置いて行つた。其後時々遊びに来るやうになつて——お静にさう云はれた時私は一

度店で顔の嫌やに黄色つほい、頭髮を綺麗に分けた脊の高い學生風の男を見かけた事を思ひ出した——段々素性を聞いて見ると、支那の留學生で、大變金持らしく、早稻田邊に一戸を構へて日本人の婆やと女中を使つて贅澤に暮らしてゐるとの事。それで母親に毎月充分な仕送りをする云ふ條件では非お静を呉れと云ひ出して、母親もすつかり乗氣になつて頻りにお静を賣め立てるやうになつた。あの日も、夜その支那人が来て母子の返事を聞く事になつてゐたので、お静が私の家に來る前には執拗く母親からいびられて口惜しさと悲しさで散々泣いて來たのださうだ。『これがほんとお母さんなら、屹度こんな無理は云はないのよ。ほんとお母さんは私の五歳の時氣が狂つて死んでしまつて、今のお母さんはそれから間も無く來た後妻なの。』とお静は最後に云ひ添へた。これで私はあの日のお静の事がすべて肯かれたが、最後の「實母は氣が狂つて死んだ」と云ふ言葉は忽ち私の胸に暗い影を投げた、——お静の發作も實母の遺傳ではないか！

も一つ私は「五夜ちゃんはお腹が大きいんだよ」の意味を聞き糺さなければならなかつた。私がお静の問ひをそれとなく云ひかけた時お静は「こんど五夜ちゃんが來たら氣をつけて御覽なさい」と云つて、あとは笑つてしまつた。

一週間ばかりは何もなく過ぎた。例の支那人も來なかつたらしく、母親も餘りお静を責めなかつたらしく、お静はそれらの事に就て別段私に訴へなかつた。五夜子もあれ限り姿を見せなかつた。監禁中を脱け出したのでこんどは更に嚴重に閉ぢ込められてゐるんだらうと私は想像してゐた。所がその五夜子が或日の夕方白梅堂にひよつこり姿を現した。恰度私のほかに例の赤白黒の三人組や川瀬、金時、小太ヤンなどの常連が店に腰掛けたり奥に上り込んだりして遊んでゐた時なので、珍らしい五夜子の姿は皆を大いに喜ばせた。

『五夜ちゃん、どうしたの、狭山さんと印度へでも驅落しちやつたんだと思つてよ。』と黒がいきなり警句を浴びせたので皆が一度に笑ひ出した。狭山は色が黒かつたからである。

『あらお氣の毒さま、印度へ驅落ならお門が違つてよ。』と五夜子は早速黒にやりかへしたので皆がまた手を打つて笑つた。

私は直ぐ五夜子の體の恰好に眼をつけずにはゐられなかつた。彼女は既髪に結つて、荒い元祿模様の袷に牡丹の花の刺繡をした黒縞子の帯を締めてゐたが、いくらか面裏れした顔と、殆ど胸の脹らみと同じ位に撞つて見える帯の恰好とは、『おや、ほんとも知れない』と私に思はせた。

恰度偶然皆が一緒に集つたのだからこれから歌留多をしようとして一人が云ひ出すと皆が直ぐ賛成

して其儘どや／＼と二階へ押しあがつた。奥の座敷の長火鉢の前で煙草を呑んでゐた母親は笑つてゐるが、『私もやつてよ』とお静が斷つて算笥の上から歌留多の箱を取つて皆と一緒に二階へ上つたので、母親はお静の代りに店番についた。歌留多は此の年の正月白梅堂の二階で皆が集つてやつたのが初めて、其後毎月二三回はやるやうになつて、皆相當に巧くなつてゐた。白梅堂の二階は八疊と三疊で、七八人集つて遊ぶには適當してゐた。

まだ晩飯前だから蕎麥を取つて食はうと川瀬が云ひ出すと、ついでに酒をと金時が呈案した。すると『賛成、但しこちらは味淋よ』と白が尾について——この女は酒が好きなのである——到着々びやんけんをして負けた者が蕎麥と酒と味淋の注文に出かける事になつたが、お静が運悪く使ひ役に當つて階下へ降りて行つた。そのあとで、注文が来るまで一合戦やる事になつて、黒と小太郎（小太ヤンの本名）とが讀手に決まつて、あとの六人が三人づゝに別れて座に着いた。其時私は五夜子の隣りに座つたので、札を並べながらそれとなく聞いて見た。

『あの晩、狭山に會つてから、直ぐ歸つたの？』

『直ぐでもないけど——』と五夜子は生返事をした。

『あれからまた狭山に會つた？』

『會ふもんか、あんな人に。』と彼女はさも憎さげに云つたが、それから少し調子を變へて、『あの  
晩遅く歸つたもんだから、散々叱られて、また嚴重に監禁されちやツたの。だから今日まで少し  
も出られなかつたのよ。』

『何んだつて、そんなに遅く歸つたの?』

『何んだつてツて、亭ちゃんこそ何んだつてあんなに遅く歸つたの?』

『遅く?……』

『しらばつくれたつて駄目。あたし、ちゃんとうしろから見てるたわ。随分仲がよかつたのね。  
羨しいわ。餘つ程うしろから行つて脅かしてやらうと思つたけれど、熱でも出さしては悪いと思  
つて止めといたのよ。あゝあ、あたしもし、いちゃんに生れよばよかつた。』

『何んの話だい?』と八の字眉の金時がニヤ／＼笑ひながら向ふ側から口を出した。

『なに、なんでもないんだよ』と私は正直に顔を赧くした。

『いゝえ、大有りなの。あとで聞かしてあげるわ。』と五夜子が金時の顔を見た。

『だけど、ほんとなの? いったい何處で見つけたの?』

『田原町の通りだよ。』

『狭山と一緒で?』

『一緒だつて御安心遊ばせ、あんだ方のやうにお睦じかないの。散々嫌やな事を聞かされながら  
引つ張り廻されて、到々お金を——』

『さあ内密話は止めた。』と讀手の小太郎が聲を出した、『もう讀むぞ、いゝかい。——えゝ、から  
札を一枚から／＼と讀み上げ……』

『まあ、待つてさ、小太ちゃん、まだ敵の札が見てありやしない。』

『お喋りなんかしてゐるからさ。』

そこへお靜が『御注文は只今』と喋いだ聲で笑ひながら上つて來たが、私と五夜子の方を見る  
と急に笑顔を止めた。

『しいちちゃん、亭ちゃんとお隣り合ひで仲がいゝでしよ。嫉いちゃ嫌やよ。』と五夜子が笑つて見  
せた。

お靜は冷い作り笑ひをしたが、妙に取り濟ました聲で『もう電氣が來てゐるのに』と云つて、  
天井の眞中から下つてゐる電燈の方へ寄ると、脊伸びをしてスキツチを拈つた。黄色い光がパツ  
と照つた。



お静が歸つたので、讀手になつてゐた黒と小太郎とは試合の仲間に這入つて、お静が讀む事になつた。勝負は間も無く始まつたが、お静は頻りにとちつて札を讀みつかえるので、時々苦情が出た。勝負が終つてから『しいちゃん、何か嬉しい事でも考へてゐるの。』と黒に冷笑された。

一勝負終つた時に注文の品が來た。男は酒を、女は味淋を、そして餘り其方のいけぬ者——例へば赤や川瀬など——は二三杯猪口を乾すと蕎麥にかゝつた。小太郎や金時などの男は別として、女でもいける口の白や黒は手酌で大分盃を重ねたが、特に私を驚かしたのは五夜子とお静が今夜に限つて盛んに呑む事である。五夜子は恰服から見ても全然呑めなさうな性質では無かつたからさう不思議ではないが、體質から云つても平生から見ても酒などには全く縁の無いお静が頻りに呑みたてゐるには、傍で見てる私をハラ／＼させた。

『まあしいちゃん、見かけによらないお酒呑みなね。』と下戸の赤が細い眼を睜つた。

かうなると皆が面白がつて、今夜はしいちゃんを五夜ちゃんを酔ひつぶさせるんだと、あとからあとから注いで呑ませた。こんな場合留めるわけにも行かないので、私は心配しながら皆と歩調を合はせてゐたが、呑むに従つて五夜子の蕎麥色の頬がだん／＼色を増すに反してお静の蒼白い頬が更に蒼く沈んで行くやうに見えるのは、私を一層不安にさせた、——お静にまた何か起

らなければいゝが！

『しいちゃん、そんなに呑んで毒ぢやないか。』

私は到々小さな聲でお静に囁いた。

『大丈夫よ、うツちやつておいて頂戴。あたし誰れにだつて負けはしないわ。』と彼女は常に似ぬ劍幕で答へたが、その言葉は更に私の胸を騒がせた。

『さあ、お腹が出来たら、おみきのあんまり廻らねえ内に』その癖さう云つた金時の呂律は少し怪しかつた『勝負だ、勝負だ。』

『ようし、先刻の敵討だ。』

蕎麥の入れ物や酒瓶などを隅へ片付けて、前と同じ組別けで——但しこんどはお静が仲間に這入つて代つて赤が讀み手になつた——勝負にかゝつたが、皆の眼遣ひも手練も大分しどろもどろになつて來て、彼方此方で札の引つ張り内ひや先手争ひが始まつた。たしかなのは、下戸の川瀬と、人中では呑んでも酔はぬ癖の私とだけで、白や黒はキヤツ／＼と騒ぐばかりで全く他愛が無く、他の者とても、手を附けたとか附けぬとか、こつちが早いとか遅いとか、一つ讀む毎に言ひ合ひばかりしてゐた。

『わだのはら——』

『はいッ』

五夜子が叫んで、向ひ合ひのお静の友札を二枚一緒にバツと突いた。一枚は遠くへ飛んで、一枚はあとから慌てゝ抑へたお静の手の下に留まつたが、読みあけた下の句は「雲井にまがふ沖津白浪」で、お静の手の下に留まつた方がそれであつた。

『さあ、しいちゃん、一枚あけてよ。』

『あら、なぜ？ 五夜ちゃんの突いたのは「人には告げよ」よ。「雲井」はあたしが取つたんぢやないの。』

『まあ、あんな事を云つて。「雲井」を私が突いた時「人には」が一緒に飛んで行つたのよ。私が先に突いたのを、あんたがあとから抑へたんぢやないの。』

『嘘ばツかし。そんなに胡魔化して狡いわよ。』

『どつちが狡いの。ねえ、亨ちゃん？』と五夜子は隣りの私を顧みた。

『しいちゃん、今のは五夜ちゃんの方が早かつたんだよ。』と私は正直な事を云つた。

『そりやさうでしょうよ、自分の味方なんだもの。——いつたい五夜ちゃんは狡いのよ。狡いから

勝つんだわ。』

『おや、いつ狡い事をして？ 聞かせて頂戴。』

『自分で考へたら判るでしょ。』

『判らないわ。さあ聞かせて頂戴。』

『おい、こら、朝當は止めろい、女のくせに、ハ、ハ、』と生酔ひの金時が膝に両手を張つて怒鳴つた。

『ウーシ、ウシ』と小太郎が云ふと、

『ハツケヨンヤ、ハツケヨンヤ』と白と黒とが手を拍つて囃し立てた。

所が、お静は俯いて下唇を噛んで、五夜子は意地悪い笑みを浮べて、兩方とも白け切つて黙つてゐる。讀手の赤も手を控へて二人の顔を見てゐる。

『なんだい、つまらない、子供見たいに——』

と私は慌てゝ執成しにかゝつたが、其時突然階下からお静の母親の聲がした、

『五夜ちゃん、ちよつと。お客様よ。』

『誰れだらう。宅から來たのなら居ないつて云つて呉れりやいゝのに。——小母さん、だあれ？』

『ホ、いゝ人。降りて来りや判るのよ。』

『誰れさ、小母さん、云つて呉れなきや嫌や。』

『狭山さんよ。』

『あら!』と五夜子は眼を睜つた、『どうして此處へ来たのを知つたらう。困るわ。居ないつて返して呉れりやよかつたに。』

『へッ、何んとか云つてるわ。』と黒と白とが舌を出した、『五夜ちゃん、どうぞ御遠慮なく。』

無論五夜子は立ち上がつて梯子段を降りて行つたが、その足許が少しふらついているのを見て私は、『大分利いたな』と一寸可笑しくなつた。所が五夜子が下へ降りると直ぐお静が急にぐたりと前へ突臥して了つた。

『おや、しいちゃん、どうかしたの?』と皆がお静の傍へ寄つて来た。

『何んでもないの、少し氣持が悪くて——』

と云つてお静は肩で息をしてゐる。

私は直ぐ『酔が出たんだ』と思つた。

『少し階下へ行つて休んだらどう? お酒に酔拂つたんだよ。』と云ふと、

『嫌や々々!』と彼女は激しく身をゆすつた。

『ぢや、そこで暫く横になつてゐるといゝ、水を持つて来てあけるからね。』

すると赤が『私が持つて来るわ』と立ち上つたが、

『いゝよ、僕が持つて来るよ。それよか、座蒲團を並べて、寝るやうにしておやりよ。』と、私は

一つは階下の様子が氣になつてゐたのである。

私が階段を半ば頃まで降りかけると、店の方から五夜子の、少し舌に絡んだ高い聲が聞えて

来た、——

『だから、新聞に出すと云ふなら出さしておいたらいゝぢやないの。あんたも餘程意氣地がないのね。今更何が恐いもんか。もう幾ら脅したつて私には出せないわ。あんただつて考へりや解るぢやないの、今ぢや恰で家に押し込められて見張りをつけられてゐるやうな身なんだもの、何がお金の自由なんか利くもんか——』

私はなるべく足音を立てぬやうに梯子段を降りて、店と奥とを劃る障子の腰硝子から覗いて見ると、五夜子と狭山とは上櫃に並んで腰掛けてゐた。狭山の聲は怖ろしく低いので殆んど聞き取れず、五夜子のだけが際立つて響いて来る——

『此頃のおんたの氣が知れないわ。いつたい私をどうしようツての？ 何んほ私だつて、お氣の毒さま、さうくおんたの御自由にはなれませんかよ。』

私は「おやく」と思ひながら、臺所へ行かうとすると、座敷の長火鉢の前に座つてゐた母親が私の顔を見て笑ひながら小指を出して見せて、それから兩手の人差指を伸ばして額の兩端にあつた。

『きつとおみきの加減だよ』と小さな聲で云ひ添へた。

私はお愛相笑ひをして、『小母さん、水が一杯ほしいの』と斷つて——お靜が氣持が悪くなつたと云ふ事は態と云はないで——臺所でコップに一杯水を汲んで来て、再び梯子段を上らうとすると、また五夜子の聲がした、

『もう話は済んだわ。今夜は眞平。これからみんなで歌留多をして遊ぶの。用があつたら、またにして頂戴。』

私が再び二階へ來ると、お靜は座敷の隅の方の、座蒲團を二枚敷いた上に、脚を斜めに投げ出してゐた。白い細い襟足が長く抜け出て、疊の上に桃割が崩れてゐる。私はその傍に膝をついて、左の手にコップを持つて右の手で彼女の肩を抑へると、

『ようく似合ひます、お靜亭助！』と誰れか一人云つて、皆がどつと笑ひ立てた。

『馬鹿だなア』と私は皆の方を振り向いて笑つたが、

『さあ、しいちゃん、水。』と云つて肩を軽くゆすつた。

所が、どうした事かお靜は突臥したまゝ頭を激しく振つて、顔をあげようとしな。

『水を呑めば、少しはよくなるよ。さあ。』

けれどもお靜は頭を振るのみである。

『お酒に酔つたんだから、水を呑めばよくなるんだよ。ね、さあ、折角持つて來たんぢやないか。』

私は少し苛立つて、肩にかけた手を頸に廻して抱き起さうとすると、お靜は更に激しく身悶えするやうに頭をゆすつたが、同時にいきなり肘をあけてバツと空を拂つた。それにあたつて私の左の手のコップが疊の上に落ちた。

『何をするんだい！』

不意を喰つた私は驚いて叫んだ。一同の眼が一齊に私の方に集つた。所へ丁度五夜子が狭山と一緒に上つて來た。

『あら、しいちゃんがどうかしたの？』

『なに、酔拂つたんだよ。だから水を吞ましてやらうツて云ふのに、嫌やだつてコップをひつくり返すんだもの。——誰れか早く手拭かハンケチ。しやうが無い、そこらぢう水だらけだ。ほんとにしいちゃん、何を憤つてゐるんだい。』

すると五夜子は私の傍につか／＼と寄つて来て、さも何か秘密を囁くやうに肩に手をかけて耳に口をつけた。

『きつと御機嫌が斜めなのよ。さうツとしておいたらいゝわ。あんまり傍からチャホヤすると却つて附け上るものよ。』

それから彼女は袂から手布を出して、赤や黒と一緒になつて盥の水を拭いて了ふと、

『新季時直しでやりましょ。さあ白ちゃん、そんなに寝たつてゐないで札を集めてさ。すつかり御機嫌なのね。』さう云ひながら自分の座に着いた。

『へッ、御自分だつて。ねえ、狭山さん？』

と白は、腹這ひになつて頬杖をついてゐた身を起しかけたが、『まあそんなに立つてゐないで、お座り遊ばせ。そして一つ、お手並を拜見させて頂戴。』と狭山の方を向いてにたりと笑つた。

『こつちがお手並拜見だ。』と、先刻から懐手で立つたまゝ輕蔑したやうに一座を見廻してゐた狭

山は、さう云ひながら隅の方に腰をおろして、矢張り懐手のまゝ壁に凭れかゝつた。

『狭山さん、しいちゃんが脱けたんだから、這入つて呉れると恰度いゝのよ。』と讀手の赤が促した。

『おい、やれよ、狭山。』と川瀬も勧めた。

『まあ見させておいて貰はうよ。』と彼れは無愛相に答へた。

『なにツちやんでえ、おつう澄ますねえ。』と金時が聞えぬやうに呟くと、

『下手な奴は相手にしないんだとさ。』と小太郎が、これは聞えよがしに云つた。

『見てゐるくらゐなら、さつさと歸りやいゝのに』と五夜子が歌留多を並べながら忌々しさうに呟いた。

『そら／＼奥方の御機嫌を損じてよ。』と黒が。

『うつちやつておきやいゝわ。——さあさ、つむじまがりなんか相手にせず、此方は三人、向ふは四人でね、——四人だつてどうせ一人は酔拂ひなんだから……』

『何んだつて』と白が、『宜しい、酔拂ひの手並を見せてやる。』

『よくつて？ 讀んでよ。』

『ちよつと、もう二三分ばかり待つて。』

所が此時急に皆の頭上の電燈が二三度バチ／＼と瞬いたかと思ふとスーと光が暗くなつて行つた。

『おや。』

『あら。』

『あら／＼。』

と云つてゐる内にバツと消えた。皆がワツと囁し立てた。

『大變だ、大變だ、二階も消えたかえ。』と階下から母親が怒鳴つた。

『えゝ小母さん、眞暗よ。』と闇の中で黒の聲が怒鳴り返した。

『困つたね、何處もみんな消えたのかしら。』

『小母さん大丈夫よ、今直ぐ點くから。』と黒は電燈會社の代りに保證した。

所が實際は仲々點かなかつた。皆は眞黒な闇の中でしんと鳴りを鎮めて了つた。私は自分の直ぐ隣に席を占めてゐた五夜子を其の着物で感ずるばかりで、誰れが何處にどうしてゐるのだが皆自判らない。たゞ一面に黒い闇である。其内に、

『おい、しやうがないな、どうかしなくちや』と狭山らしい聲が聞えた。すると間もなく隣寸を擦るやうな音がして、バツと小さな赤黄色い光が散つたが、それを誰れかと直ぐワツと吹き消した。

『冗談するなよ。煙草を呑むんぢやないか。』とまた狭山らしい聲がした。

すると彼方此方でクス／＼と笑ひ出した。それから小さな憚るやうな喘きや、墨を擦れる微かな衣摺なまじりの音や、人の動く氣配がしたが、暫くするとまた息を殺したやうに森しんとして了つた。其内にまた隣寸を擦る音がして赤い光が閃いたが、直ぐまた誰れかに吹き消された。

『おい、よせつてば、ふざけるのは。』とまた狭山の少し尖つた聲がした。

けれどもこんどは忍び笑ひも何も起らないで、たゞ壓迫するやうな沈黙が続いた。

『……………』

……………

……………

……………



『やっつけろ！』と小太郎が叫んで狭山に躍りかゝつた。

所が此時また電燈がチラ／＼と瞬いたかと思ふと消えて了つた。それからどうなつたか私はハツキリとは憶えてゐない。私自身どうしたかと云ふ事さへ記憶は靡ろである。私はたゞ闇の中で毆つたり組み打つたりする物音や、女達の叫ぶ聲を聞いた。其聲の中で特に一つハツキリと私の耳を撃つたのはお静の聲である。

『幽霊が来るよ！ 幽霊が来るよ！』

私は「しまつた！」と思つた。まるで焼火箸で心臓を突き刺されたやうな感じであつた。

誰れとも判らぬ人の群に押されて私は轉けるやうに階段を降りた。それから下ヤ／＼と戶外へ押し出された。其時背後で、

『さあ、喧嘩なんかする奴は出て失せろ！ もう今日ツきり寄せつけないから！』と云ふ母親の烈しい叫び聲を聞いた。

月の無い晩で曇つてゐた上に、街燈が残らず消えてゐたので、往來は眞暗であつた。往來へ出たものの私はまるで自意識を失つた者のやうに茫然と突立つて、歩かうともしなかつた。其間たゞ二三人の闇を走つて行く足音に氣がついてゐただけであつた。

『おい、行かうよ。』

誰れかがさう云つて私の腕を掴んで引張つた。私は黙つて引摺られるやうに従つた。さうして二十歩ばかり歩いた時突然バツと往來が明るくなつた。街燈がついたのであつた。私は始めて自分の傍に小太郎と黒とがゐるのを知つた。併し他には誰れもゐなかつた。

『他の連中はどうしたい？』

『知らない。暗闇で誰れがどうしたか解るもんか。だが狭山はうんと毆つてやつた。これで胸がすいたぜ。野郎、今まで俺達を舐めてゐやがつたんだからな。金時は事によると狭山のあとを追ツかけたかも知れないぜ。』と小太郎が答へた。

私は五夜子の姿の見えないのが特に氣になつた。其邊にゐはしないかと思つて背後を振り向いて見た。所が往來には誰れ一人の影も見えないで、半丁程向ふに見える白梅堂の店先に意外にも奇怪な現象の動いてゐるのが眼に映つた。一人の女が髪を振り亂して、大きな掛軸のやうなものを一杯に擴けて手に持つて、帯がしどろに解けたまゝで頻りに荒れ狂つてゐるのを、一人の女と一人の男とが一所懸命取り鎮めようと焦つてゐる。狂つてゐる女は無論お静に違ひない。持つてゐる掛軸は前に自分のやつた幽霊の繪だと私は咄嗟の間に考へつた。留めようとする女の方は





母親に違ひないが、男の方は誰れだらう。脊のひよろ長い瘦せた男である。私は「しいちゃん、降りておいで、お客様がいらつしたから」と階下から呼んだ母親の言葉を思ひ出して、例の支那人だなど判断した。

『あ、到々また発作が——』

忽ち激しい動亂が私を襲つた。私は危く駆け出さうとした。が、其時急に思ひがけない冷い想念が私の頭を掠めた、

『いゝ氣味だ。これが俺の「復讐」なんだ、「復讐」なんだ。』

さうして私は踏み留まつた、一瞬の間、遠い夜の舞臺にお夏狂亂の人形芝居でも見るやうな氣持ちで、この奇怪な陰惨な光景を眺めた。黒も小太郎も「しいちゃん、どうしたんだらう」と云ひながら併し其儘眺めてゐた。

眺めてゐる内に、脊の高い男が到々お静を背後から抱き締めて、母親が足を持つて、奥へ連れ込んでしまつた。

『到々幕が下りたね。なに、また一寸ヒステリーを起したんだよ。』

私は小太郎を顧みて態とらしく無難作を装つて云つた。併し私の泣き出しさうな聲は私の冷か

な言葉を裏切つてゐたに違ひない。

『いゝ氣味だ。「復讐」なんだ、「復讐」なんだ。』

私は無理に心にさう繰り返し乍ら踵を返して歩き出した。併し心の底の方には別な考へがいらく動いてゐた、

『あの夜、公園の森の中で、五夜子などはもう決して構はない、お静だけを唯一人の友達にすると眞剣に誓つたぢやないか。それに今夜はどうだ？ あの晩のお前と今夜のお前とは別人なのか？

あの晩の誓ひは嘘で、今夜の方が眞實なのか？ 否！ それなら今夜が嘘で、あの晩が眞實なのか？ 否！ どつとも眞實だ！ どつちも眞實？ なぜ？ なぜ？……』

『えゝ！ これが「復讐」なんだ！ 「復讐」なんだ！』

私は胸の底のいらくする考へを心にさう叫んで無理に押しつけた。併し、どうして、何んの爲に、誰れのために、誰れに對しての復讐なんだ？——

意志の力ではどうする事も出来ぬやうに私の心は亂れに亂れた。「いゝ氣味だ、復讐なんだ」と云ふ觀念も最初は夏の朧夜を稻妻が掠めるやうに小氣味よく胸を横切つたが、直ぐ何んの力も權威も無くなつて、たゞ機械的に頭に繰り返されるだけであつた。悲哀、悔恨、失意、不満——そ

んなやうな様々な感情が取り留めもなく入り亂れて渦巻いてゐる。所が暫くすると左うした感情の困亂の中へ或る新しい強烈な感情が突然頭を擡げて來て暴君のやうに支配し始めた。夜、闇、五夜子の腕、胸、眼、唇、——さうした觀念に附隨した激しい甘い感情であつた。忽ち其の感情の潮に乗つて私の總べての心が留度無く流れ出した。意志も分別も他愛無く其の潮の浪に吞まれた。所が流れる所まで流れると心は忽ち大きな不満に突きあたつた——當の五夜子が側になるな

い——  
激しい甘い感情が、切ない自暴的な焦燥に變つて行つた。私は再びいら／＼した氣持で歩き續けた。さうしてゐる内にこんどは今迄全く思ひも寄らなかつた氣味の悪い併し深刻な想念が突如として襲ひ來つて私の心臓を氷のやうに凝固させた、——お前は親父の運命を繰り返してゐるんだ、暗い運命の鎖に知らずに縛られてゐるんだ、父と實母とお冬、自分とお靜と五夜子！ あ、何が「復讐」だ！ 陥れられてゐるんだ、運命に陥れられてゐるんだ！  
私の頭は狂はんばかりの困亂に陥つて了つた。

其夜私は家に歸らずに、家の附近を素通りして、黒と小太郎と連れ立つて淺草公園に行き、黒

と別れてから小太郎と二人で奥山の酒場でしたゝかに酒を呑んで、酔にまぎれて十二階下の暗い路次をさまよつた。そして全く何んの氣も無しに、外部の力で引き摺られるやうに或る一軒の薄暗い軒燈の下の格子戸を潜つて了つた。女が二人ゐた。一人が小太郎を連れて隣室に消えると、他の一人が私の頸に腕を廻して囁いて、ケラ／＼と不氣味な不自然な笑ひ聲を立てると、私を次の室へ導いた。闇の底に倒れた女の一對の眼を、五分ばかり閉め残した襖の隙を洩れて室内の闇を斜めに貫いた一條の黄色い光線の中に私は認めた。……

翌日の朝私は家に歸つた。無論小母さんには友達の家泊つて來たと云つておいた。それから二三日は、外へ出る氣にもなれないで、學校へも行かずに家に閉ぢ籠つてゐるが、其間に、お靜が氣が狂つたと云ふ噂は稽古に來るお弟子の口から小母さんへ、小母さんから私の耳に傳へられた。これは私を今更の如く苦しめたけれど私を驚かせはしなかつた。けれども尙一つの噂は私を非常に吃驚させた。五夜子が家出したと云ふ噂であつた。始めは嘘だらうと思つたが、其内に五夜子の家の店員が「どこか心當りは無いか」と宅へ尋ねて來たので、疑ひの無い事になつた。そ

れとなく其の店員に様子を訊いて見ると、例のあの晩から歸つて來ないらしい。狭山に誘拐され  
たんだ——私は直ぐさう思つた。この推定は、其後私が瓦町邊の遊び仲間、最近狭山がゐるな  
くなつたと云ふ事實をたしかめた時に、殆んど誤りのないものとなつた。

五夜子の家出！ お靜の發狂！ 一時に二つの打撃に遭遇した私の心は完全にうちひしがれ  
た。殊にお靜の發狂に就ては大半は私自身に責任があると思はぬわけには行かなかつたので、一  
層心を苦しめられた。と云つて、見舞ひに行つて會ふ氣にはどうしてもなれなかつた。白梅堂の  
前をそれとなく通つて見たり、お靜の友達に訊いて見たりして、間接に様子を窺ふだけであつた。  
彼女は發狂と共に餘病を出したのか、あれ以來床に就いて、時々發作を起して狂ひ出すが平生は  
寢てばかりゐると云ふ事や、狂ひ出すと女の力では到底取り鎮められないので親戚から男が一人  
常に泊りに來てゐると云ふ事や、母親が發狂の原因を例の幽霊の繪に歸してそれを破いて棄てた  
と云ふ事などを、私は間接に聞いてゐた。

内心の苦惱と、満たされぬ空虚とをごまかす爲に私は日に日に強烈な刺戟を求めなければなら  
なくなつた。私はひたすら酒と異性の抱擁とに走つた。さうして學課は全く手につかなくなり、  
金にも困る所から、到々學校を止めて了つて、晝は親戚の塗師屋へ通つて漆を塗つたり蒔繪の下

繪を描いたり、また時には自宅で他人の肖像を描いてやつたりして金をこしらへて、夜になると  
大名縮の着物に藍縮の羽織を引掛けて懐手をして色町に出かけると云ふ程、私の生活も姿も一二  
箇月の間に全く變つて行つた。遊び仲間は例の金時や、扇屋の悴の小太郎や、時には扇屋の子分  
などであつた。かうして十七の秋から十八の春にかけて悪夢のやうな數個月の時は流れた。其間  
人の口からお靜の消息は、少しく快くなつたとか悪くなつたとかまた狂ひ出したとか同じやうな  
事を度々聞いてゐるが、五夜子の消息は皆目わからなかつた。

### 五 「暗い過去」その三

所が十八の春まだ淺い三月の始め頃、あの事件から五箇月ばかり後の事であつたと思ふ、公園  
裏の或る暗い街で、家出した五夜子と、また例の狭山と、偶然同時に邂逅しようとは、いかに運  
命の惡戯とは云へ誰れか豫期し得たであらう。私は其日の夕べ、星の寒い奥山の宵闇の中をひと  
り懐手でブラ／＼歩いてゐると、金時と小太郎とに偶然出會つた。金時は紺の着物に烏打帽をか  
ぶつて、小太郎は角刈頭に木綿の横縮の着物を着てゐる。

「おい、亭ちゃん、一緒に行かう。」と金時がいきなり云つた。

「どいへ？」

「浦里新道つて、知つてるかい？ なんでもこの街のズツと奥なんださうだ。そこに、此頃英語を話す女がゐるんだとよ。行つて見ようぢやないか。」

小太郎は傍でニヤ／＼笑つてゐる。ともかく三人連れで歩き出した。金時は彼方此方の窓格子に寄つて愛嬌を振り蒔いては吸附煙草の振舞に與りながら酔漢のやうに歩いて行く。三人はゴタ／＼と小さな格子と軒燈のたてこんだ細い路次を幾つも幾つも抜けて、漸く普通の廣い往來へ出た。出るとその往來の片隅に人だかりがしてゐる。後ろから脊伸びをして覗いて見ると、書生とも職人ともつかぬ風體の三人の男が、中折のソフトを被つて二重廻しを着て、夜店で買ったと見える植木鉢を片手に抱へた一人の若い男を圍んで頻りに啖呵を切つてゐる。

「悪い奴等だな。飛び込んで喧嘩を買つてやらうぢやねえか？」と金時が私と小太郎とを顧みると、小太郎が首を横に振つた。

「よせ／＼。あの脊の高い男は今戸の政の子分だ。今戸とは今俺の親父が少しゴタ／＼してゐるんだから、こんな事に係り合つて事を大きくしちやつまらない。なアに、見物人が澤山ゐらア、

彼奴等に滅多な事はさせるもんか。」

所が私は其の三人の内の脊の低い書生風の男の横顔に不圖眼をつけると突然叫んだ。

「おい、狭山がゐるぜー」

「なに、狭山！」と金時と小太郎とが同時に眼を聳てた。

其時丁度脊の高い男が一聲何やら叫ぶといきなり若い男の横髪を殴りつけた。ソフトが飛んで金縁の眼鏡が落ちた。すると見物の中から一人飛び出して留めにかゝつたが、脊の高い男は忽ちその留め男の眉間を殴りつけた。其暇に狭山とモ一人の男とが若い男に躍りかゝつて、手に持つた植木鉢を叩き落とすと、組附いて、直ぐ後ろの溝の中に突き落した。忽ち脊の高い男が下駄を振り上げて、溝に落ちた男を殴りにかゝつた。

「やツつけろー」

「助けてやれー」

群集の中から忽ち叫び聲が起ると七八人が飛び出して三人に打ちかゝつた。喧嘩早い金時はモウ其の仲間に這入つて、下駄を手に持つてゐた。

「いいつら、叩き殺すぞー」

脊の高い男は振り返ると素早く懐中から双物を取り出して、キラ／＼振り廻し乍ら群集に向つて来た。群集はどやどやと後退りして道を開いた。その道を突切つて脊の高い男を眞先きに三人が闇の中を一散に駆け出した。

『つかまへろ！　つかまへろ！』

群集は絶叫して三人のあとを追つた。金時も群集と一緒に駆け出したが、小太郎と私とが『金時！　金時！』と大声で呼んだので踏み留まつて歸つて来た。

『よせよ。つまらない安喧嘩はするなよ。どうせ彼奴等は今に東にしておいてやつつけてやるんだから。さあ行かうぢやないか、アイ・ラヴ・ユウつて所へな。』と小太郎が云つた。

残つた群集の四五人は、溝に突き落された男を助け起して、いたはりながら何處かへ連れて行つた。

私は終りまで傍觀者の態度で、懐中に入れた兩手を出さなかつた。併し始終激しい昂奮が私の全身の血を震はしてゐた。『畜生、弱い者を虐めやがつて！　おまけに三人もかゝつて何んだ！　うぬ、どうするか見ろ！』けれども私の心臓とは反對に私の頭は冷かに動いてゐた。『飛び込んで喧嘩をする、こつちも怪我をする、へまをやると巡査にでも捕らる、ふん、つまらない。そんな

役目は他に澤山勤めて呉れる奴がゐらア。いつたい俺はそんな役目をやる爲の人間ぢやないんだ。』さうして冷い頭が頻りに躍る心臓を抑へつけて私は到々最後まで懐ろ手を離さなかつた。

私達はまたブラ／＼素見しながら歩き出した。廣い往來を更に狭い路次に折れて、左右の格子越しに鼠啼きや憚るやうな低い呼び聲を聞きながら人込の中を潜つて行つた。三人の間には自然狭山の事が話題に登つた。此頃何處にゐるんだらう。今戸の政の子分にでもなつたのかしら、所でほんとうに五夜公を連れ出したのかな、すると今は五夜公と一緒にゐるのかも知れないぞ、へッ、うまくやつてやがら——そんな事を取り留めも無く話し合つた。私は不圖「英語を話す女」と云ふのが事によると五夜子ではないかと考へついた。そして五夜子と狭山とを一緒に並べて思ひ浮べた時、今更のやうに不快な氣がした。而も私のこの豫想は偶然的つたのである。

『おい、これから浦里新道だぜ。』と金時が或る横丁の角に立ち留ると、注意した。

『金時、どこか家を知つてるのかい？　知らない？　ぢや一軒々々覗いて見るのか。』と小太郎が笑つた。

この横丁は他に較べて廣い上に相當に構への大きな家ばかりが積んでゐる爲か、それに少しは場所の中心を外れてゐる爲か、餘り人通りは無かつた。

實は私はモウ皆と別れて一人で歸りたくなつてゐた。何んだか重々しい苛々するものが胸の中に一杯になつて歩き續ける勇氣も無くなつてゐたのだ。併し「英語を話す女」に會つて見たくないでもないの、二人のあとに従つて澁々ながら歩みを運んだ。二人は横丁の左側に寄り添うて家毎に顔の眞白な女と格子越しの冗談口を叩き合ひ乍ら歩いて行つたが、その横丁の半ば頃まで來た時、道の反對の右側の方に、

『ゼントルマン、ハヴ・ユウ・ア・シガレット?』と云ふ美しい聲を微かに聞いた。

『おや、向ふ側にゐるんだぜ。』と金時と小太郎とが聲のした方を振り向いた。振り向くと、インベネスの男が一人窓格子の前に立つてゐるが、直ぐ其男が前へ歩き出したので、二人は軒燈の下の格子の間に浮く白い顔の方へ道を横切つて行つた。私は依然黙つて二人のあとに従つた。

『おやー』と前の二人が一緒に聲を立てた。同時に女の方にも『あらー』と云ふ叫びが起つた。それでヒョイと女の顔を見た私は、既に豫感があつたとは云へ流石にハツと思つて一瞬の間呼吸を留めた。

『五夜ちゃんぢやないか。』と小太郎が云つた。

『まあ、久しぶりね。』と女は無表情に答へた。そしてそれぎり眼を臥せて黙つて了つた。

『五夜ちゃん、いつたい、どうしたんだい?』

併し彼女は答へないで依然俯いてゐた。私達も黙つてたゞ彼女の顔を視詰めた。が、暫くすると彼女は思ひ出したやうに顔を上げて、口元に不自然な歪んだやうな微笑を浮べた。

『上つていかない?』

さう云つてから彼女は突然無理に押し出したやうな瘤高ひ笑聲を立てた。私は何んとも知らず慄然とした。一種悲惨な氣がした。

すると五夜子の背後から新しい二つの白い顔が覗いた。

『アラ、私のラヴさん、可愛い人、上つてらっしゃいよ。待つてたんだわ。ね、いぢやないの。』

『上つてらっしゃい。何んだつてそんなに突立つてばかりゐるの。鐵の棒でも呑み込んだの。ホ、御免遊ばせ。』

『おい、どうしよう?』と金時が小太郎の顔を見た。

所が私はどうした事か何んとも云はずに二人を押しつけて無雜作に格子をあけて了つた。それで二人もあとに従つて、三人は女の一人の案内で上端の薄暗い階段を二階へ上つて、六疊の部屋に通つた。桃色の絹笠で蔽はれた十燭の電燈の下に卓が一つ、それを取り巻いて男三人と女三人

とが入り交つて座つた。私は五夜子の顔を見た。黒い半襟のかもつた焦茶色の荒い縞の安つほい着物に、これは新御召か何んかの藍色の矢張り荒い縞の羽織をひきかけて、髷をつめて毛を頭の上に盛り上げて女優鬘に結つた姿は、非常に仇つほい美しさを見せたが、顔は（ひとつは薄暗い電燈の光に映つた爲でもあらうが）ひどく疲れた色に見えた。細い長い眉と、大きな眼と、左の眼の下の頬の上の黒子とに變りは無いが、眼はやゝ落ちくほんで、どんと光り、薔薇色だつた頬は蒼白く、其上幾分か肉が落ちて、紅を濃くつけて色を添へた口唇は生氣の無い傷しい不自然な美しさを見せてゐた。私は五箇月前のお静の言葉を思ひ出した——『五夜ちゃんはお腹が大きいよ。』この言葉と五夜子のこの肉體の變化とを結びつけて考へた時、いろ／＼な疑問に捉へられた。けれども此の疑問を今直ぐ彼女に尋ねる氣にはなれなかつた。

『いつたい、どうしたのさ、五夜ちゃん。』とこんどは小太郎が訊いた。併し彼女はまるで聞えぬもののやうに答へないで、別な事を云つた。

『みんなすつかり粹になつちやつたのね？』

『へん、お互ひさまにね』と金時が應じたが、『それはさうと狭山は度々こゝへ来るのかい？』

『狭山？』と五夜子は執方つかずに答へて『なぜ？』と訊き返した。

『おい、酒を呑まうよ』と私が突然云ひ出した。

それで二人の女が五夜子だけを残して支度をしに階段を降りて行つた。

『なんて空慌けて、ちよい／＼来るんだらう？ 五夜子姐さんの間夫なんだからな。』

『何んだねえ金ちゃん、誰れが狭山なんかを。自分だけは間夫氣取でゐるか知れないけど——』

『へん、なにツちやんでえ、手に手をとつてさ、かうおじやい、あいなあ、とやつたくせに——』

『うまいぞ、金時、どこでそんな事を憶えて來た。』と小太郎が横から口を入れた。

『何しろ俺はちやんと現場を突き留めたんだからな。』

『まるで強請に來たやうね。』

『さうだとも。忘れもしねえ去年の九月、闇に大路も藏前の、だ——』

女が銚子を二本と膳を一つ持つて上つて來て、猪口や皿を卓の上に並べた。

『所で五夜ちゃん』と急に金時が調子を改めた、『實は今夜こゝへ來る途中で狭山に遭つたんだよ。』

五夜子がどんな態度で答へるかと思つて私はちよつと興味を惹かれた。けれども彼女は態と装つてゐるのかどうか、極めて無關心であつた。

『やう、どうで？』

『二丁目の通りの角で。』

『今戸の政——知つてるだらう——その子分と三人連れで通りがよりの若い男に喧嘩を賣つてゐた所を俺達が見つけたんだよ。』と小太郎が補つた。

『五夜ちゃんの前だけど、俺アほんとに癪に障つたぜ、三人して、たつた一人の、而もそれが同じ仲間のゴロかなんかならまだしも、全く堅氣の若旦那風のお坊ちゃんをつかまへてさ、殴つたり溝へ叩き込んだりするなんて、きつと金でもあてにしたに違ひないんだ。』

『そんな亂暴をしたの。みんなも意氣地が無いぢやないの、そんな所を見てゐて黙つてゐるなんて、飛び込んで行つて、ひつしよびいてやらアよかつたに——』と五夜子はさも忌々しげに云つた。私は意外な氣がした。あとの二人も妙な顔をして一寸五夜子の顔を見た。

『おい、五夜子姐さんに遠慮したんだぜ。——いや實際俺の事だもの、すんでに下駄を搦んで飛び出したんだよ。所が小太ちやんがね、こゝにゐる小太兄イがね、今夜ばかりは嫌やに兄イぶつちやつて、よせ、端下喧嘩なんか、やつつける時が来りや束にしてやつつける、今夜は見逸してやれ』と来たもんだ、へん！ だ。金時はそろ／＼酔が廻つて来た。

『小太ちやんがさう云つたの？ 豪いわ、素敵だわ、口だけでも素敵だわ、やつぱり金ちやんより小太ちやんの方が一枚上だわよ、流石は扇屋の若親分だけあつてね。それで亨ちやんはどうしてたの、其時？』

『俺かい？ 俺は懐手をして黙つて見てゐた——』

『金ちやんが飛び出したのに？』

『俺も飛び出したくない事はなかつただけど、喧嘩すりや此方も怪我をする、つまらない、いつたい俺はそんな役目をする爲に生れて来たンぢやない、そんな役目をする奴は他に澤山あらア、と思つてね。』

『豪いわ、豪いわ。』五夜子も大分酔が廻つて来た。蒼白い頬が上氣して蔷薇色に輝き出した。『小太ちやんよりまた豪いわ。』そんな役目をする奴は他に澤山あらア——素敵だわ、その文句に惚れたわ。今夜の月桂冠はどうしても亨ちやんよ。あたし今夜は亨ちやんのもの、ね、いよでしよ、小太ちやんも、金ちやんも？』

五夜子はファイと立ち上つて寄つて来て、私の膝に自分の片膝を載せて腕を私の頸に廻した。

『アイム、ユアス、ツナイト！ ほよよ 巧いでしよ、まだ忘れないのよ。』



「なにツちやんでえ、自分で月桂冠だつて自惚れてらア。そんな月桂冠は此方から願ひさげだ。憚ながら俺にはこゝに斯う云ふ可愛い人がゐるんだからな」と金時は傍の女の肩に腕をかけて顔を覗き込んだ。「なーあ、おい。」

「ねーえ、あなた。」

「おや、御馳走さま。いゝわ、あたいは此の人なんだから」と、モ一人の女が小太郎の膝に凭れ掛つた。「あての殿御は十三七つ、寄せて二十の花盛り、ねーえ、あなた？」

甘つたるい笑聲が一度に起つた。併し其間或る思ひ懸けない想念に支配されてゐた私は、私の胸に頭をもたせて面白さうに笑つてゐる五夜子を抱いたまゝ、微笑もせず虚空を視詰めてゐた。笑聲の止んだ時五夜子が急に思ひ出したやうに顔をあげた。

「そりやさうと、しいちやんどうしてるの？」

依然として或る想念の支配から脱し切れぬ私は他人の事のやうに興味を惹かれずに答へた、

「しいちやん？ しいちやんはね、あの晩から——」

「あの晩——て？」

「去年の九月の、あの最後の晩さ。」

「えゝあの晩から？」

「あの晩から、気が狂つてしまつたの。」

「気が狂つて！」

五夜子は大きな眸を据ゑてひたと私の眼に視入つた。私の眼から何か特別の意味でも探らうとするかのやうであつた。彼女の聲は痾走つて大きかつた上に言葉の意味が意味であるから、皆の注意が一齊に私達の上に向いた。併し、なほ執拗な想念の虜になつてゐた私は、視入る彼女の眼をたゞ黙つて視詰め返した。その私の視線がだん／＼鋭くなつて行つた時、必然の力で押し出されるやうに私は頭の想念をぶつりと口に云ひ切つた、

「五夜ちやん、ほんたうに狭山をやつつけてもいゝかい？ 俺が！」

五夜子は上半身を私の膝の上に斜に崩して腕を私の頸に廻してゐたので、私の直ぐ眼の下の胸の所に上氣した薔薇色の頬があつた。殆んど鼻と鼻とつかえる程の距離で私は彼女の熱に潤んだ融けるやうな眼を鋭く視詰めた。其の眼から答へを讀まなければおかぬやうに視詰めた。同じやうに彼女も私の眼を視詰めた。互ひの眼が一點に凝つて、一分間ばかり息詰るやうな緊張した沈黙が続いた後に、五夜子はきつぱりと云ひ切つた、

『私が貴方なら、夙にやつつけてゐてよ!』

『おゝ怖い!』と一人の女が態とらしく仰山に手を拍つた。『狭山さんに云つけてあけるよ。』

『えゝ云つけて頂戴。何んだい、あんな奴。いゝ加減に愛想でもつかして呉れりや、ほんとに助かるのに、執念深い蛇つたらありやしない!』

『おゝ怖い、おゝ怖い。』

も一人の女がさう云ひながら空の爛徳利を持つて立ち上がった。

『ぢや、なぜ狭山と——』私が依然として彼女の眠を視据ゑながら云ひかけると、

『嫌や、嫌や』と彼女は甘えるやうに首を振つた。『そんなこと今訊いちや嫌や。あとで、あとで、ね。今はたゞ呑んで、歌つて、面白く遊ぶの。』

所が其時徳利を持つて立ち上つた女が襖をあけると同時に突然狼狽した叫びを立てた、

『あれ! 狭山さん!』

同時に、酔つた男の聲が響いた、

『騒々しい、氣をつけろ!』

聲と一緒に平手で女の頬を殴る音がしたかと思ふと、實際狭山が這入つて來たのである。無論

一同の視線が反射的に彼れに向けられたが、誰れも口を開く暇も與へさせぬやうに五夜子が威丈高な語調で、併し私の膝に崩した姿は直さないで、

『何しに來たの? いったい誰れに斷つて這入つて來たのさ?』

『少し話したい事があるんだ。ちよつと階下まで顔を貸してくんな。』と狭山は蒼い顔をして立つたまゝ答へた。眼附きや言葉付きは十分酒氣を帯びてゐた。彼れの羽織の右の袖口が五寸ばかり裂けてゐるのに私は氣がついた。

『話があるなら明日あしたにしておくれ。間夫面まぶづらして這入つて來たつて、お生憎様、こちらは手が塞がつてゐるんだからね。』

『なんだつて!』

『おや、おや、おほゝゝ、好い顔だこと。序でに泣いて見せて御覽。そんな、閻魔が蜂に刺されたやうな顔をしたつて、ちつとも怖くないんだよ。あたしやお前さんの持物ぢやないんだからね。勤めてゐりや賣物買物だよ。今夜は此人のものなんだから、此人がウンと云はなきや、あたしやお前さんなんか指一本だつて觸さわられやしないんだからね。妾しに用があるんなら、また來月でも來々月きんぎでも出直して、お金をたんまり懐中かぶつに入れて、表口から上つておいで。恰度お茶で



今から考へて見れば五夜子の此の最後の悪罵は、彼女と狭山との關係及び彼女の狭山に對する心持を卒直に表白するもので、従つて、彼女が狭山に啖呵を切つてゐる間私の却つて反對に感じてる二人に對する猜疑と嫉妬とを打ち消すに充分なのであるが、さうした場合頭の冷靜に働き得なかつた私は、狭山が姿を消すと直ぐ膝の上の五夜子を亂暴に押しつけて立ち上がった。

『どこへ行くの？』

『歸るんだよ。馬鹿々々しい。なんほ俺がお目出度いからつてお芝居で欺されはしないからな。人の前ぢや大きに愛想づかしを云つておいて、蔭ぢや二人で舌を出すなんて、古い手だぜ、五夜ちゃん。』

『何を云ふの！』

彼女は鋭い語氣で叫んで、それから黙つて私の顔を視詰めた。手には私の羽織の裾が握られてゐた。視詰めた彼女の眼に、意外にも突き詰めたやうな氣持を發見した私は、其の瞬間それに撃たれてハツと思つた。そしてあとは何んの言葉も出ずに同じやうに私もまた彼女の顔を黙つて視詰め返した。一分、二分、三分——其儘極度に張り詰めた沈黙と凝視とが続いた。彼女の口は痙攣するやうに震へた。何か物が言ひたいのを、堰き上げて來る様々な激しい感情と頭の混亂とが

それを妨げてゐるに違ひなかつた。私も物を云はうとした。併し彼女の凝視は壓迫するやうに私の舌を抑へた。斯うして三四分経つた時、五夜子の張り切つた眼に急に涙が溢れて來たかと思ふと、何かに壓しひしがれたやうに突然前につつぶして、胸に溜つた有らゆるものを吐き出すやうに激しく泣き出した。同時に私も急に恐ろしい緊張から解放されてぐつたりと崩れるやうに腰をおろした。そして彼女のびく／＼震へる肩を茫然と眺めた。暫くすると彼女の口から杜絶れ／＼に斯う云ふ言葉の押し出されるのを私は微かに聞きつけた、

『證據を見せて上げるわ。證據を見せて上げるわ。』

今にして思へば此の言葉は怖ろしい決定的な言葉であつたのだ。併し其場合殆んど頭の働きを失つてゐた私は、この言葉を何んの意味をも考へずにたゞほんやりと聞いただけであつた。

翌朝眼が醒めた時、あらゆるものが何もかも皆眞暗だつた。私の胸は何んとも知らぬ不安で一杯に塞がつた。昨夜途中での出來事、此家での事件、寢てからの五夜子の物語、現在陥つた自分の地位——さうした事が一度に記憶に展開されて來ると、自分はまるで悪鬼に取り卷かれて地獄の底にゐるやうな氣がした。もうどうにもならぬと云ふ絶望感が私を襲つた時、私は自ら身を翻

して地獄の底の底に強烈な悦樂を求めようとした。求むる所のものは忽ち私の眼前に展開した、酒、五夜子、五夜子の白い肉體。私はそこに私の新しい生命を見出す事を願つた。併し忽ち狭山の黒い影は私と五夜子とを遮つた。私の新しい生命を確實にする爲には此の黒い影の片をつけなければならなかつた。五夜子を妊娠させ、金を捲き上げ、其上連れ出して胎兒を闇から闇へ葬らせてから無理に身を沈めさせ、自分は博徒の仲間に入つて始終五夜子に金を強請りに來る狭山——これは其夜彼女が私に語つた所である、——さうして今更親の家へも歸られず、執念く附け纏ふ狭山の手を逃れる事も出來ず、自暴自棄の餘り自ら荒んだ生活の深みへ陥つて行く五夜子。この五夜子を救ふにしろ、五夜子と共に地獄の底に沈み切るにしろ、自分にとつて狭山は黒い魔でなければならぬ。狭山に對する烈しい憎惡が急に胸に込みあげて來ると共に、突如として私の頭に或る怖ろしい空想が閃いた。私は其の空想を凝然と視詰めた。頭に熱い血が一時に上つて來た。空想が發展した。私は暗い濕々とした監房に此の世の光から遮られて十年二十年を送らねばならぬ自身、或は悄然と絞首臺上に登つて行く私自身を發見した。頭の血はまた冷くなつて行つた。——『何を考へてゐるの、天井を睨んで。もう起きない？ お午近くよ、きつと。』と五夜子が箱枕の上の頭を私の方に扭ぢ向けて云つた。

皆が起きたのは既に十一時頃であつた。今考へると其時直ぐ歸れば何の事は無かつたらうに、五夜子や他の女達が、晝間はどうせ暇なんだからモウ少し遊んで行けと引き留めたので、皆は一緒に集つて花を引き始めた。それから二時頃になつて午飯に酒を呑み出したので、到々夕方まで遊んで、家を出たのは短い陽脚のとつぷりと暮れた頃であつた。所が家を出て一丁程行くと背後から呼び留めた者がある。振り向くと狭山とモ一人昨夜の背の高い男とが早足で近づいて來た。私はハツと思つて小太郎と金時の顔を見て、『今夜はよさうぜ』と小聲で早口に云つた。が、もう直ぐ狭山は私達の側に來てゐた。奴等、張つてゐやがつたんだ！ と私は直ぐ感づくと同時に、もう退引ならぬ場合だと思つた。併し、向ふで支度をして待つてゐた以上、覺悟も用意も無い此方はどんな事をしてでも不利を招くに違ひないと咄嗟の間に考へた私は、逃げられるだけ逃げようと腹を決めた。實はこんな事がありはしないかと云ふ豫感は朝から胸を往來してゐたので、なるたけ日のある内に引き上げようと二人を急ぎ立てはしたのだが、暢氣な二人が一向無頓着でだらだらと呑み續けたので、うま／＼に落ちたのである。近づいた狭山とモ一人は殺氣を帯びた蒼白な顔をしてゐた。

『一寸用があるから、そこまで一緒に來て呉れ。』と狭山が云つた。

斯う云ふ仲間が斯うした言葉を使へば、何んの行き懸りも無い尋常の場合でも必ず強請或は喧嘩を意味する。従つて、云はれた方は自分の面を棄てぬ限り『よし、行つてやらう』と答へなければならぬ。

『何處へでも行かう。』と金時が同じく顔に殺氣を見せて答へた。

けれども行けば、みすく袋の中に陥入るのだ。

『よせく用があるならこゝでも云へるだらう。何んの用だか云つて貰はうぢやないか。』と私が金時の言葉を遮つた。

所が其時小太郎が何んと思つたか、『ちよつと待つてゐて呉れ、煙草が無くなつたから』と云つて、直ぐ二三軒先きの、横丁の曲り角にある煙草屋の店に飛び込んだ。それから直ぐ煙草を銜へてマツチを擦りながら歸つて來たが、歸つて來ると私に眼配せをしてから、狭山に向つて鷹揚に云つた、

『さあ、行かう。どくだい、行田裏か？』

『まあ、そんな所だらう。』

小太郎の眼配せで彼れに何か成算のある事を知つたので私はともかく黙つて彼れに従つた。敵

味方五人は互ひに凄まじい沈黙に閉ぢ籠つて、全身の力を注意に集めて各々自身を警戒しながら歩を運んだ。小太郎は再び私と金時とに眼で知らせて、態とゆつくり歩くやうにさせた。これはあとで判つた事であるが、小太郎が飛び込んだ煙草屋は扇屋の子分の店で、其處で彼れは相手が今戸の政の子分である事を告げ、直ぐ人を十人許り集めて行田裏に驅けつけるやうに云ひつけたのであつた。其邊で喧嘩の場所と云へば行田裏の廣場よりほかには無い事を彼れは知つてゐた。

五人が廣場へ足を踏み入れるや否や、脊の高い男が『やーい！』と怒鳴つた。忽ち黒い影が十五六人ばかりどやどやと出て來て、ぐるりと私達を取り捲いて了つた。闇によくは判らぬが皆手に棒のやうな獲物を持つてゐた。かう云ふ場合矢張り一番馴れてゐるのは小太郎であつた。

『金時、しつかりしろ！ 直ぐ扇屋の子分が残らず驅けつけるぞ！』と大聲に叫んだ。

私は折よく足許に杭の折れらしい棒切れを踏みつけたので、素早くそれを拾ひ取つた。金時と小太郎とは下駄を兩手に掴んでやには正面の男に躍りかゝつた。鈍い併し物凄い打撃の響と共に、黒い影が右往左往に動き出した。と思ふと忽ち『享助！』と云ふ鋭い聲が耳を掠めて、私が『狭山だな』と思ふ瞬間キラリと闇を白い光が切つた。同時に私は杭で相手の腕を拂つたので、

は横に外れたが、私が第二に振り上げて力一杯振り下した棒は空しく空を切った。忽ち第二の刃が閃いた。私の右肩を掠めて袖を裂いて過ぎた。其時私の棒はしたゝかに相手の胴を撲つたが、同時に私は背ろの肩に突然激しい打撃を受けて、前によるめて危く踏み留まつた所を、第三の刃が直ぐ眼の前に光つた。『やられた！』と思つた。私は死物狂ひで棒を滅多打ちに振りおろした。二三度激しい手應へがあつた。其時であつた、俄かにワツと云ふ多勢の人聲と共に、

『小太ちゃん、援けに來たぞ！ 今戸の奴等のめしちめへ！』と口々に叫ぶ聲を私は聞きつけた。私はホツとした。と、急に眼が眩んで倒れさうになつたが、辛くも身を支へて、闇の中を一散に駆け出した。駆け出すと忽ち左の眼が見えなくなつた。ふと手を上げて眼を抑へると、生温いヌラ／＼したものを掌一面に感じた。『あ！』と思つた。私は更めて血と傷とを意識した。同時に激しい戦慄が爪先まで走つて、再び昏倒しようとした。併しまた辛うじて生氣を取り返して、左の颞顳のあたりをしつかりと片手で抑へて、人に見咎められぬやうに頭から羽織をスツボリ被つて小走りに走つて行つた。血は留度なく流れ出て、抑へた手を傳はつてほとり／＼と滴つた。それを着物の袖で拭きながら嫖客の人込の中を潜り抜けた。

ウヤラヤラ 行田裏から五夜子のゐる浦里新道の叶屋まではかれこれ廿丁ばかりは隔つてゐた。その半ば頃

まで來たと思つた時、五六人の巡查の一隊が人込を押し分けて走つて行くのと摺れ違つた。其の前後には群集が一緒になつて走つてゐた。群集の中から『喧嘩だ、喧嘩だ、行田裏だ』と叫ぶ聲々を聞きつけた。私は片側の家の軒下に身を寄せて辛うじて彼等を遣り過してからまた走り續けた。それからどうして叶屋まで辿り着いたかは殆んど記憶してゐない。たゞ叶屋の格子を押しあけて、轉けるやうに玄關へ飛び込むや否や『五夜ちゃん！』と叫んだ事を憶えてゐる。そして其瞬間、電燈に照らし出された私自身の姿がふと眼に入つた。私は左の手頸から腕にかけて、また肩から胸にかけて眞赤な生々しい血で染まつてゐた。それが眼に入ると同時に急に頭がぐら／＼として、其儘全身が崩れた。それ限り私は何も知らない。

今から考へて見ると何もかも人の生の暗い底を流れる見えぬ運命の奔流に押し流されたと思へない。その前日の夕べ、公園の奥山で金時と小太郎とに出會つたと云ふ一つの偶然を因として、因は果を生み、果はまた因となつて、私は到々血塗るな姿で叶屋の玄關に轉け込んで昏倒するまで運命の手に引き摺られて來たのだ。けれども私は何故叶屋へ再び歸つて來たのだらう？ 傷の手當をするなら何故どこか最寄りの醫者の家にも飛び込まなかつたのだらう？ 私が斯うして叶屋へ、五夜子の住む家へ、手負ひの身で轉け込んだと云ふ事は、つひに最後の怖ろしいカ

タストロフイを生む動因とならうとは、どうして其時豫期し得たであらう。

意識を呼び戻されると同時に私は脊のあたりに激しい疼痛を感じた。それと共に石炭酸の臭ひが強烈に鼻を刺戟した。第一に眼に入つたものは直ぐ側に座つてゐる五夜子の姿であつた。それから白い事務服を着た八字鬚の色の黄色い四十前後の男が枕元に座つてゐるのに氣がついた。室の入口の襖の近くには二三人の女が立つたり膝をついたりして、および腰で私の方を窺つてゐた。白服の男の傍にはガーゼや繻帯や金盥などが亂雑においてあつた。私は叶屋の階下の奥座敷に寢かされてゐたのだ。意識を戻して五夜子の姿を眼に入れるや否や私は突然跳び起きようとした。それを白い服の男が慌てゝ抑へつけた。五夜子までが一緒になつて抑へつけた。

「寢てゐなくちやいけない！ 寢てゐなくちやいけない！」と白服は早口に云つた。

「狭山と今戸の奴等が俺達を張つてゐるやがつたんだ。行田裏だ、行田裏だ。畜生、狭山の奴、俺だけは殺さうとしやがつたんだ。五夜ちゃん。残念だ！ 畜生、覚えてゐるやがれ。扇屋の子分が駆けつけたから小太と金時は大丈夫だ。だが、俺は、俺は、残念だ！」

襲つて来る昂奮に任せて私は急ぎ込んで杜切れ／＼に取りとめのない事を喋つた。五夜子は眞蒼な顔をして私を視詰めてゐたが、私の言葉が切れると急に口唇を震はして何か云はうとした。

すると白服の男が慌てゝそれを遮つた。

「靜かにしてゐなくちやいけない。頭の傷は浅いから大丈夫だ。却つて脊の打傷の方が酷いくらゐるだから、心配する事はない。出血が多かつたのは、酒を呑んでゐた所爲だよ。さあ、この藥を呑んで少し氣を落着けるんだ、ね。」

彼れは四角い紙に載せた白い散藥を私の口の傍に持つて來た。同時に五夜子が水の入つた茶碗を差し出した。私は藥と水とを呑んだ。それから黙つて五夜子の顔を視詰めた。何事かを云はうとして私の口は苛つて痙攣した。併し頭の觀念を言葉に現すには餘りにそれは錯雜し混亂し激動してゐた。五夜子が黙つて私を視詰めてゐたのもまた之と同じ様な理由からであつたらう。其内に間も無く私は藥の所爲か深い眠に落ちて了つた。

眠に落ちてから何時間経つたか判らないが、夢か現の中か『狭山』といふ聲を聞きつけてびくりとして眼を醒ました。私は怯えた眼をキヨロ／＼させて四邊を見廻した。五夜子も白い服の男も他の女達も見えなかつた。相變らず肩から脊にかけてツキ／＼と烈しく痛んだ。が、幾重にも繻帯された頭の傷は痺れたやうな感じただけで痛みは無かつた。ふとまた『狭山』と云ふ聲が微かに耳を打つた。夢では無い、唐紙を隔てた隣座敷からの聲である。而もそれが五夜子の聲らしく



聞えたので、私は磁石で吸ひつけられたやうに兩の耳を引立てた。

『狭山さん、宅だつて困るよ、今日貴方に泊られて踏込まれでもしちや。』慄へを帯びたおどくした聲である。低いけれどもたしかに五夜子の聲である。

『さう云はねえで、助けて呉れ、今更そんな薄情の云はれた義理でも無からう。この通り身體中撲り傷で動けねえんだから……』と確かに狭山の聲である。

『何んだねえ、それつばかし、たかが棒切れで撲られた位ぢやないか。』

『たかが所か、亨助の奴、うんと撲りやがつて。畜生、も少しで叩ツ殺してやる所だつたんだが、忌々しい、扇屋の奴等が押し寄せやがつたんで、到々逃がしちやつた。今に見ろ、こんど見つけたら最後、生かしちやおかねえから。お前もさうだぞ、これからあんな野郎と冗談にもふざけた眞似はさせねえぞ。』

私は彈機ではじかれたやうに牀の上に起き返つた。けれども同時に忽ち激しい疼痛に襲はれて、のけぞるやうに再び仰向けに倒れた。そしてたゞ狂氣のやうに眼と耳とを聳てた。

『静かにおしよ。そりや何も嫌で泊めない譯ぢやないけど、第一貴方からだか危いもの。始終こゝへ來ると云ふ事は警察の方に判つてゐない筈はないんだから、喧嘩の下手人だと云つて手を

廻されでもしたらどうするの？ そんな事にでもなれば、宅だつて客商賣だから、私がこゝの主人に申譯がないぢやないか。』

『と云つて今夜ほかに行く所は無え。其時は其時だ。ともかく今夜は泊つて行くぜ。』圖太い壓しつけるやうな聲である。

『だつて、それぢや困るつてば……』

『困るとは何んだい。困るのはお互ひだ。』

『静かに！』

それで話し聲が聞えなくなつた。併し聞えぬやうな聲でなほも話しつけてゐるやうにも思へたので、私は渾身の力を耳に籠めて聴き出さうと焦つた。が、徒勞であつた。其内に暫くの間をおいて突然高い聲が私の耳を撃つた。

『うむ、わかつた、亨助がゐるんだな！』

私はぎくりとして衝動的に半身を起した。併しまた直ぐ私は微かな呻きと共に仰向けにのけぞつた。

『そ、そんな事が。だ、だれが亨さんなんかを！』狼狽したやうな五夜子の聲が微かに聞えた。

『うそをつけ！ 恰度いよ、畜生、ひきずり出して——』

『あ、あぶない、そ、そんなものを抜いて！』

疊を摺つて争ふやうな物音が聞えて来た。私はのけぞつたまゝ齒を喰ひしばつてブル／＼と四肢を震はせた。

『狭山さん！ およし、およしつてば！ 誰れが亨さんなんかを。お隣りは、今夜ふりのお客なんだよ。し、静かに！ この夜更けに騒がせちや、困るぢやないか！』

『しらばつくれるな！ ぢや、嘘か眞個か開けて見せろ。』

『ええ、見せてあける、見せてあける、どこでも見せてあける。あけるから……』

『あけるから何うした？ ええ、どけ！ 俺があけて見てやる！』

『ま、待つて！ 待つてさ！』

『な、なにを停めるんだ！ 畜生、やつぱり亨助だな！』

『ま、待つて！ 静かに！ 話す事があるから！ 解つてよ、解つてよ！ ま、聽いてさ、話すから！ ——ほんととは、やつぱり亨さんなんだよ！』

『な、なんだ！』

『だから、わけを話すからさ、静かにして！ ——ほんととは察し通りあの人が脊に血だらけな姿で飛び込んで来たんだよ。警察に突き出すのは知つてゐるけれど、そんな事をして大袈裟にして客商賣に障つても困るし、表沙汰にすれば貴方にも手が廻るからと思つて、傷の手當だけして夜があけたら俵にでも乗せてこつそり送り歸すつもりで泊めてやつたの。今、醫者の眠り薬でぐつすり寝込んでゐるんだよ。』

『よく云つた！ 畜生！ その部屋だな！』

私は其聲を聞きつけるや否や再び身を起して、夢中で拈枕の端をつかんだ。

『あぶない！ お待ちつてば！ だから、だから、今そんな事をしないで、こ、斯うするんだよ、叱！ 静かに！』

急に五夜子の聲が落ちた。たゞひそ／＼云ふ囁きが襖越しに洩れて来た。私は起きて一分間と経たぬ内に、もう拈枕の端をつかんだまゝ再び仰向けに倒れてゐた。囁きは暫く続いた。そのあとで狭山の底太い聲が聞えた、

『恰度か。』

『大丈夫よ。』

『よたぢやあるまいな？』

『よたか、よたでないか、五分も経てば判るぢやないの。』

『逃がしたら承知しねえぞ。』

『逃けるにも、逃げられるからだぢやないよ。』

『ぢや、いゝか、裏の溝の向ふ側にゐるぞ。』

『えゝ、直ぐ行くから——』

『巧く連れ出して来いよ。』

『叱！ 大丈夫——』

そこで話聲が杜切れて、疊を摺る足音が忍びやかに聞えて、續いて店の格子の開く微かな音がしたが、間もなく不意に隔ての唐紙が開いて五夜子が眼を血走らせた眞蒼な顔を突き出した。

『五夜ちゃん、ど、どうするんだい、俺を！』

私は忽ち押し潰されたやうな聲で物狂ほしく叫んだ。

『叱！』と彼女は慌てゝ私の聲を制して、怯えたやうにびくりと背後を振り向いてから、中へ這入つて、直ぐ唐紙を立て切つた。それから室の片隅の箆笥の傍へ走り寄つて、其上の用箆笥の抽斗

をあけて忙しげに掻き廻してゐたが、何かを取り出して帯の間に押し込んだと見る間に、直ぐ私の枕元に駆け寄つて来て、自分の顔を私の顔の上に突き出した。

『聽いてゐた？ あゝ云つておいてね、うまく何處かへ、まいて来るの、ね、直ぐ歸るから持つてゐて。きつと、直ぐ歸るから、ね。』

『嘘を云へ！二人で俺を……』と私の此の言葉が口まで出かゝつた時、その瞬間彼女の口唇が蔽ひ被さるやうに私の口唇の上落ちて、息詰る程烈しく接吻した。同時に、奇妙にも彼女の眞赤に血走つた眼から湯のやうな涙が夥しく溢れ出て、私の頬を氣味悪く濡らした。私は驚異に似た妙な感に襲はれた。暫くすると五夜子は何か急に思ひ出したやうに突然顔を上げた。そして眼を瞠つて宙を視据ゑた。私が忽ち名狀し難い恐怖を感じた程その顔は蒼ざめて、極度に緊張して、口唇は一の字に切れて怪しく震へてゐた。

『五夜ちゃん！』と私は思はず叫ぼうとした。けれども其の叫びの出ぬ内に彼女の身は既に私の傍を離れて、手は隔ての唐紙の引手に懸つてゐた。慌てゝ袖を捉へようとしても遅かつた。私は半身を起した。併し忽ち痛みに堪へられずに再びぐたりと倒れた。其間に彼女の姿は唐紙の外に消えた。

『五夜ちゃん！』私の狼狽した叫びは、室外に消えた彼女の背ろへ投げかけられたのであつた。えたいの知れぬ不安の一刻一刻が深更の夜を刻んで行く。あらゆる妄念、あらゆる空想が物凄いい音を立て、私の脳裡を疾驅し始めた。抑へても制しても徒らに胸は狂ひ立つて、一刻毎に冴えかへる兩の眼を私は錐を揉み込むやうに天井の一角に据ゑた。渦を巻いてゐる天井板の木目がくろく廻る。廻る渦はだん／＼大きくなり同時に激しくなつて、室内のあらゆるものを巻き込んで行く。乳色の電燈の笠が巻き込まれて一緒に廻り出す。壁の三味線が廻り出す。衣桁の荒い辨慶縞の着物と黒襦子の帯とが廻り出す。簞笥と用簞笥とが廻り出す。桃色の花模様のメリンスの蔽布のかゝつた鏡臺が廻り出す。しまひに有らゆるものが一緒になつてたゞ一面に白い渦となつて激しく廻り出した。そして寝てゐる私自身の身體をも一緒に捲き込まうとする。私は怖ろしくなつて慌て、眼を閉ぢて、齒を喰ひ縛つた。白い渦は暫く頭の中に残つて廻つてゐるが、次第に影が薄くなつて行つて終に消えた。あとには一面に黒い闇が残つた。するとその闇の中を夜更けを憚るやうな静かな三味線の爪弾きの音が渡つて來た。糸に絡んで忍びやかな歌が聞えて來る。清元だな、二階だな、どの座敷だらう、こゝの抱女かしら、と思ひながらふと耳を立てると、濕つぽい聲が涙を誘ふやうに流れて來る――

……聞いて身も世もあらばこそ

しよせん叶はぬ戀ならば

一緒にころしてくださんせ……

「殺す！」「殺す！」急に歌の文句の一つが頭に引懸つて、それが忽ち大きな力になつて頭中を攪亂し始めた。腦裡の闇を激しく棍棒が飛ぶ。白刃が空を切る。打撃の音、悲鳴、叫び、呻き。――私は堪らなくなつて眼を嚇と開いた。その眼に忽ち鏡臺の紅い蔽布が映ると、反射的に『血だ、血だ』と呟いた。私の額から頬から胸にかけて眞赤な血がだく／＼と流れて來る。慄然として自分の額の縞帯に手をあて、見た。それから眼を下に向けて夜着の襟を見た。更に夜着を少し上へまくつて自分の胸のあたりを見た。赤い血の代りに黒襦子の半襟と銘仙地の華奢な菊五郎格子の模様とが眼に入つた。おや、五夜子の着物かしら、あの血塗れの着物と羽織はどうしたらう。――そんな觀念がスイと頭を掠めたかと思ふと、突然天井裏を走る鼠の音が物凄く聞え出した。其の音の中から小さな動物の魂消えるやうな斷末魔の叫びを聞きつけると、忽ち私の神經は前よ

りも一層激しく宙を風で煽られるやうに取り着く所も無く、と躍り出した。と、その天井裏の物音の中に混つてドサリと云ふ何物か落ちるやうな凄じい響がした。同時にバチャ／＼と云ふ水音らしい音が聞えた。無論天井裏ではない。家の裏手にあたるやうである。私は更に激しい衝撃を受けて、あらゆる注意を耳に集めた。鼠の音も一時杜絶えて、二階の爪弾きも止んで、底の底まで森と静まり返つた夜陰の裡を、ひツひツと云ふ細い併し激しい息づかひに、はツはツと云ふ死物狂ひを思はせる荒々しい息づかひが混つて聞えて来る。私は蒲團の上に跳ね起きた。ギリ／＼と剝るやうな肩の痛みを堪えて、物狂はしげに宙を視詰めて二つの耳を力限り緊張させた。忽ち怖しい想像が潮のやうに寄せて来た。その想像を煽るやうに戸外の物音は更に急迫的になつて行つた。荒々しい息づかひの間に、押し潰したやうな叫びが聞える。割り出されるやうな呻きが聞える。それに混つて水を攪き廻すやうな物音。——私は迫り来る衝動に驅られて無意識に叫ばうとした。けれども舌が吊つて聲は出なかつた。よろ／＼と立ち上つた。併し忽ち腰が崩れて再び床の上に倒れた。其の拍子にまた肩から脊にかけてギリ／＼と痛んだ。私は齒を喰ひ縛つてまた耳を澄ました。併しモウ戸外の物音は止んで、こんどはハタ／＼云ふ足音が微かに夜陰を縫うた。それが氣の所爲か近づいて来るやうに思はれる。私はモ一度立ち上つた。併しまた倒

れた。けれどもこんどは其儘這つて行つて壁の所まで行き、壁に手をかけて立ち上つて、三味線掛から三味線をはづした。其時突然消魂しく玄關の格子の開く音がした。私はハツとして其の拍子に三味線を杖にして二三歩よろ／＼と隔ての唐紙の方へ向つて歩いた。同時にその唐紙が向ふから開いて眞赤なものが轉け込んで、出會ひがしらに私にぶつかつて、私の身體と折り重なつて倒れた。私は夢中で其れを抱いた。

『五夜ちゃん！』併し私のこの叫びは聲となつては出なかつた。

『亨ちゃん！ さ、さ、狭山を、こ、ころ、殺して、来た……こ、これで、證據が……』

彼女の頭を抱いた私の腕はヌラ／＼と亡つた。そして忽ち私の顔から胸にかけて眞赤に染つた。彼女の額と頸筋のあたりとが二箇所バックリ口を開いて其の兩方からドク／＼と血が断え間なく噴き出た。全身は泥と水と血とでグシャ／＼に濡れてゐた。其の言葉が杜切れると同時に五夜子の身體はのけぞつて、首がぐたりと仰向けに私の腕から下に垂れた。右の手に血に塗れた剃刀を固く握つてゐた。——忽ち騒々しい人聲が起つた。その人聲を聞いたと思ふと、私はあとはモウ何も判らなくなつて了つた。

狭山の殺害と五夜子の死との結末・行田裏の喧嘩の結末、金時や小太郎の拘引、並に私の拘引、裁判、私は五夜子の教唆者と云ふ懸疑で他の二人より特に審問が嚴重であつた事、併し結局三人とも丁年未滿の故を以て二年の執行猶豫で釋放された事、——私はこれ等の事を述べるよりも更に重要な事の多くを語らなければならぬ。その一つは、かの白梅堂のお靜の運命である。

私達は一時拘留されたけれど、丁年に達しない者だから未決囚でも無論直ぐ皆歸宅を許された。それで私は家の奥の狭い部屋で小母さんの看護を受けながら傷の療養をするやうになつたが、其間に私は家に入出入する弟子の娘の口からお靜の最近の消息を得た。相變らず彼女の病勢は一進一退して敢々しくなく、たゞ身體が日を追うて衰へるばかりであつたが、或日家人の隙を見て家を脱け出した。三月半ば頃であるから未だ風の寒い往來を、袷の寝間着に伊達帯を締めたまゝで、髪を背ろに長く下けて、素足に草履を穿いて、何か頻りに獨語を云ひながら歩いてゐる姿を、近所の娘は見かけたと云ふ。(この娘が私の家に來て話したのである)。「しいちゃん」と娘は呼んで見たが、聞えたのか聞えぬのか返事は無かつた。内心薄氣味が悪いので、側へ寄つて見る氣にもなれないので、其儘背後からついて行つた。ついて行くと、そこから一丁程先きに在る本照寺と云ふ寺の前に來てお靜は立ち留つた。暫くほんやり佇んでゐるが、其内に門を這入つて、

鋪石を傳つて、左手の大きな玄關の前に來て、そこでまた立ち留つた。訪ふでもなし物を尋ねるでも無かつた。あとをつけて來た娘も門を這入つて、植込みの蔭に隠れて様子を窺つてゐると、暫くして玄關の障子が開いて、白い着物に黒い袴をつけた十四五の小坊主が、何處か使ひにでも行くと見えて小さな風呂敷包みを抱へて出て來たが、お靜の姿を見ると、眼を瞪つた。お靜もその小坊主の顔を見た。「何んです？ 何か用ですか？」と小坊主が訊くと、お靜は黙つて答へないで、よく見えぬものを確かめでもするやうに首を差し伸べて小坊主の顔を覗き込んだ。小坊主は色を變へて後退りして、暫くは眼ばかりパチ／＼させてゐるが、やがてまた「何んの用です？」と訊いた。併しこんどは、植込みの蔭から覗いてゐる娘には殆んど聞き取れぬ程小さな聲であつた。お靜はまだ何んとも云はないで、相手の顔を視詰めてゐるが、其内に急に高い黄色い聲で「ひゅーひゅー」と笑つた。小坊主は包を取り落して轉ぶやうに奥へ駆け込んで行つた。

間もなく彼れは此寺の住職らしい老僧を連れて再び玄關に出て來た。老僧は白い大きなだぶ／＼した襟巻をして黒い十徳を着てゐるが、玄關の端近くは出て來ないで、奥の方から腰を曲げて丸い眼鏡越しに凝然とお靜の方を透して見た。その背後に隠れるやうに小坊主がついてゐた。

『何か用かの？ 御婦人。』

お静は黙つて聲のする方へ眼を遣つたが、少し間をおいてから『和尚さん?』と云つた。  
『わしは住職ぢやがな——』

するとお静は急に口軽く喋り出した。

『あたしね、和尚さん、坊さんになりたいの。なぜつてね、私の幽霊がさう云ひつけたのよ、坊さんになれ、坊さんになれ、てね。あたしのお母さん、繼母でしよ、だから支那人の許へ行つて云ふの、嫌だわ、嫌だわ。ね、和尚さん、あたしにはね、好い好い人があつたのよ、オホ、笑つちや嫌や。——だけど、その人がね、その人がね、』とお静はこんどは急に聲を落して、しく、くと泣き出した。『あたしを棄てて、お腹の大きい人の許へ行つちやつたの、行つちやつたの。だからね、和尚さん、坊さんにして頂戴、坊さんにしてお寺へおいて頂戴、ね? そうしてね、あたしはね、私の大好きな幽霊と一緒にゐたいの。宅のお母さんは幽霊が嫌ひなんですもの。』

『あゝ氣狂ひだ!』と住職は叫んだ、『飛んでも無い、女御は寺には置けぬからの、サア早く歸んなさい、歸んなさい。これツ、早く歸んなさいと云ふに!』

住職は態と大きな聲を出して怒鳴つた。けれども矢張り端近く出て來ようとはしないで遠くの方で疊を踏んで怒鳴り立てた。

『して呉れないの? いゝわ、いゝわ。ぢや、幽霊を呼んで來て頼むから——』

さう云つたかと思ふとお静は振り返つて手招きした。植込みの蔭の娘は、その手招きが自分の方に向いてゐたので、ソツと總毛立つた程驚いたさうである。けれどもそれだけなら未だしも、お静は急に後ろへ向き直つて、『幽霊、幽霊』と呼びながら、門の方へ向つて歩いて來た。娘は其儘さうしてゐれば見附かるにきまつてゐるので、どうしようかと慌てて隠れ場所を見廻すと、幸ひ植込の後ろ手に當つて小さな潜門の出口があつたので、そこへ走つて行つて外へ出た。併し矢張り恐いもの見たさに、氣づかれぬやうに門の口から覗いてゐると、お静は鋪石傳ひに歩いて來たが、表門の右手にある鐘樓に眼をつけると突然其方に走り寄つて、鐘樓の階段を駆け上つた。そして撞木に手をかけると『幽霊來い! 幽霊來い!』と叫びながら髪を振り亂して荒れ狂ふやうに鐘を撞き出した。鐘は呻りを立て、夕空に鳴り渡り始めた。住職と小坊主とが血相變へて走り出て來たが、樓上に上らうとはせず下から頻りにわめき立てた。併し效が無いと知つてか住職は『誰れか來い! 誰れか來い!』と叫びながら本堂の方へ驅けて行つた。裏門から覗いてゐた娘は此時急に怖ろしくなつて、一散に驅け出して歸つて、白梅堂に知らせた。それで母親が隣家の人を驅り立てて一緒に寺へ馳せつけたが、其時は恰度三四人の男が寄つて、荒れ狂ふお静を抑へ

つけて細引で縛り上げてゐる所であつた。それでお静は車で白梅堂へ連れて歸られたのである。此の事は一時町中の評判になつたのであるが、私とその目撃者たる娘から此事を聞いたのは、事實のあつてから四五日経つての事である。そしてお静の死んだのは、私が此事を聞いてから十日ばかり後、私のまだ牀褥に在つた頃である。本照寺での發作以來彼女は家に歸つても全然飲食を取らぬやうになり、たゞ斷えず狂ひ立てるのみで、仕方なしに手足を固く縛つて寝かしておいたさうであるが、つひに四月の始めのそろ／＼花の咲き初める頃、十八の命を狂ひ死に死んでしまつたのである。

私が長く牀褥に就いてゐたのは傷が癒らぬ爲のみでは決して無かつた。一時に受けた異常な怖ろしい経験や残酷な打撃が激しく魂を侵したのが其の主なる原因であつた。而も漸く癒えかゝつた心身も、お静の死の報らせによつて更に新しい打撃を受けて、再び私は重い枕に就いて了つた。牀中にあつて眼が醒めてゐる間は必ず暗い過去の種々相が様々な妄念となり幻影となつて腦裡の混沌のうちに展開した。さうして様々な苦惱や悲哀を胸にきり／＼揉み込んだ。漸く眼を轉じて未來を眺めると、一切が暗澹として一條の光も無かつた。過去と未來の界を劃する一線が現在で

あり、過去に押され未來に促されて始めて現在に生の意義があるとするならば、私の現在の生は虚無に等しい生であつた。私は生くる力を失つた。たとひ傷が全く癒えて肉體的に恢復しても、此儘であつたらぢり／＼と内の生命が衰へて行つて、つひに五夜子やお静と運命を共にしたかも知れない。併し突如として神祕な救ひの手が現れた。さうして私は二人の異性の貴き生命の犠牲の上に私の新しい生命を築き上げる不思議な轉機を與へられた。この救ひの手は私の亡き母より來た！——と私は今もさう信ぜざるを得ないのである。

お静の死は再び私の心身を起つ事の出来ぬ程打ちひしんだと共に、或る氣味悪い思想が私を襲つた。それはあの去年の秋の夜白梅堂での事件の後、その歸途に、突如として起つた思想と同じものであつた。お冬姉さんの愛に溺れて善良な母を棄てて了つた父、其爲に悲惨な死を遂げた母。さうした父母の運命の餘波を受けて無垢な少年の心を自ら虐けるに至つた私、優しい純なお静の愛を棄てゝあくどい嬌艶な五夜子の美に溺れて行つた私、その結果偶然のやうな必然のやうな不思議な徑路を辿つて突如として導かれた五夜子の死、同時に可憐なお静の狂死。——皆運命だ、因果の車輪の轉するがま／＼に走つて行く運命なのだ、自分は知らず識らず父や母や姉さんと同じ暗い呪はれた運命の流れに押し流されてゐたのだ、さうして何時まで斯うして流されて行く事だ



らう？——この考へは、云つて了へば平凡ではあるが、私にとつては怖ろしく深刻なものであつた。この考への爲に私の心は暗きが上にも暗くなつた。而もこの考へは以後寢ても醒めても私の心を閉ざして、同時に脂汗のグラ／＼と流れる青脹れの眼だけ落ち窪んだ母の死顔が始終眼にチラつき出した。私は生きた心地もなく、何時までも牀上に骸のやうな身を横たへてゐた。

春を知らぬ間に春は去つて、おほかたの花も地に埋れ去つた四月の末の或日、私はいつものやうに襲ひかゝる過去の幻影や妄想に悩まされながら虚ろな眼を天井に向けて横はつてゐた。恰度小母さんも姪夫婦も外出してゐて私一人であつた。どんよりと蔽ひかぶさるやうに曇つた日で、家の内は暗い上に人氣ひこけが無いので猶更陰氣である。それだけまた妄想や記憶の斷片が自由に内の世界を奔り廻る。全身血に染まつた五夜子、髪を振り亂して寺の鐘を撞いてゐるお静、裸足はだしので庭の裏木戸から駆け出して行くお冬姉さん、大きな信玄袋を提げて俵から降りて玄關の格子をあける母親、その蒼い顔、亂れた髪、窪んだ眼、骨と皮ばかりに瘦せた手、「私はね、私はね、亨ちゃんのお母さんなの」と乾涸びた聲がする。——あの時は家出した姉さんの歸つて来るのが戀しくて、俵の音ばかり楽しみにしてゐた時なのだ。それが俵の音がして、珍しく家の前で停つたので、馳け出して見ると姉さんではなくてお母さん。——あゝ俵の音がする。恰度このやうに彼時

も俵の音を聞いたのだ。おや、宅うちの前で停つた。誰れだらう？

『御免下さい』——女の聲である。

夢でも無い、幻覚でも無い、私は此時確かに戸外に俵の音を聞いた。其の音が家の前で停るのを聞いた。同時に女の訪おもたふ聲を聞いたのである。

『ハイ、どなた？』と私は精一杯の聲で答へた。

その拍子に格子があいた。そして這入つて来た人の姿を見ると、私は『あ！』と思はず牀の上に起き直つた。同時に頭かぶの先から足の先まで氷のやうな悪寒が走つた。——死んだお母さんだ！

『御免下さい。——あれ、亨さんぢやないの？』

私はキョトンとして黙つて其人を視詰めた。すると其人は私の顔を見詰め返しながら口元に不自然な笑みを浮べて、常に親しく出入する人かのやうにかまはずにズン／＼上つて来た。

『ねえ、亨さんでせう？ 亨さんは未だ知らないかも知れないけど、私はね、お前さんの伯母さん——』

さう云つて私の牀とこの近くへ来て座つた。私はほつんと一つ御辭儀をした。さうしてまたほんやりと黙つて相手の顔を視詰めた。何んの考へも何んの感情も浮ばなかつた。知らぬ間に連れて行

かれて全くの未知の世界へ一人突然抛り出されたやうな気持ちであつた。私に伯母がある！——  
そんな事は話にも噂さにも聞いた事が無い！

『亨さん、不思議に思ふだらうけどね、わたしはお前さんの死んだお母さんのたつた一人の姉なの。そりや不思議に思ふ筈よ、私だつて亨さんを未だ赤ン坊の時に知つてゐるだけで、死んだお母さんとも十何年も前に別れたきり、死目にも到々會はなかつたんだもの。それもいろ／＼事情のあつた事なんだけど——』

この伯母が若し亡母に似てゐなかつたら私は伯母が何んと云つても其の言葉を信じなかつたであらう。それほど事は意外であり、話は突飛である。併し伯母は、私の知つてゐる限りの母の姿とは違つて肉附も血色もよく、髪も綺麗に束髪にして派手な大島紬の對を着てゐて、姿や容の相違はあれ、顔だけは私が最初驚いたほど似てゐた。——私はこんどは更めて意識的な御辭儀をした。

『そりやさうと、病氣なの？』

『え、少し——』

『頭はどうしたの、その縞帯は？ それにマア瘦せて、大變顔色が悪い。——いつたいどうかし

やしないの？』と伯母は少し息を弾ませた。

私は黙つて俯いてゐた。

『何か事情があるならすつかり話さなけりやいけないよ、私が今日なぜ急に訪ねて來たかつて、まあお聴き、亨さんは馬鹿々々しいと思ふか知れないけど、實は一昨昨日の晩氣味の悪い夢を見てね、死んだお前さんのお母さんが狂人のやうに髪を亂して乳呑兒を抱へて、おろ／＼と宛てどもなく歩き廻つてゐる所なの。それだけなら未だいゝけどね、その翌晩またそれと全く同じ夢を見たんだよ。それで私は急にお前さんの事を思ひ出して、いつたい今は何處にどうしてゐるんだらうと、朝起きてから妙に氣になり出したの。だけど亨さん、まだそれだけならいゝのだよ——』  
私はギョツとして伯母の顔を見詰めた、これ以上どんな怖ろしい言葉が伯母の口から物語られるか？ 伯母は健かな血色を失つて眞蒼な顔に眼だけを異様に輝かせてゐる。口唇が微かに震へてゐる。

『——また其の翌晩、昨夜さ、全く同じ夢を見てね、お母さんが蒼い水脹れの顔をして眼だけ光らせて、私を視詰める其の眼の怖かつたつて、逃げようとしても體が射練められたやうに痺れて動けないのだもの、脂汗をべつとりかいて眼が醒めたの。』

この言葉が終るか終らぬ内に私は感激とも恐怖ともつかぬ一種の昂奮が激しく頭につきあけて来て、頭と脊骨とが突然冷水をかけられたやうに痺れ返つた。私は起きてゐられなくなつて其儘うしろに倒れた。そして留度なく涙の溢れ返る眼を黙つて伯母の方へ向けた。

伯母の語りつぐ所によると、それから伯母は私の事がどうにも氣になつて仕方がなく、稽古も何も（伯母は赤阪で琴の師匠をしてゐた）手につかないので、楠本の家がまだ東京にあると云ふ事だけは知つてゐたので早速其朝俵を備つて、自分の知つてゐる東京の親戚を片端から訪ね廻つて、やつと私の家の所在を確かめて今こゝへ乗りつけて來たと云ふのである。

（まだつとく）

下 篇

一

亨助の「暗い過去」は未完のままこゝで終つてゐる。急に房州の八幡を立つて東京に歸らうと決心したので、途中で筆を絶たねばならなかつたのである。併し彼れとしてはむしろこれから一篇の主眼に入るつもりなのであるから、(まだつゞく)とだけは斷つておいた。なぜ急に八幡を立たねばならなくなつたか、その事情はあとで述べるとして、「暗い過去」を書き始めたのが暮の二十六日、途中で筆を絶つべく餘儀なくされたのが正月の十四日、そのあひだ「暗い過去」の發展した如く彼れ自身の生活も、外面は兎も角内面では相當の波瀾を見せて發展した。

久留米絢の男と其の連れとは正月は東京の方がいと云つて年末の晦日に歸つたが、入れ代つて二人三人新しい學生が來て、亨助と廣野と襤褸の澤杉と併せて六人が此の寮に起臥してゐた。亨助が大抵は二階で机に向つてゐるに反して、平生努力家の廣野が此處へ來てからはオルガンをいたづらしたり澤杉を相手に鬪球盤に向つて見たりして殆んど遊んでばかりゐた。その廣野が始めの豫定を翻して突然歸ると云ひ出したのは正月の五日の事である。其日の午前亨助は筆に疲

た頭休めに階下に降りて、澤杉を相手に球を弾き出した。廣野は傍で見えてゐるが、其内に部屋を出て行つた。暫くすると大廣間でオルガンが鳴り出した。一局済んでから亨助が部屋を出て大廣間へ行つて見ると、オルガンの前に廣野が腰掛けて、その傍に津磨子が立つてゐる。さうして廣野に指の運び方を教へてゐる。亨助は「おや」と思つて急に暗い氣分になつた。同時に廣野は亨助を見て赤い顔をした。赤い顔をしながら暫く俯向いて白鍵を攪き廻してゐるが、其内にオルガンを離れたので、亨助が代つて腰かけた。

『きつとお上手でせう?』

『いえ、オルガンを弾くのはこれで生れて三度目です。』

『そんな事を云つて、お上手に弾くんでせう?』

『嘘かほんとか、見てゐて御覧なさい。』

亨助はぎごちない指を出鱈目に動かしてメリー・キドウのメロディーを弾き出した。弾きながら彼れは「暗い過去」で亂れた頭の神経がスーと揃つて行くのを覺えた。弾き終つたら頭が軽くなつて清々した。

『生れてから三度目にしてはお上手ですわ。』

『褒めたんですか、貶したんですか？』

『そりや仰しやるまでもございせんわ。』と笑つて津磨子は奥の室に晝飯の支度に行つた。亨助はその後姿を見送つてから廣野を顧みて微笑した。併し廣野はその微笑に答へなかつた。

此日亨助はとも筆が進まないの、誘はれるまゝに午後から廣野と岡田と三人で北條の館山公園へ散歩に行つた。この岡田と云ふのは、大學の理科の學生で、亨助等よりも前に來て泊つてゐたが、家にゐる時はいつも色の褪めた黄色い縞の襦袢を着てゐて、顎の四角い、薄い眉の奥に眼の引込んだ、鼻と口の無遠慮に大きい、鬚髯の深い、そしてよく豪傑笑ひをする男である。岡田は津磨子や母親とは二三年前からの知り合ひで、何んでも大學に入る前に酷い肋膜炎を病んで八幡へ療養に來てゐた時、母親から手厚い世話を受けた、それ以來此の家族と昵懇にしてゐるのである。所でその散歩の歸りに、松林の中を歩きながら三人の間に斯う云ふ會話が交はされた。會話は廣野から切り出されたが、切り出された會話はたゞ亨助と岡田との間にのみ發展した。

『津磨ちやんて惻口さうな人だな。』これが廣野の切り出した言葉である。

『惻口だが、教育が無いからね。』と岡田が答へた。

『教育が無いつて、女學校は出てゐないんですか？』と亨助が岡田の言葉を横から引取つた。

『出てゐないんだね。病氣をした爲に這入れなかつたらしい。』

『でも、琴とか花とかは仕込んであるんでせう？』

『併しまあ大した事は無いね。器量は悪くはないが、女學校でも出てゐれば兎も角、マアこの邊なら嫁つた所で郡役所のお役人ぐらゐるだね。』

『少し可哀さうだな。學校を出なくなつて心懸さへよければ自分で勉強が出来るんだから。』

『尤も文學書は好きで讀むやうだが。』

『へえ、どんなものを讀むんです？』

『小説だね。』

『それで一寸複雑なんですな。』

『それに、あゝして多くの書生に接するからどうしても擦れる。複雑になる筈だよ。』

『女は單純の方がいいな。』亨助は全く腹とは反對の事を云つた。

『複雑の方が話し相手にはいいがね。』

『そりやさうですね。』

『話し相手にはいいが——』と岡田は少し考へた。

『何んに悪いんです？』

『細君には悪いよ。』と云つて笑つた。

『さうですかね。』とは云つたが亨助は臍に落ちなかつた。

それから岡田は今迄亨助の知らぬ事を云ひ出した。

『津磨ちゃんに較べると、姉さんの方が餘程單純だよ。』

『姉さんがあるんですか？』

『この方は東京の女學校を出てゐるんだ。但し、あんまり綺麗ではない。岡田は薄笑ひをした。『宅にゐるんですか？』

『ゐるんだが、暮から東京の親戚の方へ行つてゐるらしいね。もう直き歸つて来るだらう。』

『いつ頃女學校を出たんです？』

『二三年前だらう。もう嫁入時は過ぎてゐるが、何しろ養子取りだからね、思ふやうなのはなによ。』

『ぢや、津磨ちゃんは嫁にやれるわけですね？』

『貰ふかね。』

岡田の悪氣の無い冗談が、亨助にはいきなり正面から撲りつけられたやうに應へた。併し腹の中では熱くなりながら表面は冷い苦笑ひでごまかした。岡田は例の大きな聲でアハ、と無邪氣に笑つた。

此日の夜、廣野と亨助とが常のやうに床を並べて寝てからの事である。廣野が急に思ひ出したやうに、

『楠本、俺は明日歸らうと思ふんだが——』

『なぜ、突然？』

亨助は意外だと云ふ顔を廣野の方に扭ぢ向けて訊き返した。併し廣野は答へないで、仰向いたまゝ黙つて眼を閉ぢてゐたが、暫くして獨語のやうに云つた、

『悟るまでは環境の選擇が必要だからな。』

こんどは亨助が黙した。亨助は二人の上に何かしら重苦しい壓迫の來た事を感じて、これ以上此の話を發展する事を暗に怖れた。

『だが、も少しゐたつて好いだらう。一緒に來たもんだから一緒に歸らうぢやないか。』と亨助は碎けて出た。

『君はいつまでゐたつていゝんだ。俺は兎も角歸る。』

廣野の語調が稍々昂奮を帯びてゐたので亨助は驚いて、返す言葉に迷つた。

『こんな所にゐたつて精進の妨げになるだけだからな。』と廣野は少し調子を落して言ひ添へた。

亨助は黙して、廣野との間に割れた溝を眼前に視詰めた。彼れは此の溝を淋しく思ひ、残念にも考へた。併しまた同時に好い事にも感じた。溝を隔てゝ廣野を見ると、彼れが羨しくもあり、忌々しくもあり、また慄れにも思へた。

その翌朝廣野はひとり船で八幡を去つたのである。

亨助は東京へ歸るのが嫌であつた。嫌と云ふよりも怖ろしかつた。それはお冬の存在が然らしめたのであつて、必ずしも八幡のこの寮舎に留まりたい爲ではなかつた。否、むしろ此處に留まる事も彼れにとつては苦痛であつた。それは津磨子の存在が彼れの生活の平面に斷えず一つの波紋を描くからであつた。併しお冬を厭ふはお冬なるが故に厭ふのであり、津磨子を怖れるのは異性なるが故に怖れるのであつて、その怖れる反面にはいつまでも津磨子の傍にゐたいと云ふ要求のあるのを彼れ自身意識しないではなかつた。而もこの要求は強かつた。廣野が突然歸ると云ひ出したのは一つは自分と同じこの要求を反撥的に斥けたのであり、自分が彼れと共に歸り得なかつたのは一つはこの要求に譲つた爲であると解釋した亨助は、内心慚ぢた。併し彼れは此地に留まる道義的な理由を、東京にはお冬がゐると云ふ事實に見出した。さうして其の實際的な直接な理由を「暗い過去」を書くことと云ふ事に求めた。それで彼れは『君には歸るべき内面的な理由があるが、それを知つてゐるにも拘らず俺には俺で留まるべき別な内面的理由があるのだ、而も君はそれを知らないのだ』と云ふ考へによつて廣野に對する自分の優越的地位を自覺してゐた。

廣野が去つてからは彼れは一層筆に親しんだ。筆に親しんでゐる時ばかりは總べての苦惱と煩悶とを忘れた。自然彼れは「暗い過去」を書く事に一切の解決があるやうな氣がし出した。實際は無いのであるが、行き詰まつた實世界の生活の方向を轉換させて觀賞の世界の内に自分の生活を發展させ出したから、少くとも彼れの意志は抵抗を受けてゐない。そこで何かしら總べてがこれだけでいゝやうな氣がする。併し決してそれでよくなかつたと云ふ事は、正月の十四日實世界の風が一枚の葉書を彼れの手許に吹き寄せた時、彼れは否應なしにそれを悟らされずにはゐられなかつた。

其日の夕方、亨助は「暗い過去」のお靜の狂死と伯母の突然の出現とを書き終へてから息抜きに階下の澤杉の部屋に降りて來た。恰度岡田と津磨子とが來てゐて何か話し合つてゐたが、岡田

は亨助の這入つて来るのを見ると、

『やあ好い所へ来た。四人で混合試合をやらうぢやないか。僕は明日歸る事にしたから、僕を送別する意味でね。』

『明日歸る？』

『うむ、君も一緒に歸らんか？』

『いや僕はまだ仕事があるから——』

亨助は恰度好い氣晴らしだと思つたし、それに津磨子が仲間に這入るのが特に興味を惹いたので、早速混合試合を承諾した。岡田が立つて次の部屋から闘球盤を持つて来た。

『ぢや行りますかね』と澤杉が云つた、『僕と楠本と組まう。岡田さんは怪美人と組み給へ。』  
『怪美人か。怪美人は有難いが、名ばかりで一向頼みにはならんて。』

亨助と澤杉、津磨子と岡田とが組んで、闘球盤を中にして座つた。黒玉を中心に圓く輪に並べられた赤と青との玉の連鎖が瞬く間に崩されて行く。岡田と澤杉とが一番手際よく弾く。津磨子は始めから、狙ひもつけずに無雑作に弾いてゐた。いかにも取り澄ましてお役目にやつてゐると云ふ風で、弾いた玉は一つも效を奏さなかつた。それで、岡田が一人で奮戦したけれど、勝は亨

助と澤杉との方に歸した。

『怪美人はまるで問題にならんよ。』

岡田は投げ出すやうに云つて、例の豪傑笑ひをした。

『楠本と津磨ちゃんなら一人で相手にしたつて平氣だよ。』と澤杉が笑つた。

『はゝゝ、手厳しいね。楠本君、男として黙認出来るかい？』

亨助が苦笑してゐると、その時津磨子がチラリと亨助の方を流し眼に見た。その眼に視線を突きあてた亨助は、その眼から『やりませうよ』と云ふ意味を受け取つた。

『よし、澤杉さん、そんなら二人でかゝらう。きつと勝つね？』

『面白いぞ。大いにやるべし。澤杉君、やつて見給へ、僕が審判してやらう。』

亨助が盤に向つて球を並べ出した。津磨子は笑ひ乍ら黙つて點頭いて亨助と向ひ合つて座つた。澤杉は二人の横に座つて側面から敵の玉を用心深く弾き出した。津磨子は相變らず見當もつけないで無雑作に弾いて、どうせ下手なんだわと云ふ調子である。無論、弾いた玉は一つも功を奏さない。亨助だけが一所懸命になつて覺束ない手際でポツ／＼敵の玉を葬つて行く。その覺束なさに引き換へて澤杉が狙つて弾く玉は十中の八九見事に相手の玉を射落す。



『二人かゝつても餘り振はんね。』と側から岡田がひやかした。

其内に、どうしたはずみか、津磨子の弾いた玉が、恰度盤の中央に二つ寄り添つて並んでゐた敵の青玉を一撃で兩方へ突き放して、二つとも見事に兩端の穴へ落し入れた。

『豪い、豪い、姐御、そろく快美人の本領を發揮したね。』と岡田が頓狂な聲で囁し立てた。

『なに、君、ミラクルだよ。こんな事が度々あつて堪るもんぢや無い。』

澤杉はさう云ひ乍ら、二度目の玉を弾かうとする津磨子の顔を横からからかふやうに覗き込んだ。津磨子は澄ましてまた無雜作に弾いた。その玉は、中央に立ち塞がつて邪魔してゐる王様格の黒玉を巧みに避けて、易々と敵を突き落した。

『や、またやつつけたか。豪いぞ、豪いぞ。』と岡田は兩手で膝を叩いた。

『どんなものだい、澤杉さん、怪美人だもの、馬鹿には出来ないぜ。』と亨助が澤杉の顔を覗き込んだ。

『なに大丈夫ですよ。柳の下にはばかり猶はるませんからね。第一もう、姐御のお手際で弾き落されるやうな玉は、こちらには一つもありません。』

實際正面から玉を當てゝ效を奏するやうな敵の玉は一つも無い。津磨子は例によつて無雜作に

自分の玉を弾き飛ばした。その玉は一度盤の枠へ當つて、撥ね返つた力で敵の玉を追ひ遣つた。

追ひ遣られた青玉は、穴に片足入れかけてゐた青玉と一緒に誘つて共々落ちた。

『おや、また這入つたか。冗談ぢやない、津磨ちやんどうかしたよ。』

こんどは澤杉が呆れた顔をした。岡田がまた囁し立てた。遣り損はぬ以上は何時までも続ける権利がある。津磨子はモ一度弾いた。前と同じ反射法でまた敵を二つ葬つた。それを見届けた澤杉は急に膝を立てゝ闘球盤を離れてしまつた。

『止めよう。こんなに続けだまにやられちや叶はねえ。』

わざとぞんざいな口調で冗談らしく云つた。津磨子を始め三人が笑ひ出した。

『津磨ちやんは人が悪いな。——岡田さん、今迄すつかり飴を食はされてゐたんだよ。』と澤杉が云ふと、

『飴を食はされてゐたか、ワハ、』と岡田が愉快さうに笑つた。

所が妙な事に津磨子が急に眞面目な顔をして辯解し出したのである。

『いゝえ、どう致しまして。今のは運がよかつたんです。わたし、前にやつた事などはございませんのですもの、上手な筈はありませんわ。』

『何しろ驚いた。津磨ちゃんは隅におけないよ。上手でゐて下手に見せかけておくんだから人が悪いやね。』

『まだそんな事を仰しやつて。わたし、前に弾き玉なんかした事はありませんわ、今年が始めてです。嘘だと思つたら岡田さんにお訊き遊ばせ。——ねえ岡田さん?』

岡田は薄笑ひをして答へた、

『ナニこれ津磨ちゃんは仲々上手いんだよ。たしかに飴だつたね。』

『マア岡田さんまで——』と横眼で睨む眞似をして、『そんな事を仰しやられると、わたし、どうしていいんですか判りませんわ。』

津磨子はさう云ふと急に袂を顔に押しあて、畳の上へ突臥した。

『愉快、愉快。雨に惱む海棠か。どつちにしても濡衣だな。』と岡田が柄に無い洒落を云つてまた大聲で笑つた。

亨助は判断に苦しんだ。果して飴なんだか、飴でないんだか。飴だとすると自分に都合の好い氣がする。また彼女の眞面目な辯解も自分にとつて或る意味を持つて来る。もし飴でないとすると? 彼女の辯解が無邪氣な有りのままの辯解だとすると? ——亨助は先刻勝負を始める前

に彼女が自分に向けた『やりませう』と云ふ眼を想ひ出して、強ひて此の疑問を打ち消した。

『どうだい、ぞんざいな妙な手つきをして、スー、スーと入れたんだから呆れるね。』と澤杉はわざと聞えよかしの仰山な聲で同じやうな事を繰り返してゴロリと横になつた。横になつたかと思ふと直ぐ立ち上がつて、

『あゝあ、驚いた、驚いた。』と投げ出すやうに云ひ棄て、室を出て行つた。

そのあとで津磨子はついと頭を上げた。別段雨に惱む秋海棠の色も見えなかつた。亨助を見て、につと微笑んでから、

『また上ります。』と云つて立ち上がつて室を出て行つた。

『どれ、僕も歸つて支度でもするかな。』と岡田も自分の室へ去つた。

獨り残つた亨助はほんやりして事件の意味を考へた。出来るだけ自分に都合の好いやうに解釋して腹の中で微笑んだ。それから氣がついて再び二階へ上らうとして立ち上がると、出會ひ頭に澤杉が這入つて來た、

『また勉強かい? もう少し話して行けよ。』

『うむ。』

亨助がまた腰を落附けると澤杉は押入から毛布を出して敷いて、腹這ひになつた。

『所で君はまだ暫くこゝにゐるンだらう。何日頃歸るつもりだい？』

『さあ、學校はモウ無論始まつてゐるけれど、今書きかけてゐるものがあるからそれが終るまでゐたいと思つてね——』

『十七八日なら僕も一緒に歸るがな。』澤杉はさう云つたが何を思ひ出したか急に調子を變へた、  
『——併し不思議な縁だね、楠本さん、君と偶然一つ部屋に寝起きして、こんなに親しくならうとは實際夢にも思はなかつたね。マアこれを御縁に永久に交際して呉れ給へ。僕は君のやうな友達を持つた事を光榮とするよ。』

澤杉の言葉が突然妙に感傷的になつたので、亨助は稍々狼狽した。

『有難う、併し君も今年の六月はゼントルマンになるンぢやないか。僕なんかまだ當分は書生だよ。』

『僕は大學を出たつて變らないと思ふよ。いつまでも斯うやつて學生らしく無邪氣に歌でもうたつてゐたいね。』

『だけど、近い内に奥さんも貰はなくてはなるまい。』

『妻帯はマア三十だね、それまではまだ——大いに勉強します。』

亨助は此時腹の中で斯う考へてゐた、——どうだい、君は津磨子さんを貰ふ氣はないかい、君もあの人を愛してゐぬ事はなからう、女學校を出たつて出なくなつて當人の頭次第で大した相違は無いだらう、津磨子さんを貰つてはどうだい、さうすれば頼り少い津磨子さんの一家が幸福になれる。——

亨助は滞在中、澤杉が津磨子や其の母親と特別に親しい關係にあるのを知つた。で、彼れはさう思ふ事によつて自尊心の満足と自己犠牲の快感とを享樂したのである。けれども思ふだけで無論口には出さなかつた。澤杉は言葉を續けた、

『僕は實際まだお坊ちやんで世間を知らないから困る。そこへ行くと年は若くても君の方が豪いよ。僕なんか實際單純だからね。』

『單純の方がいよ。世間慣れると云ふ事は一種の墮落だからな。』

自己犠牲の快感を味はひつゝあつた亨助は自然大きく出た。併し澤杉が急に黙つて亨助の顔を見たので亨助は氣がつくと多少きまりが悪くなつた。

そこへ障子に淡い人影が射した。

『お寢みでございませうか。』

『いえ、サアお這入りなさい。』と享助が答へた。

『御免下さい。』と障子が一尺程あいて津磨子が顔を出した。享助を見ると例の如く莞爾して、

『澤杉さんらつしやいますか？』

『えゝ居ります。お這入りなさい、構ひませんよ。』

『およつていらつしやるんですか？』

津磨子は囁くやうにさう云ひながらモヂ／＼してゐる。すると澤杉が突然聲をかけた、

『こゝにゐますよ、お這入りなさい。』

津磨子は障子を少し廣くあけて、澤杉の寝てゐる方を覗き込んだ。あけた障子の間から冬の曇り日の薄い光線が斜めに流れて、部屋の中に淡い明暗を劃した。

『澤杉さん、先程はどうも相済みませんでした。』と彼女はさう云ひながら丁寧に御辭儀をした。

『なに？ 何んです？』

『いえ、先程飴を食べさせたと仰しやつたでせう？ わたし決して飴なんか食べさせたつもりはないでせう。』

澤杉と享助とが笑ひ出した。

『いえ、ほんとうでございませう。あれは全くまぐれ當りでございませう。下手に見せかけて欺すなんてそんな悪い考へは決してありませんわ。ですからお氣に障つたらどうか御勘辨遊ばして、この通りお詫び致します。』

津磨子はモ一度丁寧に頭をさげた。而も生真面目な顔をしてゐるので二人とも笑ふわけに行かなかつた。享助はまた判断に困つた。彼女は本氣なのか、茶氣なのか？ 本氣だとすると、これぐらゐの事で澤杉の機嫌を氣にする津磨子の心が思ひ遣られて不愉快な氣がする。茶氣だとすると、あまり人を喰ひ過ぎてゐる少し殘酷だ。徹底して單純なのか、徹底して人が悪いのか。――

津磨子は嚙て微笑を含んだ眼を享助の顔に向けて何か云はうとしたが、急に思ひ出したやうに手を自分の懐中へ持つて行つて、

『あ、失禮致しました、楠本さんにお葉書が参りました。』

先刻からチラと襟のあたりに端を見せてゐた懐中の葉書を取り出して享助の前に差し出した。

『なんだ、肝心の用を後廻しにしておいて――』と享助は腹の中で呟きながら黙々と葉書を受け取つて表書を見た。と同時に彼れは顔の表情を亂したが、裏をかへして文句を讀むと更に色を變へ

てその短い文句にいつまでも眸を凝らした。

「お父さんから今月十八九日頃歸るとのお手紙が來ました。とりあへず知らせるだけ知らせてくださいます。」

文句の終りに「ふゆ」と書いてある。たゞそれだけの簡単な文句を彼れは何時までも何時までも視詰め乍ら、だん／＼彼れの顔は蒼くなつて行つて葉書を持つ手が微かに震へ出した。

「どうか遊ばしました？」と津磨子が亨助の顔を覗き込み乍ら不安げに訊いた。その聲で不圖氣がついたやうに葉書から眼を離して津磨子の顔を見た彼れは、歪んだやうな態とらしい笑みを洩らした。

『なに、なんでもないんです。』

— それだけ云ふと彼れは、ふいと立ち上がつて挨拶もせず部屋を出た。さうして二階へ上つて座りつけの机の前にべたりと座つて頬杖をついた。

亨助は約一時間を其まゝの姿勢で過した。其間に房總の天地は雲を展けたまゝ音も無く暮れて行つた。一時間の後に彼れは急に氣を變へたやうに頬杖をはづして手摺越しに外の世界を見た。松林も遠山も夕闇に包まれて、たゞ所々に赤い灯だけがチラ／＼してゐる。それから眼を轉じて

机上の原稿を見た。書いた文字が既に殆んど見えない。併し彼れは萬年筆を取り上げて最後の頁の餘白の所に（まだつゞく）と書いた。書くとき直ぐ原稿用紙を揃へて、小刀に附いてゐる錐で孔をあけてそれを綴ぢてから、始めの部分を書いた方の書簡用紙と一緒に重ねた。一寸餘の厚さになる。それを懷中に押し込んで立ち上がつて階下へ降りると、恰度夕餐の膳が並べられて既に澤杉と岡田とが席に着いてゐた所であつた。

『さあ召し上つて下さいまし、只今お呼びに上る所でした。』と津磨子が亨助の顔を見て云つた。

亨助は黙つて岡田の隣りに座つた。同時に岡田を顧みて、

『岡田さん、僕も明日一緒に歸りますよ。』と云つた。

『どうして、急に？』

『まあ、あしたお歸り？』と津磨子も亨助へ黒い眼を睜つた。澤杉も意外な顔をして亨助を見た。

『今、家から葉書が來て急に用が出來たもんだから——』と彼れはさあならぬ態に答へた。

其時の亨助は先刻に引き換へて既に平靜に落着いてゐた。むしろ晴々とした色さへ浮べてゐた。

彼れは食事を終ると階下の自分の部屋——澤杉と同じ部屋——に引き取つて荷物の整理をしてから、ひとりてぶらりと海岸へ出た。そこで彼れは砂上の小舟の舷に腰を下してまた一時間ばかり

を何事か沈思に過してから歸つて來ると、澤杉や岡田など五六人が集つて火鉢を圍んでゐる。亨助を見ると岡田が聲をかけた、

『どこへ行つてゐたんだ？ 皆心配してゐたよ。』

『なに濱邊まで。』

『濱邊？』と澤杉が口を出した、『物好きだねえ、この寒いのに。いつたい何しに行つてゐたんだい？』

『ちよつと散歩。』

亨助はあつさり答へて皆の間へ割つて這入つた。すると岡田が思ひ出したやうに云つた、

『おい、君、湯に這入らんかい？ 前の家に湯が立つてゐるよ。僕等は今這入つて來たんだから、直ぐ行つて這入つて來たまへ。』

『湯か、あんまり有難くないね。』

『這入つて來いよ、』と澤杉が側から勧めた、『津磨ちやんにでもさう云つて御覽、連れて行つて呉れるから。』

亨助は澁々立ち上つて奥の部屋へ行つて、隔ての板襖の外から大きな聲で、

『湯に這入りたいたいのですが、どこですか？』と訊いて見た。

『ハイ、サア〜どうかお這入り遊ばせ。』と内から津磨子の母親の聲がした、『楠本さんでゐらつしやいますか？ 御案内致しませう。あの、津磨子や、楠本さんがお風呂だと仰しやるよ。御案内申しな。——どうか臺所の方へお廻り下さいませ。』

亨助は左關から出て臺所へ廻つた。臺所には津磨子が白いエプロンを胸にかけて待つてゐた。亨助の姿を見ると、はしやいだ聲で、

『お石鱈はお持ちですか？』と訊いた。

『石鱈は持つてゐますが、手拭を貸して呉れませんか？』

『お手拭？』

さう云ふと津磨子はあたふたと奥の方へ駆け上つて行つた。

『お母さん、手拭！ 楠本さんがね、お使ひになるのよ。』

甘えた浮いた高い聲が響いた。

津磨子は手拭を持つて來て亨助に渡してから、風呂のあると云ふ家へ案内した。二人は黙つて歩いた。亨助は無論口がきゝたかつただけれど、巧い言葉が見つからなかつた。

『月でも出てゐたら好いでせうね?』

彼れはやつとこれだけの事を云つて見た。

『え、月の晩はほんとに綺麗でございますわ。』

津磨子も僅かにこれだけを答へて、黙つてうつむき加減に歩いた。

月はなかつたけれど蒼白い色が仄かに四邊をこめてゐた。晝の雲が少し破れて、星が二つ三つ顔を出してゐる。風がないので、松の黒い姿が、息を殺して凝と立ち盡してゐるやうに見える。波の音さへしない。たゞ、砂を踏む二人の登音だけが霜に飽和された冬の夜の空気を微かに震はせる。二人のつく息が白く凍つた。

家は寮舎の筋向ひの松林の中にあつた。一間半ばかりの間口があつて、入口の土間に据風呂をおいて下に板が敷いてあつた。無論戸などを立て、團ひがしてあるのではなく、野天風呂と大差は無い。上り端には暗い五分心のランプが吊してあつて、其下に穢い老婆が子供を抱いて座つてゐる。

『小母さん、もうお一人入れて戴きますわ。』と津磨子が老婆に聲をかけた。

『さあ。』——けれどお待ち、微温いかも知れないから。』

都會に育つた亨助は、見ただけで既に風呂に這入る勇氣が無くなつてゐた。併しこゝまで來て這入らずに歸るわけにも行かないので、一度だけでも湯につかつて直ぐあがらうと思つたので、『なに微温くても構ひませんよ、微温い方が好きですから。』

それでも老婆は子供を津磨子に預けて、立ちあがつて湯加減を見たり火をかきたてたりした。

『あんまり微温うござんすから、少しお待ちなされ。』

老婆はさう云つて留めてから、津磨子の抱いてあやしてゐた赤ン坊を受け取つてもとの所に座つた。

亨助は仕方なしに津磨子の竹んでゐる傍に腰をかけた。

『貴方は女學校へは行かなかつたんですか?』

彼れは會話の切り出しやうが無かつたので、既に判つてゐる事を彼女に尋ねて見た。

津磨子も亨助と並んで腰をかけた。

『え、姉の方は女學校を出しましたけれど、私はからだが悪かつたので行けませんでした。姉は大抵東京に居りましたが、私はほんとに田舎者ですわ。』

彼女はそんな事を云ひながら、うつむいてエプロンの端をまるめては伸ばした。

其内に老婆が、風呂の方へ向つて、

『どうだの、湯加減はよくなつたかの？』と云つた。

同時に風呂の中から聲がして何か答へた。亨助はおや！と思つて、風呂の方を見ると、湯氣の中からむく／＼と赤黒いものが擡つた。白い湯の煙にはかされて人らしい姿が髣髴した。赤黒い皮膚の、不恰な太肉で、頭髮のもちや／＼と束ねた點から、撫で肩の、胸のあたりがふつ／＼と擡つて、腹の所で狭くなつて腰に至つて急に大きく擴がつてゐる所を見ると、たしかに女のやうである。亨助は再び、這入る元氣が無くなつてしまつた。

湯氣の中の女は、風呂を出ると、絞つた手拭でざつと身體を撫で廻して、其儘亨助達のゐる前に來た。

『お待遠でござんした。御免なされ。』

さう云つて女は亨助の背ろの方へ手を伸ばした。亨助が氣がついて背ろを振り向くと、成程そこに薄磯い筒袖の着物が脱ぎ棄てゝある。

『さあ、もう宜しうござんせう。』と老婆が亨助を促した。

同時に津磨子が立ちあがつたので、彼れは嫌でも這入らなければならなくなつた。第一、津磨

子の前で裸體になるのがそも／＼の苦痛であつた。併し既に退引ならぬ場合なので、彼れは怖る／＼マントを脱いで帯を解き始めた。

『おや、面白いものを着てるさつしやるの。津磨ちゃんを着物かい？』と老婆が津磨子の顔を見た。

『え』と津磨子は亨助の横顔に媚びを含んだ眼を送つた。着換へを持つて來なかつた彼れは、着いた當夜に借りた津磨子の着物をいつまでも其儘着てゐたのである。

亨助は漸くの思ひで着物を脱ぎ棄て、風呂に漬つた。戸外の方を向いて凝と眼をつむつてゐると、湯氣が肩から頸の邊りにまつはつてゆるやかに立ち昇る。暫くして風呂を出ると、敷いてある板の上に立つて、其儘上つて了はうと手拭を絞り始めた。すると津磨子が傍に寄つて來た。

『お背中をお流し致しませう。』

『いゝえ、いゝんです。もうこれで出ますから。』

『でも皆さんお流し致しましたから、ざつと流させて戴きますわ。』

それでもとも云ひ兼ねたので、全身のむづがゆいやうな感じを抑へて、怖る／＼彼女の方へ脊を向けた。津磨子は裾を端折つて蹲んで、彼れの左肩に片手をかけた。



『好いおからだですわね。』と彼女は右手の手拭で脊中を濕し始めた。

一通り濕してから、手に石鹼をつけて、両手で靜かに皮膚を撫で始める。柔い感觸が、亨助の頸から肩へ肩から脊へとゆるやかに流れて行く。其間亨助は、自分の皮膚を舐る二つの手に津磨子と云ふ女の心臓の血の通つてゐる事を思つてゐた。

『これでも十五貫そこ〜ですよ。』

『マア、そんなことツて。——姉だつて十七貫近くはありますもの。』

『姉さんが？ そんなに肥つてゐるんですか？ ……姉さんと云へば、まだ歸らないんですか？』

『おほかたお正月を東京でして來るんでせう。いゝわ。私も東京へ行きたいわ。』

其時亨助は偶然思ひつきの言葉を見つけて、聲に笑を持たせた。

『あした一緒に行きませんか。』

『ほんとにさうだといゝんですけれど——』と脊中でも微かな笑ひ聲が起つた。

津磨子は石鹼をつけ終るとまた左手を肩にかけて右手の手拭で脊をこすり始めた。手拭のあたり所から白い雫が流れ出て、脊から腰のあたりを傳うて板の上に落ちる。こすつてゐる内に津磨子の息が弾んで來て、彈む息が亨助の脊にかゝると、彼れの神経は脊の皮膚に集つて、彈む息を

一つ〜受け取つて心臓に傳へた。

『もう澤山です。有難う。』

それでも彼女は直ぐには止めなかつた。暫くしてから、手拭で脊の石鹼を洗ひ落しながら桶の湯をそろ〜と肩から流した。

『お氣味が悪かつたでせう、御勘辨遊ばして。』

津磨子は漸く彼れの背ろを退いた。

亨助は、も一度湯に漬つてから出ると、洗ひもせずにもそこ〜にからだを拭いて着物を着た。

津磨子は手に石鹼函を持つて、外に待つてゐた。二人は少し間隔をおいて並んで寮舎へ向つて歩いた。寮舎までは小半丁も無い。松林の中の其の家を出て、海岸へ向ふ廣い砂道を斜に突切ると直ぐである。二人は出来るだけゆつくり歩いて、短い道を長くしなければならなかつた。そのくせ亨助は多くを語る事が出来なかつた。津磨子は低い聲で、自分の病身であつた爲に東京へ出られなかつた事や、東京の友達からは何故來ないのかなどとよく手紙をよこした事などを彼れに話した。話した最後に、

『わたし、お友達が少いので——』と云ひ添へた。

其の言葉から言葉以上の意味を汲み取つた享助は、何んとか自分の氣持を上品に且つ端的に云ひ現す言葉を考へたけれど、生憎そんな都合のいゝ言葉は即座には出て來なかつた。彼れが何んとか云はうと考へてゐる内に二人は既に寮舎の前まで來てゐた。仕方なしに彼れはたゞ、『有難う。』と挨拶して、臺所に入る彼女と別れて、物足らぬ心を玄關から部屋に運んだ。

翌日は快晴で、風もなく暖かであつた。享助は岡田と二人で朝七時頃寮舎を出て北條から船に乗つた。

『四月のお休みにはまたお越し下さいませ。』と津磨子の母は二人を玄關に送つて出た時丁寧にお辭儀をしながら云つた。津磨子は母親の背ろに慎しやかに膝をついてゐた。

海は青く暖かさうに光つてゐた。二人は甲板に毛布を敷いて日光浴をしながら寝轉んだ。船はコト／＼と小さな鼓動を立てゝゑるやうに東京へ向つた。船が靈岸島に着くまで六時間餘の間を享助は始終横になつて沈鬱な顔をして何事か頻りに考へ込んだまゝ、連れの岡田と殆んど口もきかなかつた。

二

船から上つて電車に乗つて本郷へ來た時は、もう街には軒燈が仄赤い光を點じてゐた。彼れは電車を降りて岡田と別れると直ぐ學校の門を潜つた。校舎の横を通つて寄宿寮の方へ歩いて行く途中、二人三人の寮生の影が見えたゞけで、平生に引換へて閑寂たるものであつた。十一日から授業は始まつてゐる筈なのに？——と彼れは一寸不思議に思ひ乍ら自分の寮舎の玄關に足をかけた。其時寮歌をうたふ大きな胴間聲が寮内から玄關の方へ近づいて來た。聞き覚えのある聲だなどと思つてゐると、廣野がひよつこり現れた。

『よう、楠本か、いつ歸つた？』と元氣よく聲をかけた。

『今歸つた。』と享助も聲だけは元氣よく答へた。

廣野は制帽を被つて風呂敷包みを抱へてゐる。

『どこかへ出かけるのか？』

『うん、明日が休み、明後日が日曜だから、これから浦和の家へ行つて來ようと思つて——』

『明日休み？』

『休みぢやないか、忘れたのか。』

亨助は寮生が殆んどゐない理由に気がついた。

『それで何日歸るんだい？』

『無論日曜の晩には歸つて來る。』

『誰れか他にゐるかい？』

『大抵出かけてゐないぞ。』

廣野はさう云ひ棄てて出て行つた。亨助は明かに不安の色を顔に現して寮室に這入つた。今夜と明夜の二晩を人の居ない空家のやうな寢室で過さねばならぬかと思ふと怖ろしくなつた。友達の家にも泊りに行かうかと云ふ弱い氣も出たが、併し人氣の無い寂寥な所で外的な刺戟から逃れて良心の苛責を鋭く感ずる事にのみ此場合唯一の救ひがあると思ひ返して覺悟を決めた。

彼れは早速お冬の處へ葉書を一枚書いた。今東京に歸つた、いづれ其内歸宅する、と云ふ簡単な意味であつた。

人のゐない廣い寮室には四個の電燈だけが明るくついてゐた。室外には既に黒い闇と寒氣とが迫つてゐた。スチームが僅かに室内の空氣を温めてゐた。亨助は、スチームと電燈とで辛うじて人間の住む世界が形成されてゐるやうな氣がして心細かつた。

彼れは葉書を書き終ると、それを寮内のポストに入れて來てから、鞆の荷物を取り出して整理をし始めた。荷の大半は書物であつた。滞在中其の書物の中の一冊のビルグリムス・プログレスだけを僅かに二十頁程讀んだに過ぎなかつた事を思ひ出して、彼れは苦笑した。本は机上の本立に入れて、半分空になつた鞆は二階の寢室の衣服棚へ載せて來た。

亨助は椅子を外して床に跪いて、机の上に兩肘をかけて頂垂れた。約二十分を其の姿勢で過した。其間幾度か軽い溜息をついた。最後に彼れは『はあーつ』と大きな絶望的な吐息を洩らして立ち上つた。椅子を引寄せてどたりと腰を下すと、上半身を机に投げかけて突臥した。

亨助は無意識ながら既に少年時代に於て所謂人生と云ふものに或る考へを向けた。向けたと云ふよりも、生れ落つると間もなく彼れを弄び始めた運命は、少年時に至つて否應なしに彼れを驅つて人生に或る考へを向けずには居られなくさせたのである。従つて彼れの考へは消極的であつた。彼はたゞ人生に懷疑の眼を向けてむしろ之を呪つた。さうして躓いた。躓いて再び起つ事の

出来ぬ死地に横はつた時、突如として伯母の出現は彼れに回生の光を與へた。伯母は彼れを勵まして、一旦退學した中學校へ復校すべく説得した。既に四月の末で新學年も過ぎてゐた上に、亨助の名こそ出なかつたけれど「暗い過去」に物語られた淺草行田裏の喧嘩と狭山の殺害及びその加害者の五夜子の死は新聞に報ぜられて事件は世間に知れ渡つてゐたし、亨助自身も執行猶豫とは云へ兎も角刑の宣告を受けたのであるから、孰れにしても復校と云ふ事は困難であつたけれど、伯母が校長其他の教師を訪問して運動したので、それに校長が抱容力のある親分肌の人で且つ在校時代の亨助の特質をよく認めてゐたので、辛うじて彼れは學校に籍を復する事が出来た。而も形式上の學年試験を経て直ちに四年級に進入する事を得た。こゝで彼れは猛然と奮起した。伯母の突然の出現と斯うした自分の再起とを亡き母の愛と結びつけて考へざるを得なかつた彼れは、伯母のため亡母のため是が非でも豪くならねばならぬ、それが自分を虐けた運命に對する「復讐」であると云ふ考へに支配され始めた。彼れは始めて人生に積極的な第一步を踏み出したのであつた。さうして同時にまた彼れはこの歩みを確實にする爲の哲學を考へ始めた。亨助は先づ自己の存在を前提として、人生の全意義は此の自己を出来るだけ發展させるにあると單純に考へた。併し同時に自己發展の己が力の貧弱なるを意識せざるを得なかつた彼れは、この力は自己以

外の他に求めなければならぬと考へた。それで彼れは宗教を求めた。かう云ふ心的經路を採る求道者が普通誰れでも試みるやうに彼れは先づ最初に禪門を叩いた。彼れは禪學の書などを買つて來て耽讀しながら、毎朝跣座して禪道修業の眞似事を始めた。其内に誰れか禪僧を訪ねて指導を受けようと思つてゐる内に、ふと自分の中學の先生の所に遊びに行つて、雜誌の内に宗教の話を持ち出したら、先生が「眞理の源泉」と云ふ本を出して、讀んで見ると云つて貸して呉れた。それには佛人ウルヴァン述としてあつた。歸つて讀んで見ると、宇宙の物理的組織を通俗的に述べたり常識的な哲學を説いたりして神や靈魂の存在を證明してあつた。面白いなと思つて讀んで行く内に、聽て基督托身論となり、天國地獄の説となり、比較宗教論となり、つひに基督教特に其の正系傳統たるカトリック以外に眞の宗教は無いと云ふ結論になつた。讀み終つて亨助は、何んの事だと思つた。自己發展の力としての宗教を求めてゐた彼れは、必然基督教を問題にしてゐなかつた。基督は自己發展を教へずして自己犠牲を説いたものであると知つてゐたからである。彼れは通俗な理屈に操られて巧く欺されたやうな氣がした。其次に先生を訪問した時、正直な感想も云へないので、たゞ面白かつたと云つて本を返した。先生は、道理が腑に落ちたかと訊いた。彼れは、それには答へないで、此の著者はどう云ふ人ですかと訊き返すと、もう四十年以上日本に